

---

# **とある私の物語～ネギまに転生ですか？～**

lapaid

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

### 【Zコード】

Z5019Y

### 【作者名】

lapaid

### 【あらすじ】

ある日私は真っ白い空間にいました。そこには自称神と名乗る人物が。

話を聞けば転生させてくれるそうです。何でも神様のミスだとか。所謂テンプレってやつですかね？

希望を聞いてもらつて、向かう世界は「魔法先生ネギま！」だそうです。まあ、魔法やらなんやらで危険ではありますが、楽しめそうではありますね。

田が覚めると……えつ？なにこの設定？いや、悪いことは言こませんけど……ハア…

初投稿です。アンチ、チート、原作改編、自己流解釈など結構やらかしますので気を付けて下せー。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですがお楽しみ頂ければ…

## プロローグ

「知らない天井ですね。」

取り敢えずいつてみたかったこの台詞。  
周りを見回しますが真っ白です。何もありません。距離感がおかしくなりそうです。

「どうか、何故こんなにいるのでしょうか？」

それに、もう一人が居なのです。

「すまんのう……」は何処でも無い場所じゃ。」

いきなり「いかにも」な方が現れました。  
驚きましたよ。

「その通り。儂は神じや。」

「GODの神ですか?なんにせよ説明を頂きたいのですが。」

「ここは本来死ぬべきではない人物の来る場所じや。」

「本来死ぬべきではないとは?」

「儂は名前こそ無いが最高神での。部下がミスをして本来寿命でない人がここに来るのじや。」

「役所が個人を管理していた書類をシュレッダーにかけて再起不能

になつたつて感じですか?「

「そんな感じじやの。とこつかお主の言つた出来事のままじやが。」

「うわあ……でもなんか……うわあ……

「セイは申し訳ない。セイ、セイに来た人物は主に三通りの選択肢があるだい。」

「三通りですか。」

「うむ。

「一つ田はまのまま天国に行く」とじや。普通の輪廻に交じるところじや。

二つ田はまじで仕事をする。下級神となつて、人の管理をする。もつとも、ワーカホリック位しか選ばんがの。

そして三つ田、一次元の世界に転生する」とじや。

「では三つ田で。」

「早いの?…まあどれを選ぶも個人の自由じやからの。こく世界は決まっておるが良いかの?これは決めた後にしか伝えられんのじやが。」

「ええ。三つ田でお願ひします。」

「ふむ…行く世界は『魔法先生ネギまー』じや。お主の記憶を見たが、この世界を知つておるようじやの。」

それで、じゃ。行くに当たつて希望したいことはあるかの?三つまでなら聞くぞい?」

「おつと、先に言つておぐが、氣や魔力は最初は平均より高めじや。特訓すればしだけ伸びるようになつておるぞ。あとは不老じや。」

「おつと、先に言つておぐが、氣や魔力は最初は平均より高めじや。特訓すればしだけ伸びるようになつておるぞ。あとは不老じや。」

「20歳からの不老じやの。」

「意外とありがたいサービスがついていた！ とするとまずは…」

「東方 Project のハ雲紫の能力、『境界を操る程度の能力』をもらえますか？」

「ほつ…なかなか良いのを選んだのう…それに見合つだけの演算能力もつけよつ。」

「これはありがたい。

「では…『魔法先生ネギまー』の世界の魔法や氣の知識を頂けますか？」

「知識だけだと使用はできんのじやが、良いかの？」

「それは特訓すればいいんでしょ？」

「その通りじや。使用出来る状態からスタートも出来るんじやが、それでも良いかの？」

「ええ。構いません。自分で特訓するのが好きなので。3つ目ですが、原作の大戦に関われるよつこしてもらえますか？」

「なるほど……了解じゃ。もう一人はちゃんとこるから安心してもよいわ。」

「元気には居ないですか？」

「向こうに着いたらわかるでしょ。」

「やうですか。」

心を読まれたのはサラッと流す。

「ではお主を送るから。ゆっくりと世界を楽しんで来るがよい。」

神の言葉を最後に、私は意識が落ちた。

## （麻帆良武道会）

「こんにちは。転生した「私」です。  
確かに大戦に関われるようにしてもらえますか?」と言いましたよ。  
言いましたとも。

ですが

「ユニーが麻帆良か~すげえな!強いやつと戦えるぜー。」

横にいるコイツ、誰だと思います?

そうですよ。ナギ・スプリングフィールドですよ。

「戦いたいのは分かつたから。エントリーしに行きますよ。」

「そうだつたな!んでユキ、何処か分かるか?」

「ガイドブック読めばわかるでしょうに…向こうですね。それっぽい人もいますし。」

私の名前はユキ・スプリングフィールド。ナギの双子の姉として生まれました。

ちなみに転生したというのが分かつたのは5歳の時、それから『境界を操る程度の能力』が使えるようになりました。

で、私は10歳で魔法学校を卒業、旅に出て行方をくらませようかとしたらナギが中退してついてきました。

あ、卒業後の課題はなかったですよ?あの仕組みは大方大戦後に出来たんでしょう。

行方をくらませよつたとした理由は単純で、能力を手に入れたのをごまかそつかと思つたんです。

どうせじばりくしたらゲートポートに行つて魔法世界に行くんでその時にもやりますが。

「ドンッ！」

「あ、すみません…」

考え事をしていたのでぶつかつてしましました。見上げると若い青年です。大きな野太刀を背負つていますが。

「いやらしさすまなかつた。考え事をしていたもので。」

「おーお前強そうだな！武道会に参加するのか？」

「ああ、そのつもりさ。君たちはどうするんだい？」

「私たちも参加するつもりです。貴方とは当たりたくないですね。中々の手練れのよつなので。」

「はは。そう言つてもらえると嬉しいね。」

「俺は戦つてみたいぜ！お前、名前はなんだ？俺はナギ・スプリングフィールドだ！」

「私はユキ・スプリングフィールドです。」

「俺は青山詠春さ。それじゃ、健闘を祈るよ。」

そのまま軽く礼をして歩いて行きました。

詠春でしたか…まだ近衛では無かつたんですね。

そのまま歩いて行き、エントリーしました。ちなみに私が参加すると言つたときの参加者名簿をつけている人の驚き方は凄かったです。まあ、見た目はただの女の子ですからね。

さて…大会が始まりました。予選はバトロワ形式でした。一言で言

わせてもらひうと

「雑魚ばっかり」

でした。見た目で人を判断してはいけません、といふことを思い知らせましたよ。

んで、本戦です…が、結論から言います。私とナギ、詠春意外は雑魚でした。

私は『戦いの歌』で身体強化、そのまま肉弾戦に持ち込んで勝ちましたよ。準決勝の相手も軽くいなして、次が決勝戦です。さて、ナギ対詠春ですね…しつかり見ておきましょつか。

ナギはフットワークをいかして詠春の懷に潜ろうとします。が、詠春は野太刀を振るつて追い払い、そのまま神鳴流を決めようとします。あれは…斬空閃でしたか？

あ、ナギが障壁で防ぎました。やつと防御を覚えましたか。そんなやりとりがしばらく続きましたが、二人とも動きが止まりました。時間が押してくるからお互いに威力の高い技で決めるつもりですかね…

台詞が無いですって？結構離れてるから声が聞こえないんですよ。解説はもはや機能してないです。どういうことか？いや「すごい」だの「派手」だのしかいってないのですよ。

おや？ナギはあんちよこ見てますね。読唇術で…何々？「ベカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラ・プサトー！」って…なんの事か分からぬ？日本語にします。「百重千重と重なりて、走れよ稻妻！」ですよ。

ナギは「十の雷」、詠春は「雷光剣」、2つがぶつかって煙が上がります。

ゆづくりと煙が晴れていきます。立っているのは…ナギでしたか。審判が10カウントといひ、ナギの決勝進出が決まりました。

ナギが控室に戻ってきました。

「どーだ…勝つて…やつたぜ…」

息も切れ切れに話してきました。

「お疲れ様です。まあ良いじゃないですか。派手に壊したおかげで決勝は1時間後ですよ。」

「1時間あればなんとかなるぜ…絶対に勝つてやるからな…」

「私も負けるつもりは無いですよ?」

今はゆづくりと過ごしました。

「さあこりよによ麻帆良武道会も決勝戦…今までハイレベルな戦いを見てきましたが、ここで終わるのが惜しいくらいです!さあ、決勝戦の選手を紹介しましょう!先ずは一人目、ユキ・スプリングフィールド選手です!」

私がリングに上ると歓声が上がります。

「こまだ10歳の女の子ながら、敵を瞬殺する実力は本物です!ま

ともな試合を見ていない気がしますが、この試合ではどうなるでしょうか！

では「人田です！ナギ・スプリングフィールド選手です！」

ナギがリングに上ると、同じように歓声が上がります。

「こちらも一〇歳の少年ですが、先程は素晴らしい試合を見せてくれました！それまでの相手はほぼ瞬殺、やはり実力は本物です！そして、この二人は双子なのです！双子同士の戦いのどちらに軍配が上がるのか！」

「本気でいきますよ？」

「当然だ！俺が倒して優勝するぜ！」

「威勢は良いですね。私も優勝を狙うので。」

「それでは、試合…開始！」

「『戦いの歌』！」

お互に無詠唱での戦いの歌、一気に距離を詰めます。

拳を出して、受け流され、ナギが掌底。それは読んできますよ。そのまま手首を掴み、放り投げます。

放り投げたところまで一気に瞬動、回し蹴りで叩き落とします。

「グッ！」

ナギは背中から叩きつけられましたが、身体強化もあってそこまでダメージは無さそうです。そのまま立ち上りました。

「マンマンテロテロ…」

「…リラ・力・マギカ・ラ・エレメンタ…」

呪文詠唱は予想外でした…すぐに始動キーを唱えます。

「来たれ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐…」

「来たれ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け常夜の冰雪…」

「『雷の暴風』！」

「『闇の吹雪』！」

ドオン！

「くつ…！『魔法の射手 連弾 光の10矢 水の10矢』！」

爆風で吹き飛ばされながらも、魔法の射手で反撃。雷の暴風は打ち消しきれなかつたですからね…！」

「うお…？お返しだ！『魔法の射手 連弾 雷の20矢』！」

ナギも黙つてやられるわけもなく、打ち返してきました。最初の1、2発当たつただけ良しとしましょう。

チラッと残り時間を見ますが、もう2分もありません。ナギに目配せすると、すぐに理解してくれました。

「マンマンテロテロ…契約により、我に従え高殿の王、来たれ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆」

「リラ・力・マギカ・ラ・エレメンタ…契約により、我に従え炎の霸王、来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄」

「百重千重と重なりて、走れよ稻妻！」  
「罪ありし者を死の塵に！」

「『千の雷』！」  
「『燃える天空』！」

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオン！

轟音と共に、凄まじい爆発が起きました。  
急いで障壁を張り、衝撃と爆風を防ぎます。

「タイムアップ！」

煙が晴れていきます。ナギは立っていました。

「な、なんと！両者とも無事です！今回の優勝者は一人！ユキ・ス  
プリングフィールド選手とナギ・スプリングフィールド選手です！」

「ちえー…引き分けかあ…」

「全くです…ま、負けなかつたんですけどね？」  
「納得はできないけど、仕方ねえな。」

## ～都合主義～

SHDEユキ

どうも、ユキ・スプリングフィールドです。

えー…只今トルコのイスタンブール、魔法世界へのゲートポートです。

武道会が終わって、ナギと詠春が意気投合、その流れで『魔法世界』に行こう!って成りました。

まもなく準備が完了するはずですが……お?

巨大な魔法陣が現れました。いよいよ転送ですかね?…って私だけ別に魔法陣!…どういうこと!?

考えを巡らせるまもなく転移されました。

ガサツ

痛たた…えーつとここは森?何故に?Why?

混乱してこらへ、ヒカラと一枚紙が落ちてきました。手にittてみます。

『じつじや～ネギまの世界を満喫しどのか～といつてもまだ大戦すら始まつて無いんじやがの～。

今回はちょっとしたサービスじゃ。お主は『境界を操る程度の能力の練習がまるで出来んかったじやろ～ひでナギや詠春とは別に転移をせてもらつただい。

ただこれだけだとサービスにも何にもなつておらんじやろ～から、ダイオラマ魔法球を送つとくぞい。なんと外の1時間が中での1年になると重つものじや。

さういふお主が認めぬ限つは見る」とも触れる」とも出来ん特別製じやー。

もううん中の環境は整えてあるぞ? 食料は10年分はあるから。職業は適当に探してくれの。

なお、この手紙は読み終えたら自動的に消滅するぞ。

そのまま手紙は存在が薄くなり、消えてしまった。

ドサッ

田の前に落ちてましたよ。魔法球。手のひらサイズ。

えーっと、状況を整理すると…

・ナギたちと別行動に

・魔法球（特別製）GET！

・職業は自分で探せ

つてことですか…

(……い……おい…)

「ふえつ…?」

いきなり声が聞こえました。なんなんでしょう…

(俺がわからねえのか？お前のこいつ「もう一人」だよ…)

(あ…あなたでしたか…びっくりしたんですよ?)

(何が「あなたでしたか」だよ…つたぐ、すっかり俺のこと忘れやがって…)

(こや、気にならなかつたところが何とこつか…)

(正直に言えよ…忘れてたんだろ？いい加減俺も表にでるぞ…)

(わかりましたよ……暴れないでくださいね?)

(わーかつてゐよそのへりご。)

「ふう……久しぶりに表に出たぜ……」

(しようがないでしよう……あなたが表に出る機会が無かつたんですから……)

「お? こんなとこに女のガキがいるぜ! -」

「いいじやねえか! 身ぐるみ剥いて慰み物にしてやろうぜ! -」

(ちよつどその機会がやつて來たぜ)

(程ほどこしてくださいや……)

ん? 僕が誰か、だつて? まあ後で説明するから待つてくれ。

数は……5人。野盗の類か?

「だーれが好んで慰み物になるか。さつさと滅べ。『凍つぐ氷極』

!

パキン!

氷付け……だが3人か。無詠唱なら上出来か?

「「なつ……」」

おーおー畠然としてやがる。まさか10歳のガキがこんな呪文使えるとは思ってなかつたか？

俺は浮遊術を使って空中に飛び上がる。が、アイツらはポカーンとしてやがる。逆に腹がたつな。

「追つてこれねえとは情けねえなあ！ま、お前らはここで死ぬ運命をー！」

俺の名前は零崎雪織！てめえらのきく最後の人間の名だ！」

（リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ　おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ）

頭の中で詠唱、口のくらには容易いもんだ。

「『冥府の石柱』！」

ドッ…ガガガガガ！

巨大な6角形の石柱が空洞を開けるように6本、閉じ込められたところにトドメの一本。そのまま下衆どもを押し潰した。つてゆーか

抵抗無しかよ。まあ抵抗してもどうにでもなつたがな。

一分待つたけど反応なし、こりや死んだな。

「ハツ…ちょろいな。」

(え、えー……)

さてと、適当に暴れて気分も晴れたから説明しようか。

俺とユキは同一人物で別人格。平たく言えば二重人格だ。

転生前、ユキは性同一性障害だった。その結果イジメを受けた。

何度もイジメを受けているうちに、ユキは女としての人格を生み出して、それが主人格になつたんだ。今思えばどんなレアケースだつて話だな。

んで、俺は半ば封じ込められたんだが、元々の人格は俺だ。何度も呼び掛けると、ユキの精神と繋がつた。

始めは会話が出来るのがやつとだつたが、その内に表に出る人格を操作出来るようになつた、つて訳だ。

んで何だかんだで転生したんだが、ユキが俺のことをすっかり忘れてやがつたから表に出るのが遅れた、つて感じだな。

以上、説明終了！

（まあ… もう良いですよ。それにしても零崎名乗るってどうなんですか？）

（別に良いだろうが。まさに裏人格って感じで。）

（ハア…）

なんか溜め息ばつかだな。ま、原因は俺だけだ。  
それと、これからどうすつかな…

～都合主義 part2～（前書き）

JRでもJR都合主義が発動

SHDEユキ

「さあて…殺して解して並べて揃えて晒してやんよー。」

(どうも…只今裏人格のユキ・スプリングフィールドです。

あ、大戦が始まったので私は「泉野雪」と名乗っています。)

ズドオン!

(あれから魔法球の中で西洋魔法の修行を5年程。おかげで大抵の魔法は無詠唱で使えるようになりました。)

ガガガガガガッ!

(その後は日本で神鳴流の修行。門外不出の『式の太刀』も教えてもらいました。

どうやったのですって?運が良かつただけなんですが。)

ピキ…パキ…

(何やら妖怪退治に失敗したのか今にも殺されそうになっていた子

供を助けたところ、青山家の一員だったんですね。取り敢えず保護して本山に向かいました。）

バリィイイイン！

（長に「なにか出来ることはないか？」と言われ、「神鳴流を教わりたい」と詫びと口が貰えたのです。約1年程で修めました。

それから再び魔法球にこもって、5年程咸卦法の修行をしました。居合い拳もつかえますよ~）

「あーあ。零崎終了か。」

（只今の職業は主に依頼されて賞金首を狩っています。エヴァ以外。主に雪織が。）

「わい、報告に行きますか。」

（あ、やつやつ。雪織は魔法…スキマも応用して姿を変えています。髪や瞳の色は黒色に、んでもって黒いローブを羽織ります。）

「スキマは…別にいいか。歩いていくか。」

(ちなみに得物は黒い鎌。これは魔法球レベルの金がかかっています。魔力や氣やらを最も流しやすい金属で出来た特別製。同じように刀も作りました。)

「ただもう少し歯心えのあるやつでも良かつたかな。」

(得物が鎌だから雪織は「漆黒の死神」なんて呼ばれます。私ですか?私は特に何もしてないので二つ名なんかありませんよ。)

「そんな感じで俺たちは過いじてゐる、って訳だ。」

(台詞といないで下をこよ…まあ山程喋つたので後は雪織に任せます。)

んで、さつきの戦闘だが、『雷の暴風』、『魔法の射手 連弾 光の101矢』、『おわるせかい』の3つだ。

実は『おわるせかい』は一段構えなんだぜ?

「としえのやみ、えいえんのひょうが」まで凍結、そのあとに碎くまでが一つの魔法だ。『こおるせかい』の場合は永久凍結するまでが一つの魔法、つてことだ。

つと、説明していく間に到着だ。

「依頼完了だ。」

「ふむ…これは報酬の5000ドルクマジヤ。それにしても見事な戦いぶりじゃったな。」

俺は取り残した場合金を一切受け取らない、絶対に後金にする、といつ一つの条件でいつも依頼を受けている。

依頼料は本来の手配金額の5割。希望すれば遺体現場につれていくことや、生け捕りも可にしている。その場合は手配金額の6割で依頼を受けている。

ちなみに指名手配されていない場合は依頼人に金額を決めてもらっている。

そのおかげか信用度はかなり高い。今回は依頼人が遠見の魔法が得意だったらしく、1から観察していたようだ。

「そりやどーも。次があつたら依頼してくれ。もっとも、いないかもしれんがな。」

俺は魔法世界を放浪している。理由はスキマ移動のためだ。

スキマ移動は一度見たことがある場合とない場合とで大きく難易度が変わる。

見たことがない場合は正確に座標を決める必要があるので、洞窟内等には開けないので。

適当に移動していると、新聞の記事が田に入つた。「次の戦闘は『紅き翼』の参加か！？」だと。

ちよつといいか。あの愚弟の顔と『紅き翼』<sup>ナギ</sup>の実力を見に行くかな。

～VS『紅き翼』～

S H D E ナギ

よう一・ナギ・スプリングフィールドだ！

俺は今、『紅き翼』って名前のギルド？で戦争で活躍している魔法使いだ！

メンバーは俺、旧世界からついてきてる詠春、途中で仲間になつたアルビレオ・イマに俺の師匠をしているゼクトの4人だ！アルは「重力魔法」が使えるし、ゼクトは見た目はガキだけどすげえ強い！

で、今は何をしてるかつーと、帝国側が撤退したら急に強い魔力を感じたから、そこに向かつてる途中だ。

今まで一番強く感じたから気になつてるんだ。

「む……？」

お師匠がなんか気づいたみたいだ。俺も田をこらすと、なんか黒っぽい人間が見える。

近づいた途端、そいつは口を開いた。

「てめえらが『紅き翼』か？」

女みたいな声だな。

「ああそりゃ。お前は何なんだ？」

「俺が何者か、ねえ。そこの白いローブを着た男、アルビレオ・イマ。気づいているんじゃねえか？」

「ええ…私の推測が正しければ、『漆黒の死神』、零崎雪織でしょうか？」

「なんじゃとーあの賞金首を狩つてているところ奴か！？」

「大正解だ。今回は帝国側からの依頼でな。『『紅き翼』の実力を見てこい』とのことだ。おっと、殺しは無し、って話だったがな。」

『漆黒の死神』って聞いたことねえけどなあ…

「じゃあお前は強いのか？」

「さあね。今回の目的はてめえらの実力を見る」と。1対1がいいか、1対多がいいか、選べ。」

随分上から目線で腹が立つな。

「おつと、逃げるのは無しだぜ『サムライマスター』青山詠春。もし背中を見せたら…」

「い！？

「い！？」

声の聞こえた方を向くと、アルの首に大鎌が添えてあつた。できる

な「イツ…

「わい、どうする?」

「いいも。1対1でやつてやひひじやねえか。」

「ふうん…じゅ、順番は俺が決める。アルビレオ・イマ、青山詠春、ゼクト、ナギ・スプリングフィールドの順だ。途中で手出しするなよ?」

「仕方あるまい…いつたん離れるや。」

お師匠と詠春、俺は一人から離れる。するとアイツもアルから離れた。

「ヒヤヒヤしましたよ…死ぬかと思いました。」

「俺は殺すなとは言われたが、根本が達成できそうにないなら手段は選ばん。精々あがけよ?『魔法の射手 連弾 閻の101矢』」

## SIDEユキ

一気に魔法の射手が向かつ。

「はつー!」

黒い球体…重力球か。まああれくらいなら普通に落とせるみな。

んでもって俺の方に飛ばしてきた。

「あらよつと」

ま、俺も使えるんだがな。重力球にたいして重力球をぶつけてかき消す。

そのまま虚空瞬動で懐に入る。

「『闇の吹雪』」

お？ 障壁はつたか。とはいえほぼゼロ距離攻撃は効いたみたいだ。 フラフラしてゐし俺を見失つたか。

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

「くつ……！」

命中、束縛成功。後は降参させるだけ。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ……おお地の底に眠る死者の 宮殿よ、我らの下に姿を現せ」

掌は上に向けて

「『冥府の石柱』つと…どうだ？ 降参か？」

「…無理ですね。降参です。」

ま、今の間に首を刈れば人生が終わつてたからな。当然と言えば当然か。

「まずは一勝。次だ。」

すべての魔法を解除。次にやつて来たのは詠春。

「俺は殺さないが、おまえらは殺す氣で来ていいんだぜ？」

影のゲートを利用して刀を取り出す。

「先手は譲つてやる。来な。」

「なら遠慮なく行くぞ。神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

バカでかい気の雷が落ちる。が、結界で防ぐ。ってか一回打つて動き止めたら無意味だろ。

「どうした？この程度か？」

無傷だし、挑発してやる。

「ならば！神鳴流奥義！斬魔剣　式の太刀！！」

「神鳴流奥義。斬魔剣　式の太刀」

式の太刀は式の太刀をぶつけることで相殺が出来る。

「なつ！？」

ま、どういう技か知ってるから防ぐことも出来るけどね。  
縮地で詠春の真後ろに移動。

「考え方する暇があるのか？神鳴流奥義　斬岩剣　式の太刀」

おもいつきり横薙ぎに振る。わざとだが。  
それをなんとか避けて、詠春が斬りかかってきた。防ぐよりこして、  
そのまま鍔迫り合いに。

「何故貴様が神鳴流を使える…！」

「自分で考えな。つと！」

わざと力を緩め、体制が崩れたところで鳩尾に掌底。

「グフツ！」

「神鳴流奥義 雷鳴剣」

吹っ飛んだといひに雷鳴剣、そのまま直撃。これより威力あげたら死ぬからな。

一気に移動して詠春を掴み、アルに向かつて放り投げる。

「軽度の全身火傷。適当に治療しどけ。次」

ゼクトか…戦法は無詠唱の中火力魔法の連発だったか？

「お主は出来るようじやからの…油断はせんぞ！」

「おつとー！」

いきなり飛んできたのは熱線。『燃える天空』かよ。  
かと思えば次構えてるし。

「『雷の暴風』…」

「『闇の吹雪』…」

相殺、爆煙が上がるが正直なところ油断は出来ない。といつわけで

「『冥府の石柱』！」

といひ構わず石柱投擲。さて…

「む…『最強防護』！」

当たり。声が聞こえれば位置は分かる。一気に瞬動で後ろに移動。

「…『障壁突破 雷の斧』」

「な…ぐつー」

もろに命中。まあ死なない程度に威力は調節してある。

(『斬魔剣 式の太刀』だつたら死んでますしね。)  
(なにしてたんだ? 今の今まで黙つて。)  
(ちょっとした精神統一ですよ。)

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

んで拘束。そのまま鎌を突き付ける。

「これにて終了、か?」

「じゃの…手も足もでんわい。」

といつかこの状況から反撃出来る人がいたら見てみたいもんだ。  
(その前にあなたは首を落としてるでしょう~)  
(まあな。)

「さて… 最後。ナギ・スプリングフィールド。てめえだ。」

「はつ…今までの仇、返してやるぜー。」

「出来るんならやってみな。」

「行くぜー!『雷の暴風』!」

結界を張つて受け止める。

つーか術式適当だな…バカみたいな魔力で強引に発動してるだけだろ?

(ムラがかなりありますしね。この際実力差をはつきりさせてはどうですか?)  
(だな。)

影のゲートでナギの真後ろに転移。

「ねえ。」

「なん…ブヘツ!」

ただ単に殴つただけです。あ、雪ですよ?ゲートの時に入れ替わりました。

「あなたが打てる中で一番威力が高い技を打つてください。相殺してあげます。」

「なーいつたなてめえ!やつてやる!じやねーか!」

ブツブツと呴えてます。『千の雷』以外あり得ないわけですが。

「行くぜー！『千の雷』！…」

「『雷の暴風』！」

普通なら『雷の暴風』はかき消され、『千の雷』が私に直撃します。が、

「なつー！？」

魔法陣見て威力が薄くなるところを計算して打ちました。結果、相殺してお互いの魔法が消えました。

今度は瞬動で移動、刀を首に突きつけます。

「弱い。」

「くつ…」

かくして、『紅き翼』との戦闘は私と雪織の勝利に終わりました。

さて、事情を説明しますかね……

## 「VS『紅き翼』」（後書き）

戦闘です…が正直上手く書けません…  
なにかアドバイスがあればお願ひします！

それからアンケートです。

今は大戦期なわけですが、そのうち原作本編に入ります。そこで、  
麻帆良でのユキの立場をアンケートしたいと思います。

- 1 教師
  - 2 女子寮管理人
  - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから選んで下さい。  
一人一票をお願いします。

期限はユキが麻帆良につくまで…結構時間はあります。

THE・説明 (前書き)

アンケート実施中です！

ユキの麻帆良での立場について。

- 1 教師
  - 2 女子寮管理人
  - 3 喫茶店などの店主
- 以上の三つから選んでください！

## ～THE・説明～

### SHDEユキ

「ま、実力も分かったことですし。ネタばらしとしましょーつか。」

「は？」

私はフードを外し、長い髪を外に出す。ナギと同じ、赤毛の髪。

「な……な……」

呆然として声が出てませんね。当然と言えばそうですが。

「さて、ナギ・スプリングフィールド。私は誰でしょーつ？」

「ユキ……なのか……？」

まるであり得ない物を見たかのような表情。

「ええ、その通り。私はユキ・スプリングフィールド。あなたの双子の姉ですよ。」

「グスツ……良かつた……もう5年以上も経つて……戦争が始まつて……ズッ……ずっと会えねえのかと思つて……」

あらあら……泣き出しましたか。

「『』免なさい。辛かつたでしょーつ?だから良いのよ~強がらなくて。

「

ふんわりと優しく抱き締める。

「だから今はお姉ちゃんに甘えて？大丈夫。顔は見えないから。」

「う…あああああ…」

「数十分後、『紅き翼』基地にて  
『さて…説明してもらえますか?』

そう切り出したのはアルビレオ・イマ。  
ちなみにナギは隅っこで膝を抱えています。恥ずかしかつたんですね。

「ええ。私はユキ・スプリングフィールド。先ほど会話通り、ナギの双子の姉です。」

「では、ナギが『会えない』と言つたのは何故でしょうか?」

「5、6年ほど前に、ゲートポート関連の事故がありました  
か?」

「いえ、そのような話は聞いたことありませんが…」

「すると揉み消されたのでしょうか…私はナギ、詠春と一緒に魔  
法世界を回るつもりでした。」

「つむり、とは？」

「何が起こうたのかは分かりませんが、私は転移の際、全く知らない森に飛ばされました。」

このあたりから嘘ばつかりになりますが。正直仕方ありません。

「とは言えここは魔法世界のどこかだろう、そう思って散策していると誰かは忘れましたが、賞金首に会いました。

襲われそうになつたので私は反撃しました。幸い私の実力を見誤つたソイツを無力化することができました。

で、どうしようかと考えているとどこからともなく人がやつてきました。説明を聞いて、ソイツが賞金首であることを知りました。

お陰で私は身に余るほどの大金を手に入れましたが、さすがに持ち運びが大変です。というわけで大半を使って24倍ダイオラマ魔法球につき込みました。」

「なんとこゝか…無茶苦茶ですね。」

「まったくですね。自分でも信じられない位です。まあ、かなりの金額があまりましたが、生きるために働いて金を稼ぐことが必要です。

とはいっても10歳の体ではほとんどなにも出来ません。というかそれともうされません。そこでかなりの年数魔法球に閉じ籠りました。

「

「食料はどうしたんじや？」

「最初に大量にお金を払つたのでなんとかなりました。で、魔法球の中ではひたすら魔法研究に取り組みました。

そしてある日のことですが、研究中の魔法を暴発させてしまいました。その結果としてですが、もう一人の私である雪織が生まれ、不老になり、さらにほんとこなことが出来るようになりました。

「うおっ！？」

スキマで詠春の前に手首から先だけ出してみました。予想以上の驚きっぷりですね。

「魔力などは一切感じんかったが、空間操作かの？」

「いや、これだけ見るとそうですが、詠春、水の入った容器はありますか？」

「なんに使うのかは知らんが…ほひ。」

キヤッチして弄つてリリース。

「熱つー！？」

「概念操作とでも言いますか。言つならば『境界を操る程度の能力』が手に入りました。」

「チートですか…といひで何故『程度』とつけているのですか？」

「出来る範囲が限られてるみたいですし。後は気分です。」

まあチート以外の何物でもないでしけどね。

「そうですか。」

「で、雪織が賞金首狩りを始めたんです。姿は私と区別をつけるために髪と田の色を黒色にしてます。」

「では俺からだが。何故神鳴流を使えるんだ？それも式の太刀まで。」

「

「あー…『泉野雪』って知っていますか？」

「うん？いつぞやに連絡があつたな。1年で神鳴流を修めたとか。」

「それ、私です。」

「なんだと…？」

「簡単に言つと暇潰しで京都に来てた時に青山家の人に助けた見返りとして教わりました。」

「そ、そつか…それで式の太刀まで使えるのか…」

「どこか納得いかない様子の詠春。ですが事実なので諦めて下さい。」

「お主の力では何が出来るのかの？」

「『境界』に関係する事象があれば大抵のことは出来ます。といふか何が出来て何が出来ないかは正確に把握してませんし。」

『屁理屈でもいいから境界を作れば弄れますし。死者蘇生と時間操作は出来ませんでしたが。

「んでユキは『紅き翼』に入るのか?」

お、ナギ復活。

「ええ、入りましょうか。」

こうして私は『紅き翼』に参加することになりました。

その後皆に私は『ユキ・スプリングフィールド』と名乗らず、『泉野雪』として名乗ることや雪織の性格や事情等を説明しました。

本名を言わない理由は「なんか嫌な予感がするから」とだけ言いました。まあ雪織が日本名なのもありますしね。

さて、戦争に入していくますか。

## ～グレート＝ブリッジ奪還作戦～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について。

- 1 教師
  - 2 女子寮管理人
  - 3 喫茶店などの店主
- 以上の三つから選んでください！

## ～グレー＝ブリッジ奪還作戦～

SHADEコキ

「は？ グレー＝ブリッジが落とされた？」

「ええ、やうなんです。」

どうも、泉野雪です。

私が『紅き翼』に参加してはや数ヶ月、あれから新たにジャック・ラカンが仲間になりました。

そして過ごしてきたところにこの一報。原作知識がなければ唖然とする以外にできそうにありませんでした。

アレの守りの固さは見ただけで分かるほどでしたから。

「一体何があつたんですか？ アレが落とされるなんてやうやう考えられませんが。」

「大規模転移魔法による不意討ちだそうじゃ。それで指揮系統が狂つたんじゃやうつの。」

「で、その手紙はつまり私たちにグレー＝ブリッジを奪還せよ、つてことが言いたいわけですね？」

「まあしへその通りです。」

「よつしゃあ…せつやとこつてちゅうひちゅと奪還だー。」

「おひー!俺様も存分に暴れてやるぜー。」

「バカ一人は黙つて下さー。作戦も無しに行くとか愚の骨頂でしょ  
うが。

アレの強みはブリッジを攻めれば上空から、上空を攻めればブリッ  
ジから攻撃できることですよね?」

「構造を見た限りではそつだらうな。とすると一手に別れるのが良  
いか?」

「ん~そうでしょうね。上空担当とブリッジ担当に別けて攻略する  
のが良いでしょ。」

「では上空担当はラカンと雪がやるのが良いでしょ?」

「妥当な線ですね。ラカンとナギを合わせたら化学反応起こして暴  
走しそうですし。ナギ、ゼクト、詠春、アルが4人で内部を攻略す  
る、ところ」とですね。」

「上空担当のお主ら二人がいかに上手くやるかじや の。」

「その辺は任せて下せー。ハエ一匹たりとも逃さないようにして戦  
つて見せましょ。」

「そーら、斬艦剣!」

いやせや。さすがラカンです。馬鹿デカイ剣を振り回して次々と戦艦を落としてこきます。

私はブリッジと上空を完全に分断するよつに結界を張つて攻撃をしています。ちなみに雪織はお休みです。

「『冥府の石柱』！『闇の吹雪』！」

私は戦艦に乗りりずに突撃しようとするやつを中級 上級魔法で撃ち落としてこます。結界を維持する必要があるので、さすがに広域殲滅魔法は使えません。

「『紅き焰』！『雷の暴風』！」

つーかやつをと撤退して欲しいですね。若しくはナギたちが早く奪還してもらいたいです。

「ははっ…さすがコキだな…じゃんじゃん無詠唱で唱えてやがる…」

「黙つて下さるラカン！結界を維持するのは辛いんですよー。」

『ユキーブレー＝ブリッジの奪還は成功だー今からやつちにいくぜー。』

『ちよつー待ちな』『ブツツ』……』

念話で成功報告の確認は良いんですが、いつに来る必要は無いんですけどね…

「まあいいです！ラカン！適当に離れなさいよ！」

結界を解除して、呪文詠唱開始。

“契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝”！

「あ、ヤベ！」

「『無限の光槍』！」

カツ！ズガガガガガガ！！！

光系の広域殲滅魔法、無数の巨大な光の槍が降り注ぐ魔法です。『おわるせかい』等とは違い、確実性はほんの少し下がりますが威力は遥かに上回ります。

「ふい～危なかつたぜ。」

「離れろといったでしょ！」

「聞こえなかつたんだぜ？お前の声が。」

「そうですか。まあ貴方なら大丈夫だと思いましたし。」

あ、帝国軍が引いていきます。さすがにアレで壊滅的なダメージを受けましたからね。

「いや、さすがに俺様でもお前の詠唱つきのアレは食らつたら死ねるぜ？」

「おーいゴキー！って終わってるじゃねえか！」

そしてナギ登場。ゼクト、アル、詠春も一緒に。

「勝手に念話を切るからです。来る必要は無いと言ふよ」としたんですね。

「またぐのう…少しは落着きを覚える馬鹿弟子が。」

グレー＝ブリッジの奪還後、私は『属性を統べる者』といつ一つ名がつきました。色々な属性魔法を打つてたからでしょうか？

後、ファンクラブが出来たそうです。以外と女性のファンが多いそうで…憧れでしょうか？

ただ、うわべだけを見るのは止めて欲しいですね。結局のところは人殺しですから…

## 「グレート＝ブリッジ奪還作戦」（後書き）

「オリジナル魔法」

『無限の光槍』

詠唱

”契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、  
永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝” 『無限の光槍』

説明

光属性の広域殲滅魔法。

上空から無数の光の槍が降り注ぐ魔法。

他の広域殲滅魔法と比べ、確実性はわずかに落ちるが、威力は他を  
はるかに上回る。

～『完全なる世界』、そして反逆者～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

～『完全なる世界』、そして反逆者～

SHIDEユキ

泉野雪です。

グレート＝ブリッジを奪還して早数ヶ月、辺境に飛ばされたりなん  
だりするのは分かつてましたんで皆に事情を説明、雪織に本来の職  
業である賞金首狩りをさせてました

時々帰つて来てみると、ついにかガトウとタカミチ君が仲間にな  
つてました。

取り敢えず自己紹介で『漆黒の死神』でもあることに驚かれました。

それから咸卦法と居合い拳使つたらまた驚かれました。ガトウは「  
まさか女性でやる人がいるとは…」、タカミチ君は「凄いです！」、  
他の人は「まあユキだからな。」といつ反応。

なんか最後の反応はムカつきましたよ。腹いせにラカンとナギをボ  
コボコにしてやりました。二人から勝負を挑まれたんですよ？間違  
つても私からは手を出してません。

さて、そんなこんなでガトウから連絡があつて、本国の首都に来て  
います。

「んで、協力者って誰なんだ？」

そこに歩いてくる男性…もとい

「マクゲル元老院議員！」

煩いですよ詠春。大声出さないで下さい。そもそも…

「いや、ワシちやう。主賓はあちらのお方だ。」

前後の口調の差がひどいですね。ま、それはともかく。階段を上つてくるのは一人の女性。

「ウエスペルタティア王国…アリカ王女だ。」

美人ですね。いやはや。んで、横にいるナギを見るとボーッとしてます。アレですね。一旦惚れつてやつでしょう。

一人一人自己紹介。そしてラカンは「気安く話しかけるな、下衆が。」と言われました。

さて、私の番です。

「お初にお目にかかりますアリカ王女殿下。私は泉野雪と申します。」

「おお…そなたが『属性を統べる者』か。」

「そう呼ばれていますが、所詮は一人の人間です。どうぞ宜しくお願いします。」

会合が終わり、暇な時間です。が、

「ワッハハハハハ！ 上手い事やりやがつて」んガキヤア！」

「ああ！？ なんの話だよ！…」

「とほけんじやねーよー あのお姫様トイチャイチャキヤイキヤイ  
お喋りしてたるーが！この色男が！」

「なにがイチャイチャだ、バカつ！ してねつつの…」

「何言つてんだよ。俺なんか『気安く話しかける な、下衆が』だ  
ぜ〜〜〜？ いやーありやイイ女だぜ。一本芯の通つたな」

「頭大丈夫かジャック？ マジかあんた？ 俺ああんなおつかねえ女、  
はじめて見たぞ？」

喧しい二人であること。ホントに。

「しかしよ、ウエスペルタティアの王女つてこたーアレか？ 例  
の姫子ちゃんの姉君つてことかよ？」

「いや、姫子ちゃんの事はなんか、話しひくいみ たいだつた

「へえ？ なんでだよ？」

「 知るかよ。俺だつて氣になつてんだつづーの 」

成長阻害や感情阻害の薬漬けにして自分の家族を兵器として利用し  
てるんですから。辛いはずが無いです。

ま、これについては黙つておきますが。

「今は協力を取り付けただけ良しとしまじょ。それよりもこの戦争が伸ばされていくようを感じる理由です。」

「誰かによって世界が滅ぼされようとしている、とこいつアレですか。」

「荒唐無稽な話では無いからな。俺たちも調べてはいるが…」

「少し私は色々な場所を見て回つて来ます。あなたたちは別に調べてみて下さい。」

「了解だ。」

馬鹿一人はさつきまでのは何だったのか、また言い合ひをしています。ヤレヤレですね。

よう、零崎雪織だ。

俺というイレギュラーのせいが、『完全なる世界』が見つかるのが遅れてしまつた。ナギとアリカのデータが今日で、すでに出掛けてしまつたようのが残念なところだ。

「『完全なる世界』？」  
〔ズサ・エンドレケイア〕

「ああ。その組織がこの戦争を長引かせている存在だ。奴等も馬鹿じや無いのか、クラスやらアリアドネーやら、『紅き翼』では到底行けない場所でようやく尻尾を掴めたぜ。」

「俺たちも帝国と連合がどじかで繋がっているといつ情報は入ったが…」

「ん、上々だ。どうやら中枢にまで奴等は入り込んでいるようだ。ガトウとタカミチはその方面から調べてみてくれ。それから…重大なのはこれだ。」

「俺が取り出したのは一枚のレポート。そこには一枚の男の[写真]と、『完全なる世界』との結び付きを調べあげた文章。

「おいおい、コイツは今の執政官じゃねえかーMMのナンバー2まで奴等の手が入ってんのか！？」

「ソースは確かだが、確実な証拠が無い。周囲には話すなよ？」

そしてナギがデータから帰つきました。

今はクドクドと詠春が説教します、が手元に一枚の紙を発見。

「ちよつと落ち着いて下さい詠春。ナギ、その紙は何ですか？」

「ん？これが？なんかアジトを荒らしてたら見つけたんだが…」

「ちょっと見せて…」

[写りだす立体映像、そして語られる内容。まさに「ビンゴ…」でかした…】

「え？ 何がだ？」

「後で説明しますー。コイツがあれば戦争は一気に終わらせますー。」

しかし私は焦り過ぎて、一つやることを忘れてしまっていました。

ガトウがマクゲル議員に連絡して、弾劾裁判の準備を進めることがなりました。

そして法務員とマクゲル議員に会いに来たわけですが…  
「法務員はまだいらっしゃらないのですか？」

「法務員は…来られぬことになった。」

「は？」

ミスつた！ 本物のマクゲル議員を保護するのを忘れていた！

「あれから少し考えたのだがね… 折角の勝ち戦だ…ここに来て水を指すのも…どうかと思つてね」

「はあ…」

「私の考えでは無い。そう考える者が多い」と  
「黙れ」

居合いで抜きで躊躇わざ首を狙う…が、手応えなし。幻影か…

「ちゅひ… ノキーお前何してるんだ！？」

「や、ひれました… ナギは気づきましたか？」

「ああ。お前マクゲル議員じゃねえな。何もんだ？」

「気付かれたか…」

服が破れ、白髪の青年が姿を現す。

「なつ…？」

「よくわかったね、千の呪文の男に属性を統べる者。こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要だね。」

トランシーバーを取りだそうとしたのを狙おうとしたが

「ぐう！」

どこから…？影のゲートか？

「わしだ！マクゲルだ！『紅き翼』から暗殺されそうになつた！奴等は帝国のスパイだ！ああ、うむ！奴等の仲間もだ…今も狙われている…軍に連絡を…」

やられた。みればもう一人がラカンとナギの相手をしている。

「君達にはここで退場してもいいよ。」

「本体は既に海の中、か…」

スキマを展開して強引に味方を全員基地に送る。

「覚えてなさい『<sup>ブリーメム</sup>1番田』。私たちの誰かが潰してあげるわ…」

驚いたような顔を見てから、私もスキマで逃げる。

それから程なくして、『紅き翼』には反逆者のレッテルが張られました。もつとも、

「昨日までの英雄が一転、反逆者か。ヌツフフ、人生は波乱万丈でなくつちゃな」

この馬鹿の思考は変わらぬようですが。

～『夜の迷宮』、救出～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

## ～『夜の迷宮』、救出～

SHADEコキ

どうも、泉野雪です。

『紅き翼』が反逆者となつて数日、ガトウ達と私の調査によつて、アリカ王女とヘラス帝国のテオドーラ皇女が『夜の迷宮』に閉じ込められていることが分かりました。

今は救助に向かうために作戦を考えているといひです。

「そもそも雪の能力があれば容易く出来るんじゃ無いのか？」

たしかに詠春の言つことは分かります。ですが、

「無理です。」

「何故だ？」

「私の能力は移動に使う場合、座標の計算がいるんです。行ったことが無い場所である上に遺跡の中となると…」

「座標の計算、ですか？」

「ええ。あの能力の移動はほとんど転移魔法と変わりません。魔力が不需要で詠唱も要りませんが。というか、そもそも一人がどこにいるのかが分かりませんし…」

「ふうむ…脱出には使えるのか？」

「ええ。それは可能です。」

「とすると、ナギとあなたで一人の救助、私たちは外からの敵を中に入れないようにする。いろんなところでしょうか？」

「それが最適解でしょう。では、明日に備えましょうか。」

作戦当日です。今は『夜の迷宮』が見える位置で、結界を張つて相手方に見えないようにしています。

「相変わらずお主の結界は反則じやの…」

「『見える』と『見えない』、その他もうもうの境界を弄つて作つてますから。」

「入り口の見張りは2人ですか…どうしますか?」

「出来れば私たちの相手があの2人と内部にいる奴になるようにして欲しいですね…無駄な体力は使いたくありませんし。」

「とすると…私たちが別の場所から攻撃を仕掛けるのが良いでしょうね。出来るだけ派手にやればそちらに集まるでしょう。」

と、ゼクトが転移の魔法陣を書いていますね。

「これで完成じゃ。今とは反対の位置、高度100メートルの場所

じゃの。」「

私とナギ以外の四人が魔法陣に乗りります。

「では、派手にやつて下さいよ?」

「おう!…まかせときな!」

「では…転移」

四人の姿が魔法陣と共に消えました。

ズ…ズン…

直後、ここからでも肉眼で見えるほどの大剣が出現しました。

「うひゃー!派手だな!」

「ラカンの『千の顔を持つ英雄』、斬艦剣ですね。では、こちらも行きますよナギ」

「おうよ!」

結界を解除。瞬間見張りの一人が気づきました。

「チッ…向こうは囮だつたか!」

飛んできたのは魔法の射手。ですがこの程度無問題です。

「『雷の投擲』!」

「咸卦法…居合い拳！」

ナギの『雷の投擲』が一人の心臓に突き刺さり、私の居合い拳がもう一人の首を折りました。

二人の息が無いのを横目で確認しつつ、中に突入です。

突入して早一時間、つていうかここ広すぎです！

「侵入者だ！」

「食い止め…」

パスッ

言い終わる前に刀で首を落としました。

「ひでえなお前…」

「聞く必要の無いことは聞きません。」

女王達の場所はここの中北部、もとい最深部だそうです。つていうかそう叫びながら襲いかかってきた馬鹿がいましたから。

「せめて苦しまないよ！」にしてあげてるんですよ……斬岩剣！』

ガラガラと音を立てながら壁が崩れますが、

「また外れ……いい加減にして欲しいですね…」

「やつだな…オラア…」  
ドゴン！

ナギが走り、魔力で強化した拳で壁を殴りました。煙が晴れていき  
ます。人影…！

「来たぜ、姫さん。」

「遅いぞ、我が騎士よ。」

「はあ… よつやく見つかりました。テオドリフ皇女は…？」

「ゲホッゲホッ… 妾は」「じやー」

半ば瓦礫に埋もれるよつてこるテオドリフ皇女発見。

手をつかんで引っ張り出します。

「お主「は」紅き翼」かの？」

「ええ。私は泉野雪です。」

「なんと…お主が『属性を統べる者』か！」

「ええ。やうですが今はとりあえず脱出しますよ。」

やつてスキマを地上に开く。

「な、なんじや」「れはー…」

あ、初めてみればこうなりますよね… なんたつて目玉だらけですもの。

「ナギ、アリカ王女とテオドラ皇女を連れて飛び込んで下さい。外に繋がってます。」

「ゴキはどうすんだ？」

「私は外にいる詠春達に伝えます。振動も聞こえないですし、終わってるでしょう。」

「そうか。じゃあ先に行ってるぜー。」

そのままナギは一人を連れて飛び込みました。テオドラ皇女が「イヤじやー！」

つて言つてましたけど大丈夫でしょう。

私はスキマを別に開いて、その中に入ります。

スキマの中で状況確認…あれ？ 敵兵の増軍？ 仕方ありませんか。

「おわー！ ゴキー！」

「ラカソーン？ とりあえず食い止めて。派手なので決めるから。」

呪文詠唱開始です。

「”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”！」

「イカソー離れるぞー！」

「『裁きの龍巻』ー。」

横向きに巨大な龍巻を打ち出すこの魔法。下手に属性魔法を打てばそのまま飲み込んで威力を上げ、そうでなくとも大量の真空刃が飛んでいく、風属性の広域殲滅魔法です。

「ふう…」

「やつあがじや。」

ゼクトに文句を言われましたが、適当に流しました。

その後はナギ達と合流、私たちは秘密基地に向かいました。

## ～『夜の迷宮』、救出～（後書き）

オリジナル魔法

『裁きの竜巻』

詠唱

”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”『裁きの竜巻』

風属性の広域殲滅魔法。

横向きの巨大な竜巻を打ち出す。弱い属性魔法は飲み込んで威力を上げる特徴を持ち、味方による強化も可能。

竜巻の内部は大量の真空刃が飛び交っているため、当たった物はあつという間にズタズタにされ、塵になる。

真空刃によつて切れない物はほとんど存在しない。ダイヤモンドでも真つ一つにしてしまう。

～『紅き翼』墓地にて～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

～『紅き翼』基地にて～

## SHADEゴキ

さて、アリカ王女とテオドラ皇女を救出し、秘密基地に戻つて来ました。

「何だ、『紅き翼』の秘密基地とはどんとこいかと思えば、掘立小屋ではないか！」

「逃亡者に何を期待してんだよこのジャリせ。」

「何だ貴様！無礼である！」

「へつへん。生憎ヘラス皇族には貸しあつても借りはないんですね。」

「何い？貴様何者だ！」

とまあ騒ぐ一人がいるわけですよ。

ただテオドラ皇女はまだ幼いので、どうもラカンがからかっているようにしか見えないので…

（いや、實際そうだろ。）

（おや久しぶりですね雪織。）

（てめえがずっと表に出でていたからだろが…暇なんだよ俺は。）

(そうですか。まあ後でちよこつとやつてあげますよ。)

そしてナギの方をみると、アリカ王女と話しています。

「じゃが…主と主の『紅き翼』は無敵なんじゃな?」

そして聞こえてきた会話。これは見ないと。

「世界全てが敵、良いではないか。こちらの兵はたったの8人、じやが最強の8人じゃ。」

「へつ…」

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が楯となり、剣となれ。」

「やれやれ…相変わらずおつかねえ姫さんだぜ…」

ナギがアリカ王女の前に跪きます。やつぱり様になりますね。

「いいぜ姫さん。俺の杖と翼、あんたに預けよ。」

原作での名シーン、やはり立ち会えるのは嬉しいですね。

「さてと…ナギがアリカ王女に忠誠を誓つたことですし、私も正体を明かしましょうか…」

「なんじや？」

「私は泉野雪、『属性を統べる者』。それであると同時に……」

黒いロープを羽織り、同時に魔法を使って姿を変える。

「零崎雪織、『漆黒の死神』でもあるので。」

おやあ？突然の事についてこれでねえな。

「じゃ、じゃが『漆黒の死神』は鎌を持っているところへ…どうな  
んじや？」

「鎌、かあ。これのことか？」

「ひつ……」

「おいおい…ただ出しただけでビビるなよ…まあ子供には恐ろしいか?

「それは…本物か？」

「ん？俺がどうこうじゃなくて、鎌が本物かどうかを聞くとはなあ。  
ま、こいつは本物だぜ？魔法発動体もあるしなあ。まあ…」

俺は一人にこの事を伝えるのもあつたが、別にやりたいこともある  
んだよ。

「久しぶりに派手にやりたくてなあ…ナギー・ラカン…」

「お？ やんのか？」

「いいじゃねえか！ 久しぶりにやつてやる！ じやねえのー！」

「たまには強い奴とやりてえんだよ。良いか？」

「あたりめえじゃねえか！」

「俺たちはまだお前に勝つてないんだぜ？ 断るわけねえだろ？」

「ハハッ！ じゃあやるつか！」

魔法球を取り出す。ちなみに時間差は24倍。

「こらなかでやるぞ。流石に外でやつたらどうしようもならねえからな。」

#### SIDEアル

突然雪織がナギとラカンの二人に勝負を仕掛けました。

私としても興味があつたので、魔法球に同行させてもらいました。ちなみにタカミチ少年が一緒についてきています。ハイレベルな戦いを見るのも良い経験になるでしょう、とは思ったのですが…

「ラカン・インパクトオ！」

「『雷の暴風』！」

「ハハハハ！ どうした？ その程度か！」

「バキ！ ドゴォン！」

どうもあの三人は周りへの被害を考えないようで、大量に流れ弾が

飛んできます。タカミチ少年はそれを避けるのに精一杯のようですが、かく言う私も重力魔法を使って流れ弾を落としているわけですが……

といふか雪織は規格外にも程があります。今だつて一人の攻撃を無詠唱の『冥府の石柱』で受け止めましたし……おかげで岩が大量に降つてきましたよ。

「『燃える天空』！」

「「ちよつー」」

ズドオン！

「だあ———てめえ雪織！殺す気か！？」

「！」の程度で死ぬタマジヤねえだろ！そうちもつ一発！

ズドオン！

いや、思わず突っ込みたくなりますが、広域殲滅魔法を躊躇なく打ち込む精神には、ですよ？

無詠唱とか魔力量についてはもう気にしないことにしています。あと適性属性についても。

彼女の適性属性を調べたら全てに適性がありましたよ。広域殲滅魔法は適性がないと使えませんが、彼女は全属性の広域殲滅魔法が使えますから……

なんというか、理不尽に思えるくらいです。バグとかチートとかで収まるんでしょうか？

そういうえばすっかり忘れていた事がありますね。この戦闘が終わったら、『半生の書』に記録をせてもらいましょうか。

## SIDEコキ

きつかり一日を魔法球の中で過ごして、外に出ました。ああ、そう言えば突然神様から手紙がきましたよ。内容は

「アルビレオ・イマの『半生の書』については、お主が事情を説明したように載るが。お主が転生者であると言えば真実が載るようになる手を加えたぞい。

このくらいのサービスはしどとんとの。それじゃ、元気での。」

という物でした。この手紙を読み終えた直後にアルから『半生の書』に載せてもらいか聞かれたので快諾しておきました。

あ、勝負の結果ですか？雪織が勝ちました。といか途中からスキマを使って理不尽な攻撃をしていましたからね…

そして今は

「ん~もつむつと魔力を多くしてみて？」

「ハイ…この位ですか？」

タカミチ少年を鍛えているところです。

機能の戦闘が終わってから、物凄くキラキラした目で

「僕を鍛えて下さい！」

つて言われたんですね…断るのもアレでしたので。

「もひ少し…もひ少し…ストップーその感覚よ。」

「ん…反発が凄いですけど…」

「一番反発が大きいことが魔力と氣が同量だつて事を示してるのはよ。」

「せうなんですか…でも何でそれが分かるんですか?」

「私も咸卦法を取得するために努力したからね。」

おかげで魔力や氣の量についてはほぼ完璧に測定が出来ます。

「それで、咸卦法を成功させるには『自分を無にする』必要があるんだけど…」

「それは分かるんですけど、イマイチ感覚がつかめなくって…」

「いわゆる『無我の極地』ね。こればっかりは上手く説明が出来ないからね…」

私は自分の中の境界を無くす」となんて楽にできますし。

「詠春と一緒に座禅を組むのが良いかしら?」

「座禅、ですか?」

「そう。アレは『無我の極地』に自分を追いやりつゝする一つの方

法だからね。」

「ナリですか……じゃあ今度一緒にやつてみます。」

「うそ。あ、あとまでは下手に他の事に手を出せなこよつとね。お元気ですか？」

「どうこいつですか？」

「これはまだタカミチ少年には分からぬいか。

「どうあれタカミチ君はガトウさんを師匠にしておるわけでしょ  
う?だからまずは『無音拳』と『咸卦法』をマスターする」と。  
下手に別の武術に手を出しても良いことは無いわ。」

「何故ですか?」

「うーん……簡単に言つと器用貧乏になる可能性が高いのよ。出来る  
だけ少ないことに集中して、極めるほつが強くなれる。  
私だって最初は魔法だけひたすら努力したのよ?」

「そりなんですか…分かりました!」

元気よく返事をしてくれました。

ま、なんかタカミチが強くなるのがはやくなるかも知れないけど、  
良いですかね。

～『紅き翼』墓地にて～（後書き）

タカミチ強化？

なんといつか中途半端な終わり方です…

## ～決戦～（前書き）

アンケート実施中です  
ユキの麻帆良での立場は…  
1 教師  
2 女子寮管理人  
3 喫茶室などの店主  
以上の3つから選んで下さい。

## ～決戦～

SHADEコキ

どつも、泉野雪です。

前話からおよそ半年…え? メタ発言をするな、ですか? 別に良いじゃないですかそのくらい。

「ホン。それはともかく、この半年間はひたすらに暴れました。

『紅き翼』 泉野雪として表から『完全なる世界』の手駒を潰し、『漆黒の死神』 零崎雪織として裏から情報収集& a m p; 依頼という形でのやはり手駒潰し… 抹殺つて言つまうがしつくづきますけど。

そんなこんなで映画にして三部作、単行本にしておよそ14巻分の活躍劇を演じました。

そういうしてこるうちにアスナ姫が捕まり、『完全なる世界』は準備完了、私たちは奴らを追い詰め、現在は『墓守り人の宮殿』に攻め混もうとしているところです。

「不気味なくらい静かだな、奴ら。」

「悪い組織なんてそんなものです。なめられてこるんでしょう。」

まあこんなときは静かになりますよ、普通。

「ナギ殿…帝国・連合・アリアード・ネー混成舞台の準備完了しました  
！」

セラスさんが準備が整った事を伝えます。

「それで…あの…ナギ殿、雪様。」

「ん？」

「なんですか？」

「ササ、サインをお願いしても良いのでしょうか？」

「うふ~ああここ。そのへりご。」

ナギはサインを書き込みます。私もサインを書いてみます。

つと。

「あ、ありがとうございます。」

緊張感のない娘ですね…まあ良いですけど。

そしてガトウから連絡、北アフリカ正規軍は遅れるとのこと。説得は

間に合わないらしい。延長出来ないか聞いてきましたが、

「残念ですが、既にタイムリミットです。」

「ええ、彼らはもう『世界を無に帰す』儀式の準備は整っています。

『黄昏の姫巫女』は彼らの手中にあるのです。」

それを聞いて、ナギが飛び出しあります。

「待つて。私は外の軍勢をあらかた潰してから行きます。だから露払いくらいは。」

「なんかやんのか？」

「ええ。どびつきの魔法を。」

そのまま宙に浮き上がり、準備開始。

「……『燃える天空』術式固定……『じおるせかい』術式固定……  
『千の雷』術式固定……」

ぐ……流石に3つ、広域殲滅魔法を固定するのは辛いですね……

「術式連結……完了!」

純粹な魔力でその3つを繋ぎ合わせます。形は三角形。

「行きます…『神々の黄昏』…」

打ち出し、一気に相手の軍勢の真ん中まで飛ばし…

「『解放』」

カツ！ズドオオオオオン！

超広範囲に大爆発。衝撃はここからに来ないよう始めから術式を組んであります。

煙が晴れると、殆どの軍勢は跡形も無くなり、残っているわずかも重傷。ここまでやれば良いでしょう。

「『』のバグが…」

「努力の塊と言つてくださいな。」

「じゃあ皆、突っ込むぜー！」

ナギたちは『墓守り人の宮殿』に入つていきました。

さあて、私は生き残った悪魔とかの殲滅をしますかね。私は刀を取り出して咸卦法を発動しました。

「ふう……このくらいでじょうか……ねつー」

私は見える範囲の敵は全て斬り落としました。最後の一體を斬り捨てます。

ゾクッ

恐ろしい魔力…『造物主』か！

(ミスつたな。)

(全くです。急ぎます。)

直ぐに『闇の魔法』を発動、両手で『千の雷』を掌握。

一気に雷化で移動。魔力の大きい方に向かいます。

(二)

(もうすぐだ。準備しどけ。)

(ええ)

「ナギ！ ゼクト！ 退いて！ 『解放・千の雷』×2！」

ズツドオオオン！

「古キ！」

「私がいつまでも外に居るわけには、いかないんですよ！」

ズドドドドド！

無詠唱『無幻の光槍』を打ち込む。いくら奴でも堪えるでしょ……

「ツク……フハハハハハ！」

笑い出した…雪織

(おひ。演算開始だ。)

「私を倒すか人間！それもよからう！私を倒し英雄となれ！羊達の慰めにもなるうー！」

「腹のたつ物言いにたいして無言で『雷の投擲』を打ち込みますが、避ける素振りも見せずにくらいました。

「だがゆめゆめ忘れるでは無い！全てを満たす解は無い！いずれ彼等にも絶望の帳が降りる！貴様らとて例外では無い！」

「「ぐだぐだ、うつさあああい（るつせえええ）ー。」

一人して造物主をぶん殴る。

「「たとえ明日、世界が滅ぶと分かっても！それでも諦めないのが人間つてもんでしょうが（だろうが）ー。」

「くつ…貴様らもいざれ知るだろう…私の語る『永遠』こそが『全ての魂』を救い得る、唯一の次善解だと。」

「かはつ！？」

後ろから攻撃……ゼクトを乗っ取ったか……

「お師匠！？」

「自らに問うがいい。人は果たして救うに値するものか？」

（解析完了済みだ。やりな。）

「ゼクトから、離れようよおおー！」

ゼクトをぶん殴り、造物主を引き剥がす。不滅の特性から、造物主は元の肉体に宿る。

「ぐ……人間は度しがたい。英雄よ、貴様らも我が2600年の絶望を知るがよい……さらばだ。」

そつ言つて、造物主は異世界へと消えて行きました。

「お師匠！」

「つ……大丈夫でしょ……傷はついてない……氣を失っているだけです

…「

強引にスキマを開き、送り返す。

「お、おーー！」

ここからは私の領分…奥まで一気に進みます。

アスナは水晶のようなものに閉じ込められて居ました。

私は水晶に触れます。急に取り出して、悪影響が無いか確認するためです。

（ちつ…残念だが発動回避は無理だ。）

（やはりですか…仕方ありません…）

パキイイイン！

内と外の境界を弄り、アスナを取り出します。それと同時に、アスナを閉じ込めていた水晶は砕けました。

ボウ  
…

「…」

(こよいよ発動か… わたせと逃げるべー…)

(ええ…)

スキマを開き、アスナを抱えてそのまま倒れこみました。

ドサッ

スキマから落したといひて、『紅色翼』のメンバーたちは固ました…

「ユキー！」

「はは…演算のし過だ… どう…少し寝かせて… ぐだ… やこ…」

「お、おこー！」

「アスナの…面倒を誰か…見ておいてください…」

それだけ言つて、私の意識は闇に落ちました

## ～決戦～（後書き）

ゼクト生還。ユキ（作者）がしたかった原作ブレイクの一つです。

やはり微妙な終わりかた…アドバイスがあればお願ひします！

オリジナル魔法

『神々の黄昏』

呪文等はとくに無し。

『燃える天空』『いおるせかい』『千の雷』の3つの魔法を固定、魔力によって連結させて打ち出す。

『解放』によつて固定を外すことで、3つの魔法を同時に発動させる。

ユキはあらかじめ衝撃の範囲が広がりすぎないよう術式を組み込んでいる。

威力については相乗効果によつて測れないほど上がっている。ならば『超広範囲殲滅魔法』

～目覚め、一時の別れ～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
  - 2 女子寮管理人
  - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから選んで下さい！

～田 覚め、一時の別れ～

SHADE グキ

「ん……う……」

「」は……ベッドの上……？

「ユキ、起キタ？」

「アスナ……ちやん……？」

「ウン。」

私を覗き込むように見るアスナ。えっと……何があつた……？

私は確か……『墓守り人の宮殿』でアスナを助け出して……そのまま皆のところに移動して……

(そこで気絶したんだぜ。)

(ああ……そうでしたね。)

「今、誰か他の人はいる？」

「アルビレオ。」

アルが居るってことでしょうね。

「呼んできてくれる？」

「ワカツタ。」

「クリと頷いて、トテトテといった感じで歩いて行きました。

（どのくらい寝ていたのでしょうか…）

（さあな。だが、嫌な予感しかしねえ。）

少し考へていると、アルがやつて来ました。

「起きましたね…気分はどうですか？」

「まあまあです。寝起きですし。」

「それは良かつたです。」

いつもの胡散臭い笑みではない、素直な微笑を見せるアル。

「さて…私が寝ていた間に何があつたか説明していただけますか？」

アルの顔が曇りました。

「いざれは教えることですし…良いでしょう。アリカ王女が捕まりました。」

（やられたな…かなりの間氣絶していたみたいだな。）

「……何が起こったか、最初から説明してください。」

「はい……あなたがアスナ姫をつれてきて氣絶した後、『世界を無

に帰す』ための魔法が発動しました。これについては帝国・連合・アリアードナーが協力し、『大規模反転封印術式』を発動させることで『墓守り人の宮殿』と封印し、解決しました。』

「『大規模反転封印術式』ですって？そんなもの使つたら…」

「あなたの考えている通りです。その数日後、オステイアで終戦記念式典が行われ、お祭りムードの大騒ぎ。運悪くその時にオステイアで魔力消失現象が発生したのです。」

「アレは恐ろしい量の空氣中に浮かぶ魔力を使います…そのしわ寄せがオステイアに向かつたわけですね…空氣中の魔力が消失した場合、浮遊している岩は落下するはずですよね？」

「その通りです。オステイアは崩落を始めました。これを解決する方々は見つからず、アリカ王女が『王家の魔力』を使用、オステイアは地上に不時着しました。」

「犠牲者を可能な限り減らす最善策ですね…これだけだと罪にはならない筈ですが？」

「ええ。問題だつたのは、オステイア崩落が始まつてからのアリカ王女の動きが早かつたこと。結果として『完全なる世界』との結び付きをでつち上げられたんです。」

さらに同時にクーデターを起こした際の『父親殺し』の罪も被せられました。」

「『父親殺し』についてはアレが『完全なる世界』と結び付いていたといふのに… MMのクズどもが…」

「……続けます。そうしてアリカ王女は捕らえられ、今はケルベラス無限監獄に居るはずです。」

「死刑囚専用の監獄か……執行までのタイムリミットは？」

「当初の発表では2年です。正確な日付などはまだ分かりませんが…」

「ふうむ…今の『紅き翼』はアリカ王女に『一人でも多くの命を救え』的なことを言わされて実行中、ですか？」

「…まさにその通りです。紛争地を巡り、巻き込まれた人たちの治療をしています。」

「でもクルトは参加していないんじゃないの？彼の事だから、政治面をどうにかしようとしたと考えてるんじゃない？」

「よくわかりましたね…その通りですよ。あなたはどうあるんですか？」

「私は…基本単独行動でしそうね。少し裏でやつておきたいことがありますし…」

「そうですか…止めはしませんが、ホドホドにしてくださいよ?」

「まあもう暫くは休みますが。まだメンバーとも会つてませんし。」

さて、裏での仕事は何をしますかね…やっぱり残党潰しちゃうか？

「それでですね…出来ればあなたにアスナ姫を預かつて欲しいのですか？」

「はい？」

今、何て言ったこの人？

「大変なのはわかりますが…やはり男だけでこのよつな少女を育てるのには無理がある、という結論が出ているんです。」

「はあ。」

「私としては非常に不本意ではあるのですが、もしあなたが単独で行動するのであればお願ひします。」

この変態ロコロコが…幼女を手放す…だと…

「分かりました…預かりましょ。」

「ありがとうございます。」

「ワタシ、ユキニツイテイクノ？」

「もうござりとですよ。」

数日経つての夜です。

「やうか… ノキは一旦離れるのか…」

「私にも考えはありますし、『紅き翼』の一員であることを辞めるわけじやありません。」

「アリカ王女についてはどうするのかの?」

「それのために動くんですよ。こうこうの場合独り身の方が楽です。まあアスナを連れていくわけですが、大丈夫ですよ。」

詠春とラカン、ガトウ、タカミチは既に酔いつぶれています。わりと静かなのはそのためです。  
アスナはとっくにおねむですしね。

「なあユキ…俺は何が出来るんだろ?」

「ナギらしくも無い。何が出来るか、じゃなくて何をするのか、が大事なんですよ?あなたは頭もたいして良くないんだから、思うがままに動けば良いんです。」

「そうか… そうだよなあ…」

あらり?寝ちゃいましたか。慣れもしない酒なんか飲むからですよ。  
まったく…

とりあえず毛布をかけておきました。

「ナギと言えばユキはナギと今の「つけ」に仮契約はしないのですか？」

「ブツ！ ゲホッゲホッ！」

「マイシは…

「いきなり何を言い出すかと思えば…私は血の契約の陣も魔力宝石の陣も、魔力を流し込むだけの陣も書けますよ？ 果ては偽名のまま仮契約出来てなおかつ本契約並みのアーティファクトが使える陣も作りましたよ？」

「それなら良いじゃないですか？」

「あなた分かっていいてるでしょう？ 対象者が寝ていても使えるのは、キスの陣だけだ、ってこと。」

「バレましたか…」

「ナギの始めて唇を奪つていいのは彼女だけですよ……それに、私はアーティファクトは必要無いですし。」

「ん~残念です。」

「なんというか、締まらないなあ。

「さて、それでは私は離れますね。」

「マタネ、ミンナ。」

「おうー、『恋を叶へなー』」

「次に会つ日を楽しみにしておけやー。」

「アスナ姫のこと、頼んだぞ。」

「また会える日を楽しみにしておけや。」

「ワシもじや。達者での。」

「次にアスナ姫と会える日を楽しみにしておけやよ。」

「次会つときは、絶対にお前に勝つてやるからなー。」

さて、暫くの別れです。

魔法も使ってアスナを杖から離れなによつとして。

「じゃあ、また会つ日までー。」

一気に飛んでこります。

さて、何処に行つて何をしまじょうかね。

～田覚め、一時の別れ～（後書き）

以下ネタバレ

一時の別れといつても次回には合流するんですけどね。  
つまり次回は2年後のことになります。

「クルトとの通信」（前書き）

アンケート実施中です  
ユキの麻帆良での立場は…  
1 教師  
2 女子寮管理人  
3 喫茶店などの店主  
以上の3つから選んで下さい。

## 「クルトとの通信」

S H D E ユキ

よつ。零崎雪織だ。

あれから別れて約2年、俺は『完全なる世界』の残党潰しを主にやつていたぜ。

たまには紛争地に出向いて治療とかもやつていたがな。

色々な場面をアスナに見せたことはいい方向に向かったみたいだ。  
感情も知識も育つてるからな。

アスナが魔法から離れることは絶対に出来ない。俺がその気になれば暫くは断絶出来るだろ？ が、それはまやかしだろ？

ただ、旅の途中いきなり『力が欲しい』って言われたのは驚いたがな。大方アスナ狙いの敵が何度も来てたからだろうが…

これについては「泉野雪」で仮契約をして、とりあえずある程度の体術をつけることで納得させておいた。

まだ体が成長してないのに筋肉つけると絶対に悪いからな… ただ、センスが良すぎるのは考え方だ。あつと言ひ間に身につけちまた。咸卦法も完璧に使えるし… どうしよう？

あ、アーティファクトは『ハマノツルギ』だ。だが調べたら原作以上にえげつない効果を持っていた。

魔法無効化はそのままに、本人の意思で『反射』が使えるとか…何なんだよ！？どこの一方通行だよ！？ついでに結界も張れるとかもつと意味不明だよ！？

対魔法使い最終兵器といつてもおかしくない性能だ…成長して剣術覚えたらどうなるんだろ？いや、覚えさせるつもりだけど…

つと、そんなことを考えてたら通信だ。なんだ？

『もしもし…クルトです。』

「よつ、雪織だ。久しづりだな。」

『ええ、お久しづりです…』

ん？何やら落ち込んでるな…とするとアレかな。

「どうした？暗い声だが…何か起こったか？」

『ハイ…アリカ様の処刑日が早まりました。今日から10日後です…それで…』

「アリカを助けて欲しい、と？『紅き翼』はどうしたんだ？」

『もちろん彼らにも連絡しましたよ。ですがいい返事を貰えなかつたんですね…』

ふーん…そんな風に捉えたか。

「へえ…面白いこと言つなあクルト。」

『面白いつてなに言つてるんですか！』

「いや、あいつらがどんなやつかまだわかつてねえみたいだな、つて思つてな。」

『はい？』

「なーに、大丈夫だ。まさかあいつらが動かないとでも？それはあり得ねえ。一番近くで見てきた俺が言つんだ。」

『はあ……それでも僕は不安なんですよ……』

「ん~だつたら俺が行つて発破かけてくるから安心しな。じゃなー！」

『え？ ちよ…待つ…』

バキン！

通信用魔法具を碎く。

「どうしたの？」

「ああ、クルトから連絡が来てな。アリカの処刑日が早まつたらしい。で、ナギがウジウジしてゐみたいだからな……」

「ナギたちの所に行くの？」

「ああ。アリカを助けるためにも、な。」

「姉さまを助けてくれるの？ ユキオリ。」

「ん？ 今まで助けなかつたから不思議に思つたのか？」

「うん。」

「えーっとだな、アリカは『災厄の魔女』って呼ばれているのは言つたよな？」

「言つたよ。でもユキオリなら直ぐに助けたんじゃないの？」

「厳しいこと言つなあ… それだとアリカの命を救うことは出来るんだが、名誉は救えないんだ。」

「？」

首を傾げるアスナ。可愛いな。

「お前もアリカが『災厄の魔女』なんて呼ばれるのは嫌だろ？ 何かしたならともかく、何もしてないのにさ。」

「うん。」

「だから名譽を取り戻すために、時間をかけて調べあげた。アリカを無罪にして、なおかつ自由にするためにな。」

「つまり悪人を肅清するための情報を集めるのに時間がかかった、つてわけ？」

「何でそこまで複雑に言えるんだか… まあそういうことだ。」

「でもさ、情報が集まっているんなら今でも出来るでしょっつまり  
ユキオリが面倒なんだよね？」

「う…なんつーか、そこまで頭が回るか。まあ確かに面倒なのもあるが、アリカの『気持ち』を救つための舞台がいるんだ。」

「姉さまの『気持ち』？」

「そ。絶望に立たされ、命を諦めた女性を救い出す一人の英雄。アリカ そのための舞台がな。」

「ユキとユキオリって演出家なの？」

「違うな。自動的にその舞台が整うんだ。利用しない手は無いだろ  
う？」

「うーん…そういうもののなの？」

「そういうもののなの？」

さてと、メガロ近くの『紅き翼』の基地に行くか。

「よつ、久しぶりだな。」

「うん？雪織ですか。久しぶりですね。」

まず出迎えたのはアル。

「久しぶり、アルビレオ。」

「これは久しぶりですねアスナちゃん。元気にしてましたか？」

「うん。」

「まあいいや、とりあえず入らせてもらひつか。」

中に入ると、ナギ以外のメンバーは揃っていた。とりあえず挨拶をして、ナギはどうしたのかを聞くとウジウジと悩んでいるみたいだ。

ついわけで個室の扉の前。まあやることは破壊なんだが。

バーン！

「よハ、久しぶりに会おつかと思つてたらウジウジ悩んでーじゃねーよー！」

「……ああ、雪織か。」

「なんだなんだお前らじくも無い、何があつたか言つてみなー！」

するとヒポッポッと話し出すナギ。まあ言ひ切っちゃ悪いが悩むことでも何でも無いことだがな。

「ふうん…で？」

「で？って何だよ……」

「お前は何がしたいのさ。俺が聞きたいのはそれだけだ。遮音魔法はかけるから。」

「俺は……その……」

「ああもうじれったい！ほつきしあがれこの馬鹿！…

思考誘導の魔法をかけつつ叫ぶ。「うすすれば…  
『俺は大好きなアリカを助けたいんだよ！馬鹿っていうことねえだ  
ろ！』

「へえ…」

「一や一やと笑ひてやる。見事に釣れたよ、しかも大物。

「なつ…何だよその顔…」

「『大好きなアリカ』ねえ…」

「なつ…

顔を真っ赤にして黙りこむナギ。

「お前がやりたいことは分かった。じゃあ皆で遊ぼうよ？俺たちは仲間だもん？」

「で、でも…」

「いいから伝えやがれ！仲間に遠慮する」とねえー。それとも俺がわざの言葉を伝えよつか？」

「分かつたよ…伝えれば良いんだろ伝えれば…」

部屋の外に出る。

「皆、俺はアリカを助けたい！協力してくれるか？」

部屋が静まり返る。

「フフ…それで悩んでたんですね…」

「水くさいぞ、ナギ。」

「まさか俺たちが協力しないと思つたか？」

「相変わらずの馬鹿弟子じやのつ…」

「へつ…助けたいんなら始めからやがれってんだー。」

「僕も手伝いますー！」

「嘘…ありがとうなー！」

ナギの悩みは解消、脚本は用意済み。

あとは本番を待つだけ、だ。

## ～王女救出～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

## ～王女救出～

SHDEゴキ

「魔獸「ゴジラ」めぐケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔  
法使いにとつてまさに死の谷」

処刑人が処刑内容を説明しています。

「見せしめ」の意味でもあるのでしょうか？

重罪人に對しての恐怖の誇示、つてやつですかね…

「歩け」

「触れるな下郎。言われずとも歩く。」

アリカ王女はゆっくりと、しかし確實に「死」へと向かうために歩  
きます。

そつとしてたどり着いた飛び降り台。目を瞑り、

「ナギ… さいばじや…」

確かにそつ言って、飛び降りていきました。

さあ、本番の始まりです。

「よーし… こんなもんだろー。」

「な、なんだ貴様！」

ラカンが処刑人の頭を鷲掴みにします。

「おっさん、今からこゝで起きたことは『なかつた』ことになる。いいな？」

「な、何を……」

「むんつー！」

ラカンが着ていた鎧が弾けました。中から氣を膨らませた見たいですね。

「な……『紅き翼』の……ジャック・ラカンだと……？」

「まさか俺だけだと思つてゐるのか？」

そして現れる詠春、ゼクト、アル、ガトウ。

会場は騒然となり、元老院の議員たちは慌て出します。

「貴様ら……今さら何をー！」

「何を？そりや決まつてる。王女を助けただけだ。『千の呪文の男』、ナギ・スプリングフィールドがな。」

「ばかな！いかにあの『千の呪文の男』だろつと谷底からは生きて帰れまい！」

「クククク…アハハハハハ！」

大笑いしたのは私。まさか何もしていないとでも？

「何だ貴様！」

「面白いこと言いますねえ…死ぬのは、あなたたちですよ？」

「何を…」

「ほら。」

スキマ展開、見事に着地したのはアリカをお姫様抱っこしたナギ。

「ナギ・スプリングフィールド、アリカ・アナルキア・エンテオフ  
ュシアはここにいる。」

大量のレポートを空中に浮かべる。

「これらはアリカ王女の無実を晴らし、そして」

さらにスキマ展開。無様に落ちてきたのは手足を縛られた真の罪人。

「あなたの有罪を証明するもの。」

次の瞬間、処刑執行人の大半が鎧を外す。

「お前たちを『完全なる世界』の関係者とみなし、今ここで処刑する。」

「馬鹿な… そんなはずは…」

私は一いつ々笑い、一いつ

「あるんですよ。」

転移魔法を発動。罪人は全て谷のなかに、のじつの『紅き翼』以外の人達は安全地帯…もとい、それぞれの家に。

「茶番劇は終わり。さて…」

ナギとアリカの方を向く。

「プロポーズでもしたんだしょ! お互いに見つめ合ひて。」

「ハハハハ！」つや良いぜ…」

「めでたい事です。」

「馬鹿弟子にも眷が来たんじゃのう…」

「なつ…」

「つ…」

おやおや、一人とも顔を真っ赤にして。

「ユキ。それからここしておいろ。あなたの敵さんのお出ましだ。」

詠春に言われ、飛んでくる戦艦を見る。

「二人はイチャイチャしておいでくださいな。では…

振り返り、告げる。

「の「」の肩どもを潰しますか。」

『おうー』

SIDE Out

SIDE Out

僕は驚きました。

何に、とこうと『完全なる世界』の関係者を全て証拠つきで炙り出し、一斉に処刑するというアイデアを思い付いた事に。

そしてそれを実行するための資料を完全にそろえ、この舞台を作り上げたことに。

情報を操作し、かき集め、それでも僕がまだ出来なかつた事をやりとげてしまつたことに。

そして今、彼女は

「アハハハハハハ！」

恐ろしい笑い声をあげて戦艦を撃墜させていきます。

「ラカン適当に右パンチ！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！」

「フフフ…」

「豪殺 居合い拳！」

「『雷の暴風』、『闇の吹雪』…」

他のメンバーも各自の方法で次々と敵を蹴散らしていきます。

「皆さん凄いなあ…」

「やうだなあ…」

タカミチの言葉に思わず返してしまいました。

僕もあの場所にまでたどり着けるのかな…

え？ナギさんとアリカ様？ああ…見たくないんですよ…だって…

「ナギ…」

「アリカ…」

名前呼び合っている上に凄まじいオーラが出ているんですよ…顔が真っ赤になってしまいそうです…「ひ…」

## SHIDEユキ

さて、処刑日から数日、公式的にはアリカ王女は『処刑された』ことになりました。

ちなみに『紅き翼』と関係者以外で今回の事情を知る人たちの記憶は消しましたからね…悪いことはしたと思いますが、これについてはクルトに頑張つてもらいましょう。

さて、今は休んでいる訳ですが…

「これからどうしようつ？」

アリカ王女を表に出すことは出来ないことも無いですが、あまりしあくありません。

ちなみに今ここにいるメンバーは私、詠春、アスナといふ奇妙な感じです。

ナギとアリカもいるにはいますが、ずっとイチャイチャしてるのでカウントしてません。

「日本に行きたい。」

「え？」

まさかのアスナの発言。

「日本、かあ…どうします?」

「え?俺に聞いたのか?」

「やつですよ?詠春には木乃葉さんもいるでしょう?」

「ああ…やつ言えば帰つてないな…」

「木乃葉さんって、誰?」

「詠春の愛する人、ですよね?」

「う…まあそういうんだが…」

「じゃあ会つてみたい。」

「しかしだなあ…ゲートポートを抜けるのは…アリカ様がな…皆で  
いくつもりなんだよ!」

「そこは私がいますし無問題ですよ。皆に伝えてみます?」

「う…む…そうだな…出来ればそろそろ戻りたい気持ちもあるし…  
そうするか。」

「じゃあ決定ですね。今日の夜にでも話してみましょ!」

「日本に行けるの?」

「まあ行けるでしょ!。皆ノリは良いですし、期待していいと思いま

ますよ?」

「うふ。」

その夜、話すこと立即決定、場所は勿論京都です。  
さて、京都ではどうなりますかね?..

～王女救出～（後書き）

相変わらずすうまく終わらせれない…  
次回は京都が舞台です。

～京都到着～（前書き）

アンケート実施中です。  
ユキの麻帆良での立場は…  
1 教師  
2 女子寮管理人  
3 喫茶店などの店主  
以上の3つから選んで下さい。

## 京都到着

SHADEゴキ

「ソーリーが、京都。」

「やうすよ。もつとも、山の中ですけど。」

ハイ、とこつわけでやって来ました古都京都。

メンバーは私、アスナ、詠春、ナギ、アリカ、アル、ガトウ、タカミチ、ラカンです。

え？ ラカンはゲートポートを使えないんじゃ無いか、ですか？

そうですよ。だから私のスキマで移動したんです。座標さえ認識していればどこにでも行けるのですから。

お金についてはガトウに頼んで調達してもらいましたけどね。

んで、今は詠春の実家もとい屋敷に向かっているわけです。

「それにしても面倒ですね。私も礼儀として結界の前に出ましたけど。」

「余計な侵入者を防ぐためだ。我慢してくれ。」

「身体強化の魔法やら転移魔法とかもただの魔法使いだと使えないようにしてありますし、階段も多いですし…」

「面倒。」

「う…」

「まあ、あの二人には関係無さそうですがけど。」

後ろを向けば、イチャイチャしているナギとアリカ。そして他のメンバーは顔をしかめています。

あ、今の位置関係を図にすると…

アスナ 私 詠春

この間およそ10m以上

ナギアリカ

この間およそ15m以上

アル ガトウ タカミチ ラカン ゼクト

といった感じです。

「姉さま、嬉しそう。」

「まあ幸せなのは結構ですが、ホドホドにして欲しいですね…」

あの美男美女カップルは人目も憚らずに路上キスとかしそうです。  
『バカツブルです。

「うと…ぐちぐち言ってたら見えてきましたね。」

大きな門が見えてきました、よつやく到着です。

しばらく待つて、全員が門の前に来たところですぐります。

『お帰りなさいませ、詠春様、雪様!』

原作のあのシーンよろしく、大量の巫女さんがお出迎え。

「は…?」

私は苦笑しつつ、畳然としている詠春に話す。

「私が連絡しておいたんですよ。いつの間にか私も青山家か近衛家に加えられたみたいですが。」

「ああ、そうか…」

横目で納得しきれない顔の詠春を見つつ、巫女の一人にたずねる。

「それで…木乃葉さんはどちら?」

「木乃葉様でしたら…」

「詠春さ――――ん!」

巫女が答える前に出てきましたよ、黒髪の大和撫子が。木乃葉さんです。

そのまま詠春に向かつて走つていれ…

「の…バカー-----！」

「ぐふう！？」

おお…見事なボディーブロー…氣を纏つた一撃をお見舞いして押し倒しました。

「詠春はん…あんせんはウチとこ'つものが有りながら…」

「」、木乃葉…さん？」

「」の赤毛の女の子は誰でつか？まさか雪はんとの子供もどきでも言ひつもりかいな。」

「は…？」

こちらを向いた木乃葉さん、しかしその口は笑つています。成る程…寸劇ですか…良いです。のってあげましょ！へ。

「まさかそんなわけないだろー…雪もむちやんと説明してくれー」

とこう言葉に対しても私は頬に両手を当てつつ顔を赤らめて

「そんな…あんなに激しかったの」…

「ぶつー?」

「どうこいつとか、ちやんと説明してくれはります?」

真っ黒なオーラが出てますねえ…これが演技だとこいつのが信じられないとこです。

「詠春とコキはそんな関係じゃない。」

セイヒヤのベられた救いの手、アスナ。

その瞬間、木乃葉さんのオーラは一瞬で消えました。

「ええ、分かってますえ。まさか詠春はんにそんな度胸はありますまい?」

「木乃葉… やん?」

「でもなあ…ウチも心配やつたんやで…せめて一言でもいいから手紙くれたつてええんやないの?」

「その…すまなかつた。」

「セイヒヤ、しょーもない寸劇に付き合つてくれておおきい。」

「いえいえ、私も楽しかったから良いでですよ。」

唖然とする観客、途中までドラ的展開でしたし。

「改めまして、ウチは近衛木乃葉、詠春はんの妻になる予定です。よろしくつな。あんせんらが『紅き翼』のメンバーやな？」

「ええ。アルビレオ・イマです。以後よろしくお願ひします。」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。」

「アリカじや。」

「ジャック・ラカンだ。」

「アスナ。」

「ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグと言こます。どうぞよろしく。」

「フィリウス・ゼクトじや。」

「高畑・T・タカミチです。」

とまあ自己紹介。アスナとアリカはもつウェスペルタティアから縁を切つたと言いたいのでしょうか？

「まあ立ち話も辛いやうし、家に入つてゆつくりしてな。」

とこつわけで私たちは中に案内されましたとさ。

～京都到着～（後書き）

ネギまの漫画の中に「雪」という名の登場人物がいたこと今さら  
気づく…

まあ別に良いですねーと開き直つてみたり。

ついあえず中途半端ですが今回はここまで。

以下ネタバレ

次回は両面宿讐を出すつもり……です。

～両面宿敵、フルボッコ？～（前書き）

アンケート実施中です。  
ユキの麻帆良での立場は  
1 教師  
2 女子寮管理人  
3 喫茶店などの店主  
以上の3つのうちどれが良いか、選んで下さい。

～画面宿舎、フルボッコ？～

SHDE グキ

詠春の実家についてのんびり過ごし、今は夜。

「ガハハハ！ほら飲め飲め！」

「ちょっと…やめてトモヒラカンさん！」

「ほらアリカ、あーん。」

「あーん。」

「…ウチも、ほら詠春はん、あーん。」

「ちょっと…何を対抗しようとして…ぐむ。」

「平和ですねえ…」

「モウジヤの…」

「平和なのは良いこと。」

「もうだな、アスナちゃん。」

「ま、モウですよね。」

半分宴会に近い形になっています。

バカツプル×2とラカン、タカミチが中で大騒ぎ、私、アル、ゼクト、ガトウ、アスナは縁側に腰かけてます。

「私は酒は苦手ですけど、どうです？日本酒の味は。」

「うん？まあまあだな。少し度が強いが。」

渋いおじ様が日本酒を飲むのは様になつてますけどね。

「んゅ…」

アスナが私にもたれ掛かつて来ました。

「もう眠い…」

「なら寝ても良いですよ。夜更かしは良くないです。」

「分かった…」

膝枕をしてあげます。よほど眠かったのか、すぐに寝息が聞こえてきました。

「よつ…」

遮音用の結界を張りました。後ろで騒いでいるのが聞こえて途中で起きあられても可哀想ですね。

しばらく時間が経ちました。いや、月をぼんやりと見ていただけなので何分経ったのかは知りませんが。

と、結界に誰かが触れたようです。後ろを向くと、焦っている様子の詠春。

私は枕を出してアスナの頭の下に置いて、結界を狭めて外にします。

「どうしました？」

「ああ、実はリョウメンスクナの封印が解かれてしまつたんだ。出来れば再封印の手助けをして欲しいんだ。」

「リョウメンスクナって飛彈の大鬼神とか呼ばれてるやつですよね？何故京都に？」

「確か1600年ほど前に京都に封印されたらしい。何故かはよく覚えてないが…」

ま、これは気にしたら負けですし…

「良いですよ、手助けしましょう。」

「ありがたい。」

といつわけでやってきましたよ。ナギたちもやって来ましたけど、随分フラフラしてますね…酔ってるんですね？

「つーかでけえなー！」  
「！」

「おもしれえじゃねえかー！」

いや、何が面白いのかよく分からぬですよ？

「おつと…」

殴つて来ましたが避けました。まだ封印が解かれて間もないのか、動きが鈍いですね。

「『雷の斧』！」

「ラカン・インパクト！」

ナギの打ち込んだ『雷の斧』で腕の一本が切れました。ってか斬れた腕が消滅つてどうこいつでしちうね？

ラカン・インパクトで大きくふりつけてますし…

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

詠春の雷光剣でまた大きくふりつきました。うーん…私つているんでしょうか？

「再封印したいから動きを止めてくれー！」

「わかつたぜー！」

「おつよー！」

とか言いながらボ「ボ」にしてゐるせじうこいつ」とじょいづね。動きが止まつてないですよ?

まあ良いですけど…バカですし。動き止めるだけならアレが一番でしょ。

「ナギ、ラカン、巻き込まれても知らないですよ!」

「ああ! ?」

「何だつて! ?」

二人が吠えてますが、放つておいても大丈夫でしょう。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ! ” 契約に従い、我に従え、氷の女王、来れ、としえのやみ、えいえんのひょうが” ! ! !

「ちよつ! ?」

「やべつ! ?」

一人は詠唱を聞いて急いで範囲から脱出。それでもしないと巻き込まれますし。

リョウメンスクナのいる範囲の空間を凍結させました。結果、とりあえず凍りましたが、まだ途中です。

「「おい! あぶねーじゃねーか! 」」

「知りませんよ。動きを止めるのに最適な魔法を使つただけです。」

スクナのまつに向き直り、続きを再開。

「『全てのものを、妙なる冰牢に、閉じよ』『ヒカルセカ』…。」

そのまま氷柱封印魔法。これでスクナの氷付けの完成です。

「これで良いですか？」

「ああ。あとは本山の陰陽師に任せることになりますからな。」

文句を言つて一人は拘束して、スキマで部屋に落としておきました。

私と詠春は普通に帰ります。

「なんじやつたんじや？」

「神の一柱の封印が解かれて暴れそ娘娘たので、動きを封じて再封印しました。」

「神？」

「ええ。両面宿儺という鬼神で、日本だと様々な形で伝承されています。ただ、私が見た限りで言つと鬼としての性質の強いものでしたが。」

「鬼としての性質の強いつてのはビリーハリビリじゃ？」

「えーっと…両面宿儺はある伝承では民からの略奪を楽しむ、とされていてまた別の伝承では民のために別な鬼を討つた、ともされて

いた……筈です。今回は暴れてただけですが、明らかに私たちを攻撃してきたので。」

「やつか……」

え？<sup>アル</sup>変態はどうしたのか、ですって？

出掛けの前に気絶させて縛つてそちら辺に放つて起きましたよ。

## ～両面宿題、フルボッコ？～（後書き）

やつぱり中途半端な気がする…

そろそろアンケートの締め切りが近づいてきました。

～ユキの原作破壊劇～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んでください。

## ～コキの原作破壊劇～

S H D E コキ

よ、零崎雪織だ。

つてか のHIDE表記がいるのかね？少し疑問に思えてきたぜ。

まあメタい発言はこの辺にしておこう。

京都でリョウメンスクナをボコボコにした後、『紅き翼』は解散になつたぜ。んでもう何年か経つたわけだ。

詠春の子供…木之香も生まれたな。つてかマジに何年たつてんだ？

ええと…今は西暦…1993年だと？つまりあのメンバー…ネギパーイティーの大体が5歳になる年つてことか。

俺はアスナと旧世界と魔法世界を回ってるわけだが、定期的にクトの手伝いをしている。メインは『完全なる世界』の残党狩りだ。んで今は…どうだけ？忘れたけどメガロのどつかにいる。

クルトから通信が来たと思つたら切羽詰まつた声で「手伝つてください！」だからな。結構ヤバい状況らしい。

アスナはクルトに預けて、俺一人で戦地に赴いた訳だ。クルトに口コソの気はないから大丈夫…のはず。

空中から状況を見たところ、味方はいっぱいいっぽい、上級悪魔：伯爵級の強さも感じる。シリヤ召喚主は捨て身で…

「つてオイオイオイオイ！ なんでガキがいるんだよ…」

こんな場所に子供、近くには血まみれで倒れている…女性か？近くに魔法銃が一丁転がってるな。

俺は人は殺すが無関係の奴が巻き込まれるのは気にくわない。

待てよ…このタイミング…すでに6／1は過ぎている…まさか！

近くにいた子供…女の子が俺に声をかけてきた。

「おねえさん… おかあさんをたすけて！」

涙をボロボロとじぼしながら頬んでくる。

「ああ、助けるから安心しな。」

俺は精神的には男なんだがね… まあ見た目は女だし仕方ねえな。

手をあてて確認、まだ息はある。すぐさま生と死の境界を弄り、彼女が死なないようにする。

次にやることは普通は回復魔法の『治癒』なんだろうが、怪我が酷すぎる。それに加えて

「西洋魔法の回復魔法に対する無効化術式…」

思わず呟いてしまったが、言つた通りだ。こんなのをかけられるのは伯爵級以上の悪魔だな。

境界弄つて消しても良いが、さつきも言つた通り怪我が酷すぎてアレだと治らない。よつて

「陰陽術は専門外だが、仕方ねえか。」

正直アンチヨコが欲しいくらいだが。

「えーっと…『氣吹戸大祓 高天原爾神留坐 神漏伎神漏彌命以  
皇神等前爾白久 苦患吾友乎護惠比幸給閉止 我能生魂乎宇豆乃幣  
帛爾 備奉事乎諸聞食』！」

原作で木之香が使つた完全治癒魔法（？）。3分以内、『口チノヒ  
オウギ』専用のアレだが、その辺は境界を弄りまくつてどうにかし  
た。

眩い光が放たれ、みるみる傷が癒えていく。

「う…………ん…………」

「おかあさん…」

「ゆうつ…………な…………？」

「起きたか。」

「おねえさんありがとう…」

すぐにお礼を言つ女の子。

「あなたは」

「『漆黒の死神』零崎雪織だ。いろいろ聞きたいことは有るだろ？  
が今は聞かん。」

言葉を遮つて、結界を張る。

「なんで子供がいるのかとか俺が聞きたいくらいだが、俺も依頼はこなさないといかんのでね。」

「はあ……」

「！」から出るな。何が起こつても壊れはしないし、そもそも他の奴は知覚すらできん。依頼が終わつたら戻るから、それまで待つとけ。」

俺の予想が正しければ、彼女は原作では本来死んだ「明石タ子」、そして女の子はその娘の「明石裕奈」だらう。

何故裕奈がここにいるのかは分からぬが、俺が何らかの形で介入して何かが起こつたのだろう。

俺は結界から出て鎌を取りだし、悪魔狩りに向かつた。

悪魔狩りはわりとすぐに終わった。

他の人たちの頑張りもあつて、残つていた上級悪魔2体と伯爵級1体を殺して終了。

戻つてきて、状況を説明してもらいつと…

明石一家で旅行に来ていた所、丁度止まっていた宿の近くで戦闘が始まった。

夕子さんは戦闘が出来るため呼び出され、参加。上手く立ち回り、順調に悪魔を撃破していった。

しかし明石教授（今は講師だが）の田を盗んで安全な場所から飛び出し、裕奈は夕子さんを探しだす。

運悪く伯爵級の悪魔に見つかり、殺されそうになっていた裕奈を夕子さんが庇い、負傷。なんとか魔法銃で頭を撃ち抜き、還したところで気絶。

つてな感じだ。後は俺が見つけて治療した、つてこつた。

「んで、聞きたいことがあるんなら聞くが？」

「私には治癒魔法の阻害術式がかけられていたはず。どうやつたんですか？」

「ん？陰陽術。それも最高レベルの治癒術を使つたんだ。」

「陰陽術ですか…いや、それ以前に何故私を助けたんですか？」

「依頼主はクルト・ゲーテル、依頼内容は援護と負傷者の治療。依頼されたからにはきっちりこなす。」

「理由はどうあれ、妻を治療してくれてありがとうございます。」

「もう何度も感謝の言葉を言われてもな……」

ふと気になつたことが生まれた。原作では夕子さんが殉職したがゆえに祐奈は魔法関係から離れることになった。

「ところで、だ。娘さんはどうする気だ？ ショックイングな光景を見たから恐らくトラウマになるぞ。記憶を封印するのかどうか、決めた方が良い。」

「あなたは…どう考へていいんですか？」

「俺は記憶の封印は基本的にしない。本人がよほど強く望まない限りは、だ。記憶はその人物を構成する重要なパートだからな。」

「そうですか…」

「後は…仮に記憶を封印しても、おそらく俺の姿を見た時点で再び思い出す。」

「何故そんなことが言えるんですか？」

「記憶封印…これはハツキリいつてあんたら程度の魔法使いが使っても大した効果は無い。」

「どうこういとですか？」

「あの魔法を使いこなせている魔法使いはほほいない。恐ろしく緻密な魔力制御がいるからだ。そう簡単に記憶の封印が出来てたまるか。出来るのは俺と『紅き翼』の泉野雪、あとは造物主くらいのものだらう。」

「はあ…」

「つまりだ。不完全にかけられているのなら、俺みたいに目の前で母親を救つたような重要人物が現れたときに封印が外れるからだ。」

「なら、記憶消去はどうですか？」

「アレだけはダメだ。使うな。アレは記憶封印以上に精密な魔力制御がいる。はつきりって使った後に人格が壊れる可能性の方が高い。下手したら人間関係を壊滅させる恐れがあるくらいだ。むしろ殺した方がいいってレベルになることもありますから得る。」

顔を真っ青にする明石夫妻。

「まあ、一般に伝わってる記憶消去の魔法はその大体がただの記憶封印魔法だがな。」

少しだけ顔色が戻った。

「ただ、これは俺が巻き込んだことだし、俺にも責任がある。俺に任せるんだったら、彼女が中学生になつたら魔法の指導をしてやるつもりだ。」

「何故そのような事を?」

まあ、普通の反応だな。

「俺には義理の娘がいて、魔法を知っている。で、麻帆良に通わせるつもりだ。見た感じ大体あんたらの娘さんと同じくらいだし、面

倒な事態になつてるのは俺にも責任がある。どうだ？」

明石夫妻はお互に向き合ひ、頷く。

「では、それでお願いできますか？」

「了解した。これは頼みだが、魔法を教えるのは良いが、魔法生徒にはしないようにしてくれ。」

「別に構いませんが…どうしてですか？」

「夜の警備員なんかやつて死んでもらつたら後味が悪すぎる。ついでに言つと、変な正義思考を持たれて反発を買われるのも嫌だからな。良いか？」

「ええ…分かりました。」

「んじゃ、俺は失礼するぜ。ま、散々ボコボコにしてやつたから襲撃は無いだろうし、ゆっくり観光でも樂しみな。じゃあな。」

手を振りつつ転移魔法。まさか裕奈と接点を持つとはな…

メガロに戻ると、疲労した様子のクルト発見。

「どうした? クルト?」

「いえ…アスナちゃんが稽古をつけてくれつていうから軽く相手をしてあげたなんですが…」

「あー…」

「クルトは結構強かつたよ。でも物足りない。」

「ちょっとアスナは強くしすぎたかもしれん。」

「いや、かも、じゃなくて強くし過ぎですよ…僕何回か死ぬかと思いましたよ?」

「うーむ…神鳴流の技は教えてないんだがな…」

「身体能力が高過ぎるんですよー。咸卦法使って打ち込んで来ますし、アーティファクトは意味がわかりませんし…」

「あれな。」

「ふふん。」

上機嫌なアスナ。つーかクルトも結構な実力者なんだがなあ…

「まあ良いだろ。じゃ、クルト。また連絡くれよ。」

「ええ、それではまた。」

アスナと共に、次はどこへ行こうか。

～コキの原作破壊劇～（後書き）

ゆーな魔改造フラグですよ。

## 「ユキの原作破壊劇 part2」（前書き）

アンケートはもうすぐ締め切ります。具体的な日時をこうと12/3 19:00で締切です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから1つ選んでください。

## ～コキの原作破壊劇part2～

SHDEコキ

どうも、泉野雪です。

今はタク子さん救出から1年と数ヶ月、1995年1月です。

その間は特に何も無し、世界中を巡っていましたけどね。

今の居場所はトルコのイスタンブールです。

「つたく…」ことになるんだつたらクルトに予定を聞いておくんでしたね…」

アスナが追い付けるレベルで急ぎます。今何をしてるかですって？悪魔を切り落tttているんですよ。

『完全なる世界』のゲート襲撃です。

つーか嫌な予感しかしないんですよ。何故かつて？ここに来るまでに合流した味方は『悠久の風』。勘が良い人なら分かつたでしょう。ガトウと連絡はとれていたので心配して無かつたんですが、ここにきて修正力が働いた可能性もあり得ます。

人払いが済んでいるとはいって、奴等もやることがえげつないです。大量の悪魔を召喚してるわけですから。低級悪魔の大量召喚、数の暴力ですよ。

「えい！」

アスナも横から襲いかかってくる低級悪魔を切り捨てます。『ハマノツルギ』効果で一撃でも当てれば一発で還せます。もつとも、そうでなくとも真っ二つになってるんで還るんですけど。

「神鳴流奥義！斬魔剣 式の太刀！」

今のアスナですよ？詠春から許可もらいましたんで神鳴流は教えました。つーか物覚えが良すぎです。魔法球使ったとはいえ、半年で覚えてしました…他の人泣きますよ？

「ユキ…こっちの方が多い！」

突然アスナに呼び止められました。急いで近づくと狭めの道に悪魔が溢れています。もつとも、こちらからみて後ろを向いていますが…

「味方は向こうにいるでしょうから…突撃しますよ…」

「分かった！」

剣に気を纏わせ走る。使うのは広範囲攻撃の奥義

「「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！…」」

広範囲に気によって出来た雷が炸裂し、大量の悪魔が吹き飛ぶ。

それに気づいた悪魔が一斉にこちらを向く。っていうかどれだけ集まってるんですかね？

一気に走り込み、回りを大量の悪魔に囲まれた状態にして

「神鳴流奥義！百烈桜花斬！！」

一気に切り捨てる。こうした方が早く倒せますし。

切り捨てたところをアスナが一気に走っていました。

「百花繚乱！」

直線上に気を放ち、敵を吹き飛ばしつつ。

私が悪魔を殲滅したところで、アスナから念話が繋がりました。

（急いでこっちに来て！ガトウが大変！）

こちらの返事も待たずに切りました。結構マズイことになつてますね…

急いでアスナの方に向かいます。

到着したところには、腹から大量の血を流すガトウと慌てているアスナとタカミチ。

「雪…か…？」

「ユキ！」

「雪さん…」

「落ち着いて。」

そつと手を当てる。生と死の境界を弄り、『治癒』をかける。

「全く…貴方のような実力者が何をしてるんですか。」

「スマン…不意をつかれてしまった。」

立ち上がるうとするが、上手くいかずに座り込む。

「血が足りてないですから、今動くのは諦めて下さい。」

「良かつたです…ありがとうございます！」

「感謝の言葉は要らないですよ。私たちは仲間でしょう？」

「それでも、ですー雪さんが来なかつたら師匠は死んでもおかしくなかつたんですからー！」

「はいはい…」

そしてタカミチの顔を見て思ひことが一つ。

「それにしても…タカミチ君。」

「何ですか？」

「老けたね。」

「私も思つた。」

グサツと何かが刺さった、そんな音がなつた気がしました。

「アハハ… そんな…」

「ダイオラマ魔法球でも使いまくつたんじゃないの?」

「ガトウと同じ年くらいで見える。」

さらり何かが突き刺さる音が聞こえた気がしました。

「まあそんのはほつといて、アスナ。」

「分かった。」

剣を地面に突き立てるアスナ。すると半径3mほど の半球状の結界が張られます。

「私はこれから残りの悪魔を潰しますんで、3人は待っててください。」

何か文句を言われる前に移動しました。さて、悪魔狩りです。

悪魔狩りを終えて、『悠久の風』に感謝されて、その場で解散。

とあるホテルの一室で、私はガトウとタカミチと話をします。アスナはすでに寝てますよ。

「それで、どうしたんだ?」

「私から話があるって言いましたからね。

「アスナの成長阻害が無くなつたようなんです。それで、小学校に通わせよつと思つてるんですが……」

「小学校に?」

「ええ。麻帆良小学校に入れようと考へているんです。」

「何故ですか? アスナちゃんは頭脳明晰、はつきり言つて器じや無い気がしますが……」

タカミチの疑問は分からなくは無いですね。

「そうではあるんですけどね。はつきり言いますが、アスナには同年代の『友人』がないんです。」

「――」

「で、友人関係を築くためにも通わせたいんですけど……どうでしちう?」

「いいんじゃないか?」

「そうですね。僕もそつ思ひますよ。」

「それなら良いんです。で、これはお願ひ何ですが……」

私の出したお願い。一人は驚いた顔をしましたが、納得してくれました。

翌日、朝。

「じゃあ、頼みましたね。」

「ええ、任せください。」

「ユキと別れるのは寂しいけど、待ってるからね。」

私のお願い。それは来年度からアスナを入学させること、魔法生徒としては通わせないとのこと、もう一つ、アスナと一緒に離れること。

しばらく一人で旅をしたいといつ理由にしておきました。

本当の理由は、私とずっと一緒にいると原作から性格が大きく解離し、展開が読めなくなる可能性があるからです。いろいろとアレですが、実際『友人』を作つて欲しいんですよ？

まあアスナが中学生になつたら麻帆良に行くつもりですけどね。明石夫妻との約束もありますし。

おつと忘れてました。アスナの名前は「泉野明日菜」になりましたよ。神楽坂では無いですよ。

私は手を振つて離れます。

「待つてるからねー！」

アスナには珍しく大声で宣言。ちゃんと戻らないと、ね。

さて、後6年、ビニで何をしましょうか。

## ～ユキの麻帆良入りあと少しへ（前書き）

アンケートの締切は12/3 19:00ですよ。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
  - 2 女子寮管理人
  - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから1つ選んでください。

今回は埋め合わせの回… ゆえに短いです。スミマセン。

～コキの麻帆良入りまであと少しへ

SHODEコキ

どいつも、泉野雪です。

アスナと離れて早6年、様々な事がありましたが、特にこれといったことは起きました。

いや、ネギの故郷の襲撃があつたはずじゃ無いのが、ですか？

アレには私はノータッチです。とかか変に介入してやせこじくなつても嫌ですし…

で、今どこののかと言つて、京都の近衛家のところです。

いやはや、やることが無くて暇なのですよ。世界中を転々として、賞金稼ぎもしてはいるんですけどね。

「はあ～暇です。」

「お前がだれているのは珍しいな。」

「良いじゃないですか。アスナと一緒に離れて起きたかったんですね。詠春の気持ちを感じてみようかと…いや、木乃葉さんの気持ちに行つた方が正確ですかね？」

「まあ…やうやうなあ。詠春はんはあくまで男やしなあ。」

ちなみに木乃葉さんは木乃香を生んだ後体調が優れず、一時危篤状態になりましたが私が治療しました。

やっぱり大きな魔力を持つ子を産むと危ないようです。

「しかしなぜ離れようなんて思つたんだ？お前が固執しているとは感じてなかつたが…」

「血を見せたくなかつた、感じさせたく無かつた、そんな感覚ですね。私の仕事を休めば良かつたんでしょうが、それは嫌でしたんで。」

「詠春はんとウチが木乃香に魔法に関わつて欲しうつない、それとおんなじ気持ちつてことかいな？」

「そうですね。いづれは関わることになるでしょうが、それでも一時的にでもいいから離してあげたい。そんな気持ちですよ。」

ですが、ただの偽善でしか無いんですよ、それは。

一人の親としてはその判断も間違いではないでしょ。が、『大戦の英雄』としては恐ろしく不適切な判断ですよ、詠春。

我なら早くから陰陽術を覚えさせて、それで暮らさせますね。魔法に関わっていたって幸せな生活は出来るんですから。

原に私はアスナには色々と覚えさせていますし。まあ『ハマノツルギ』を地面に突き刺して籠城すれば大抵の魔法使いには負けないですよ?

だつて『無効化』結界ですから。一発で許容量を越えれば割れますけど、一発で割らないと全部パーになるんです。あくまで地面に突き刺し続けた場合ですが。

地面に突き立てて張つた場合、そのあと剣で攻撃出来ますが、許容量まで無効化した分が蓄積されるようで、そのうち割れます。

許容量はナギの『千の雷』で3回分といったところ。

反射結界の場合、地面に突き刺し続けても地面に突き立てて張った場合でも変わりません。

ただ、強度は無効化に比べてかなり落ちます。ナギの『雷の暴風』がギリギリ反射出来るレベルでした。十分すぎますね。

「うーおー」

とまあグダグダ説明はしたなんですが。何より…

「地球外言語話しても俺には分からんぞ。」

「ついで言われてもなあ……」

「やねーじが無いってこの辺はえーじやないですか。」

「まあやうですね。そういう風に都合悪いことあります。どのみちあと数か月したら仕事なくなるでしょ、つー。」

麻帆良に行くまあと数か月。それまで近衛家のんびりさせてもらこますかねえ……

アスナとの再開は楽しみです。

「ユキの麻帆良入りまであと少し」（後書き）

時間がぶつ飛びました。

ユキはネギ関連のイベントは総スルー。

理由は本文に書いた通り、変に介入してややこしくなるのが嫌だからです。

## 「ユキの麻帆良入り」（前書き）

投票の結果、ユキは教師になりました！

質問：『完全なる世界』はかなり処刑したからネギの村の襲撃そのものが無いのでは？

回答：世界の修正力、ということでお願いします。悪魔を召喚した人物は別に現れた、処刑されなかつた、等で。

## ～コキの麻帆良入り～

SHADEコキ

どつも、泉野雪です。

ふとあることに気がついたんですよ。私が麻帆良に行くとして、あまり早くから行くとどうなるのか？って。

最悪私がいるがゆえにアスナの友人関係が狂うんじゃないか？と思いまして。

いや、すでに狂っていてもおかしくないだろと言わればそれまでなんですが…

と言つわけで麻帆良に来るをおよそ1ヶ月ほど送らせて、今はゴールデンウィーク。そして場所は麻帆良学園の学園長室前。

コンコン、ヒノックをする。良いぞ、と返事が来たのでドアを開ける。

田にはいるのは学園長の長い後頭部、ぬらりひょんじょ、アレ。

「はじめまして、『属性を統べる者』、泉野雪殿じゃな？」

「ええ、その通りです。麻帆良学園長、近衛近右衛門さん。まずはお礼を。アスナをこの学園に受け入れてくれたこと、感謝しています。」

「構わんよ。タカミチ君から聞くに、ガトウ君の命を救ってくれた

「やつじやないか。」

「それでもです。それに依頼していた通り、魔法生徒でも無いみたいでし。それだけでは足りないかと思いまして、学園長から何かお願いがあるのならお聞きしますが…？」

「学園長に利用されたらひどい無いですけどね。」

「やつじやの…では、1・Aの担任をしてくれんか？」

「担任ですか？」の時期に担任を変えるとすると混乱を招くのでは？」

「普通のクラスなりの…。そのクラスの担任はタカミチ君、副担任はガトウ君なんじや。」

「はて…『悠久の風』に所属しているタカミチ君が担任ですか…？その上同じ立場のガトウさんが副担任…つまり一人とも『出張』として活動しているからあまりこちらにいらっしゃないから問題無いこと？」

「その通りじゃ。」

「ふむ…」

「っこで言えればアスナ君はそのクラスじゃが…どうじやへ。」

「うーん…分かりました。受けましょ。」

「ありがたい。それで次じやが、魔法関係者にお主の事を伝えて よいか？」

「じつせ名前で分かるでしょうし、構いませんよ。」

「ほう、それは良かつた。」

一  
た  
だ  
し  
！  
」

ノアが死ぬ。アーヴィングの死。

「学園の警備をしろとかは言わないで下さいよ?」

「む：それは何故じや？」

「はっきり言いますが、とある事情のせいで私は『正義の魔法使い』が大嫌いなんです。もし警備なんかして誰かが私の行動に口を挟んだらうつかり殺しそうになります。」

「むう…じゃが」  
「ああ、ついでに言つておきますがアスナも『正義の魔法使い』は大嫌いなんですよ？彼女と私は一緒に行動してましたし。」

「ハセサウエイの魔術アーティスト。直アーティストの魔術アーティスト。」  
と、黙つて。

「そ、そうか……顔合わせ位はいいのかの？」

「それくらいなら。ただ、それはもう少し待ってくれますか？」

「構わんが… どのくらいじや？」

「ゴールデンウイーク明けに私が担任であることを説明したあとで

すね。」「

「わかつたぞい。」

「それでは、失礼しますね。」

そういうて学園長室を後にする。後数日があ…楽しみです。

アレから数日、ゴールデンウィークが明けた初日。

「それにしてもまたふけた? タカミチ君。」

「ハハ…言わないで下さこよ…気にしてるんですから…」

今は廊下を歩いてます。1・Aに向かってます。

「そういうえばガトウは? 見なかつたけど。」

「師匠は『悠久の風』の活動です。今どきにいるのかは知りませんが。」

「そ。」

「そんな興味が失せたつて顔されても…今日の夕方には帰つてくる  
そうですよ。顔合わせもあるでしょ?」

「やついえば今日の夜でしたね…ああ面倒くさい。」

「面倒つて雪やで…あ、つきましたよ。」

グダグダ話していると到着。そして一言。

「ねえタカミチ、」れつて引っ掛けた方が良いんですか?」

「あ…やつ言えれば事情は説明したけど性別とか説明してなかつたですな…スミマセン。」

「まあ良いです。この程度の罷たけ、粉々にしてやります。」

そつこつてドアを開ける。

まず降つてきた黒板消しは普通にキヤツチ、ワンテンポ遅れて降つてきたバケツもそのままキヤツチし、床に置く。

歩いて紐を踏んで、飛んできた吸盤付きの矢は手でキヤツチ、最後に降つてきた金だらいは

「ちえこわーー!」

回転蹴りで後ろまで吹き飛ばす。ガーン!といい音を立てて壁に激突、落下。

唖然とするクラス、タカミチが入ってきて話しう。

「えーと、眼はひとまづ置いておいて、これからが今日から皆の担任

になる泉野雪先生だよ。」「

「セレ、紹介もしてもらひたけど自己紹介。担任になつた泉野雪よ。よろしくね。」

『せ……』

き?..

『きれ―――――。』

綺麗、ですか。一瞬にして沸き上がるクラス。

ちらりと見て反応したのはエヴァ、刹那、マナ、超の4人。

「はいはーーー皆の質問は麻帆良報道部の私、朝倉和美が代表しておこないまーす!」

横目でタカミチを見る。どうせ次の授業はタカミチが担当だし、別にいいって感じですね。

「まず、泉野つて明日菜と同じ名字だけど何か関係はあるんですか?」

「そうねえ…アスナを見てみたら?」

「どうじつ…つて、え!?アスナ!…ちよ、なんで泣いてるの!…?」

「ユキ…会いたかった」

アスナが飛びかかってきたので受け止める。

「「「めんね、長こー」とほつたらかしこじで。」

「別に良いわよ…本当に戻つてきててくれたから…」

頭をゆりぐつと撫でてあげる。

「え……と……これは？」

「アスナは義理の娘。もう6年以上会ってなかつたけどね。ほら、席に戻つて。」

「うん…あつがと…」

ゆりぐつと席に戻るアスナ。

「ええと、気を取り直して…ずぱり、好みの男性のタイプは…？」

「つーん…あまり気にしたこと無いから分かんないわね。」

「ふうむ…では趣味は？」

「読書と料理かしら。お菓子作りも好きよ。」

「なるほど…では担当の教科はなんでしょう？」

「数学よ。もつとも、他の教科も教えるから質問に来てもいいわ。」

「

「ふむふむ……男性だつたら年齢とかきくるんだけどなあ……（ボソッ）

「

「ぶつぶつ言つてゐるけど内容聞こえましたよ？」

「あ、年齢は詳しきは教えないけどタカミより年上よ？」

『うそつ…？』

「まさかの衝撃事実、…その若々しい見た目をどうやって維持してゐるんでしようか！…？」

「バランスの良い食事、適度な運動と睡眠、これだけよ。」

まあ不老なんですけどね。

その後は普通に授業。授業の終わりを開けておいてくれ、とタカミチにはあらかじめいつておいたので連絡。

「さて、歓迎会をしたいんなら明日にしてくれる？出来れば久しぶりにあつた義理の娘とゆつくり話したいからね。」

さすがにこれに異を唱える人はいませんでしたよ。

その後は普通に私も授業をこなし、仕事も終わらせました。

で、今は『コーヒーショップ』。アスナと話をするためです。

「ふう…質問攻めにあつちやつたわ。」

そつさいながら『コーヒー』とカフュオレを持つてくるアスナ。私が『コーヒー』です。ブラックですよ？

「悪く思ひますよ。それは。」

「ホントよ。かなり疲れたんだからね？」

「ふふ…まあクラスメイトとは仲良くなっちゃってみたまうみたいね。」

「ん、まあね。ユキは『完全なる世界』の残党狩りでもしてたんでしょう？」

「そうね…叩いても叩いても減らないんで面倒になつてきたけど。」

「それは…仕方ないわね。」

「ま、私のことばかり話しても仕方ないです。クラスメイトについて報告してくれます？」

「ヒガーンジーリン…」

「『闇の福音』のヒガーンジーリンね。正直見て驚いたけど…」

「タカミチに事情を聞いたなら、ギに『登校地獄』って呪いをかけられたらしいわ。ただ、適当にかけたのかもう10年以上中学生をや

つてゐみたい。」「

「としたひ…それは解呪ね。許容量越えた魔力、流せば呪いは壊れる  
か?…他には?」

「やうねえ…長谷川千鶴けやん。」

「何があるの?..」

「大有りね。彼女は認識阻害が効いてないみたい。クズ（正義の魔  
法使い）は気付いているかどうか知らないけど、そのうち壊れる可  
能性があるわ。」

「うーん…今度面談して」ひびき（魔法側）に引き込もうがじひ。

「出来ればそりあがへ。もちろん千鶴ちゃんの意思を確認して  
み。」

「分かつてますよ。他には?..」

「近衛木乃香の護衛に桜咲刹那がつてて、つてこののは?」

「詠春から聞きましたよ。ただし、今日見ただけでも…ま…」

「やうなのよね…アレじやなくてストーカーよ。さういふ

も。」

「うーん…アレが護衛として為つてないつて直観するのが一番だ  
らうけど中々機会が無くてうなのが一一番だ

る。」

「時が解決するのを待つって」と?

「アハ。木乃番ちゃんには悪いけど、時間がかかりそうね。」

「そつか。ま、仕方ないか…」

「あ、そつか。明石祐奈ちゃんには魔法を教えるつもりよ。」

「くへ…びじて…」

「いや、簡単にこうと雪織がくまをやらかしたんだけど…魔法世界で親が死にかけてたのを助けたのよ。」

「なるほどね。自分が巻き込んだことだから、つてやつね?」

「ア。他に何がある?」

「うーん…無いわね。」

「じゃあ今からアヴァンジエロンの呪に解きに行けば、ビバアル

?」

「行こうかしり…でも今口顔合せてしまふ?向でそんなことがあるの?

?」

「ん…愚弟がやったことならぐにでもやらな」と、ね。アスナは顔合せに来る?」

睡眠薬をちりつかせる。

「クズ（正義の魔法使い）の実力把握にはなるか…行くわ。」

睡眠薬を受けとるアスナ。

「じゃ、エヴァンジエリンのところに行きましょうか。」

「ええ。」

私はアスナと二人、エヴァの家に向かいました。

## 「解呪、顔合わせ」

SHADEゴキ

歩くこと数分、Hヴァアの家が見えてきました。

「なんとこか、意外ね。」

「セウ？ シックな感じのログハウスじゃない。」

「あんまりエヴァちゃんのイメージに合わない、ってことよ。」

「つあえずノック。呼び鈴が無いのは何故？ 気にしたら負けですね。」

「はい……」

扉を開けて出てきたのは絡繳茶々丸さん。そつ言えばエヴァの従者でしたね。

「泉野先生に明日菜さんでしたか。何かご用ですか？」

「ふふ…『闇の福音』Hヴァンジョン・A・K・マクダウホールさんに用事があつてね。良いかしら？」

すると茶々丸さんの目がスッと細くなる。

「マスターに敵対するつもりなら排除させていただきます。」

「まあか。エヴァちゃんにとつて良い話を持ってきてあげたのよ~。」

「それは……」

「どうこうことだ? 泉野雪に泉野明日菜?」

家の奥からゆっくりと歩いてくるエヴァ。

「敵対はしないから家に入れてくれる? 立ち話は嫌だし。」

「ふん……良いだろう。」

家の中に。

「で、何が目的なんだ?」

单刀直入に聞いてきた。シンプルな方が良いですし。

「『登校地獄』の解呪、と言つたら?」

「なつ…出来るのか! ? というかそもそも何故だ! ?

「エヴァちゃんつてもう何年も中学生やつてるんでしょ? ナギのせいで。本来ならとっくに外れてるから解いてあげるってことよ。」

アスナが答えると顔をしかめた。

「そもそもお前が何故そんなことを知っている?」

「馬鹿にしてる?私はユキと幼い頃から行動してたのよ。だから魔法は知ってる。タカミチに聞いたら簡単に答えてくれたわ。」

「ま、そんな感じよ。で、どうする?解いて欲しい?」

「それは…出来れば解いて欲しいが…」

「何が目的なんだ?ってこと?..」

「ああ。」

「ま、普通なら気になりますよね。」

「まず、私に敵対しないこと、それから何人か弟子をとるつもりだからそれに出来るだけ協力すること。主にこの二つね。」

「一つ目は分かるが…二つ目は何故だ?お前だけで十分だろう?..」

「うーん…実践訓練をやるときの相手が欲しい、ってことよ。私がだとどうしても偏りが出るからね。」

「分かった。それで良いだらう。」

「契約成立ね。じゃ、ちょっと頭を触るわよ。」

「んっ…」

エヴァの頭に手を置いて、軽く魔力を流す。

スキャンです。

「…適當にかけすぎですね。呪いが無茶苦茶…呪いの仕組みを逆算…完了。」

「んじゃ、ドーン！」

「げふう！？」

「マスター！？」

解呪用魔力弾をぶつけました。

「き、貴様…」

「解けているでしょ？」

「何？」

自分の体をペタペタと触るエヴァ。

「フ、フハハハハハ！解けた、解けたぞー！これで私も自由だ！」

そして高笑いする金髪幼女。

「はいはい…高笑いは良いけど、魔力は半分程度まで押さえられてるわよ。」

「何だとー？」

「学園結界そのものに魔物に対する力の封印作用があるみたいよ？」

「こればっかりは仕方ないわよ?」

「フン…学園の外に出れば問題無いのだろう?…そのくらい構わん。」

「あ、これは教師として言ひナビ、学校には来てよ?・不登校とか面倒だから。」

「さすがにいきなり来なくなつたらクラスのメンバーが騒ぐからね。」

「

「うぐ…仕方あるまい。」

その後はうだうだと雑談をして、アスナは寮に、私は自宅に戻りました。

深夜、私はアスナと合流して、世界樹広場に向かいます。  
「つていうか深夜に集合つてどつなのかしら?」

「それはお肌の手入れ的な意味ですか?」

「そうよ。なんだつてこんな時間にやるんだか…まあ一般人に見られないように、っていう理由なのは分かるけどさ。」

「まあ仕方ないですよ……つと見えてきましたね。」

大人数の魔法先生と魔法生徒。いやはや、壯觀ですね。

「ふお……ちょうど来よったわい」

学園長が氣付いたようですね。

注目も集まつたところで、始めますか。

「どうも、警備するつもりは一切ありません、泉野雪です。」

「同じく警備する気の泉野明日菜よ。」

「ふおーー?」

「どうこいつことだー警備するつもりが無いとはー。」

「あなたは…ガンドルフィーー先生ですか。そのままの意味ですよ？学園の警備を手伝うつもりは無いこと。」

「まさか『英雄』だから学園の警備を手伝ってくれるとでも思つてたの？だとしたらアンタは一度入院したほうが良いわよ？」

「なつーーー！」

「クク…ハハハハハハ！面白いーさすがに私の封印を解いただけあ  
るー！」

高笑いと共にエヴァ登場、飛んできましたよ。

「なんだと！？」

「おや、何か不都合でも？」

「君は彼女が誰か分かつてているのか！」

「ええ分かつてますよ。『闇の福音』でしょ」

「だつたら……！」

「何年も不正に封じられていた一人の吸血鬼の封印を解いた。それだけのことですが？」

「なつ……しかし彼女は『悪の魔法使い』だぞ！？」

「『『悪』つて何？』

「は？」

「自己防衛のためにやむなく犯した殺人と、自分の魔法の実力を知るための殺人。どちらが悪？」

「それは…後者だろう。」

「そ、だつたらナギ・スプリングフィールドは悪でエヴァンジェリオン・A・K・マクダウェルは善ね。だつてそれが事実だもの。」

「な……しかし彼女は真祖の吸血鬼で…」

「種族がそうつてだけね。それがどうかした?人並み外れた力と魔力、そして生命力を持つだけでしょ?」

「く…」

おやおや、この程度で黙りますか。

「なら何故明日菜君は魔法生徒ではないんだ!? 魔法のことを知っているんだろ? うー?」

標的変更ねえ…

「私が頼んだんですよ。そうするよう!」

「何故だ!?」

「アンタらを殺しそうになるから。」

アスナがガンドルフィーにむけて殺氣を放つていてるみたいですね…顔が青くなつてますよ?

「私は『正義の魔法使い』が嫌いなの。死ぬほどね。何故か知りたい?」

私を見るアスナ。ま、良いでしょう。

「私、泉野雪。1つの顔は『属性を統べる者』。」

突然話し出した私に、全員が注目する。私は服装と髪の色を変化さ

せ、大鎌を取り出す。それと同時に、人格を入れ換える。

「もう一つの顔は俺、『漆黒の死神』、零崎雪織だ。」

「おや？ 唾然としてるな。ちなみに俺は殺し方が残虐だつたって理由から『正義の魔法使い』には疎まれているからな。」

「ユキオリは賞金も何もかかっていない。ただ殺し方が残虐だ、それだけの理由で『正義の魔法使い』どもに命を狙われた。もつとも、全員殺さずに退却させてたけどね。私はユキオリとも一緒に行動していたから。」

「ふん。あんな光景みれば誰だつて嫌いになるわな。」

「それくらいにしてくれんかの…」

「やつと」を復帰した学園長が発言。

「まあ良いぜ。ただ攻撃されるのは嫌だから、実力差をはっきりさせたいと思つんだが？」

「ふむ…分かつた。良いじゃらう。誰かおらんかの？」

その言葉に反応して出てきたのは刀子、グラサン、ガンドルフィー二、高音・D・グッドマンの四人。

「んじやお前らはアスナの相手だ。いいな？」

「な…4対1ですわよ…？」

「こへりなんでも」れば…」

驚く四人のうち、高音と刀子が言つ。が、

「悪いがこのへりこじれませんわい。アスナ、いたるか?」

「ちやんと訓練はしてたから、充分にけるわよ。」

「ま、このへりこじれなしてもらわんとな。わい、

「タカミチ一ガトウーお前らが俺の相手だ。」

「雪織は勘弁してえな…」

「僕も勝てる気がしないので遠慮したいんですけどね…」

諦めた顔で一人が出てくる。手加減はするつもりだがな。

「まずはアスナの方からだな。学園長、いいな?」

「仕方ないの……血圖はするが…頼むから殺しづらしくしてくれんか?」

「そのへりこは良いわよ。ただ、手足がちぎれても文句は言わないでよ。」

「その程度俺が治癒してやる。だから本氣でやつな。」

「分かったわ…『来れ』。」

お？』ハマノツルギ『を使つか。

「では…始めー。」

学園長の合図。ア、模擬戦か。どうなるかな？

「解呪、顔合わせ」（後書き）

なんか急展開？な気がする…

次回は模擬戦です…戦闘になるかどうかは別として。

## （模擬戦 アスナ対4人）

SIDEアスナ

「では…始め！」

「咸卦法」

学園長の開始の合図と同時に咸卦法を発動させる。って…驚いた表情？ここが戦場なら死んでるわよ？

指摘するのも面倒だけど、話そつかしら。私は目の前の地面に向けて斬岩剣を放つ。それは見事に地面を抉り、轟音を立てる。

「動搖してる暇があるの？私がその気ならアンタたち全員死んでるわよ？」

「『影』！」

その言葉で始めてに我に帰ったのは金髪の女。これは…影魔法の使い魔召喚。珍しいじゃない。

直後に復帰したグラサンは風の『魔法の射手』。無詠唱だし魔法使いとしてそれなりかしら？

「『無極而太極斬』！」

ま、食らひ理由も無いし、それらを全てかき消す。

『なつ！？』

ホント、戦闘の「せ」の字も知らないのかしら？ 一いちいち驚くとか。瞬動で金髪のところまで一気に移動し、首に峰打ち。

ドサッ

意識を失った金髪はその場に倒れこむ。

「……ディグ・デイル・ディリック……」

「やられるとと思う？」

「グフツ！」

瞬動、グラサンを掌底アッパーで打ち上げる。

腹這いに打ち上がったグラサンのところに飛び上がって移動、何回か蹴りを入れて虚空瞬動、踵落として勢いを殺す。

ボキッ

あ、なんか嫌な音聞こえた。背骨折れたかも。

落下し出したグラサンの頭を両足で挟み、地面との距離を測つて後方回転、そのまま叩きつける。

ズドン！

「浮雲・桜散華！？」

「正解。それにしてももう一人ダウン。弱すぎよ？」

残つた女の方は神鳴流を知つてゐるのね。まあどうでも良いけど。

「つと危ない。」

今のは魔力弾？みればガングロが銃を構えてるわね。実際のところ効かないんだけどね。

「君のことを甘く見ていたようだ…少しは本氣でいかせてもらつー。」

そう言つて魔法銃を乱れ打ちしてくるガングロ。でも馬鹿じゃない？女はどうみても前衛、だつたら後ろで強力な魔法の準備でもしつくべきよね。

つてか弾密度薄いし。このくらい余裕よ。適当に避けつつ咸卦法を解いて軽く斬空閃を放つてみる。が、障壁に阻まれる。

咸卦法解いたのは神鳴流を使うためよ。後でユキに聞いてみようかしら…咸卦法のまま神鳴流使えないか？つて。

弱冠安心した表情になつたけど、甘すぎよ。すぐに斬魔剣・弐の太刀を放つ。

ボトッ

音を立てて右腕が落する。何が起こつたのか認識出来ていない内に、左足も斬り落とす。当然バランスが取れなくなつたガングロは倒れる。

悲鳴が出ない？ああ、多分ショックで氣絶したのね。

「な……な……」

最後に残つたのは女、おやらく神鳴流剣士。

「なんで神鳴流が使えるかつて？今はどつでも良いでしょ。」

「クッ…神鳴流奥義！雷光剣！」

チヨイス間違えてるわよ。たしかにそれは威力は大きいけど、隙も大きいのよ。

普通に瞬動で後ろに回り込み、首に峰打ち。さすがに女性だし、傷がつくのは嫌でしょ？ 仮にも模擬戦なのに、ね。

学園長を見る。が、啞然として、物も言えそつにない。

「決着はついたわよ。どうでも良いけど男一人はさつと治療した方が良いわよ？」

「う、うむー急いで治療を！」

「『『治癒』』」

学園長が指示を出したところで、雪織が治癒魔法を発動。

「どうだった？」

「中々良かつたぜ。体術も剣術も。しっかり修行してたんだな。」

「当たり前よ。」

「断面が綺麗だからガングロの治癒もラクだ。詠春にも効かないだろうな。」

「そう? それは嬉しいわね。」

剣士として一流って事だしね。

「むむ… アスナ君がこれほどまでに強いとは…」

「油断しすぎなのよ。そもそも連携も何も出来てないし。模擬戦だからって気持ちでもあつたんじゃないの?」

「やはり警備に参加して…」

「嫌よ。私は自分に降りかかる火の粉を払うだけ。出来るなら友人の分も払う。けど、この学園そのものを警備する気は無いわ。」

「むぐ…」

「だつてこの学園広すぎるんだもの。まあ私の気分によつては女子寮の近くによつてきた侵入者を潰すことはするかもね。」

ピクリと反応したのは桜咲刹那か…ちょっといわ。説教してあげよ。

「そうねえ…近衛木乃香の護衛をしていると勘違い(・・・)している桜咲刹那みたいな事をする気は無いつて言つてるのよ。」「なつ…」

「まさか学園の警備をすることで一個人の安全が守れるとでも思つ

てたの？いつもいつもストーカーのよつにつけてるだけで護衛が務まるとも？だとしたら相当馬鹿ね。」

「貴様……っ！」

「ほらこの通り。」

瞬動で首に剣を突き立てる。

「大した実力も持つてないくせに離れた場所から護衛出来ると思つてたの？私の接近も気付けなかつたアンタが？」

「クッ……」

「離れた場所から見守るような護衛つてのはたしかにいるわ。でもね、大統領のSPとか見れば分かるだろうけど、それつて近くで護衛する人物がいて始めて成立するのよ？」

あら、固まつちゃつたわね。その程度も理解出来てなかつたのかしら？

「ついでに言うなら元親友のアンタが木乃香に対してもよそよそしい態度をとつてるからつて木乃香は悲しんでるわよ？護衛対象の精神まで襲うにしてるのに護衛を名乗るなんて笑わせるわね。」

「つ……貴様に何が分かる！」

「分からぬわよ。私が言つたのはただの一般論。」

「なら…」

「ま、過去に護衛の失敗でもしてもっと修行しなければ、とかで躍起になつたりしたんでしょう。『木乃香の考えを全部無視して』。ただそれって護衛として失格じゃない?」

図星だったのか、口を閉じた。

「ああ、ついでに言うと成績を上げることをオススメするわよ。木乃香が高校に行くときにアンタが入れない、とか高校で落第して木乃香と同学年になれない、とかなつてもっと護衛が出来なくなつても良いんなら構わないけど。」

今度は顔が真っ青になつたわね。

「ハハ、傑作だな。ただ成績については雪が言いたかつたらしいぜ?  
?」

「『メン』『メン』。」

ま、私はこの辺で引くとしましょ。

「ただ今アスナが言つたことは真実だ。四六時中側にいるつてのも変だが、お前は木乃香から離れてる時間の方が多い。はつきり言ってプロから見ればお前は護衛として機能しないぜ?」

あらら、また固まつちやつて。ダメダメじゃないの。

「現に今…」

「お嬢様!?」

トサツと木乃香が落ちてきた。何時の間に座標を確認したのかしら？

「ハヤッて拐えるんだからな。」

「ねえ、たしかにユキは寮に来たけどどうやったの？」

「ん？ 木乃香は魔力がアホみたいに多いからな。 寮についた時点で座標の計算をやってたぜ？ かなり苦労したがな。」

スキマに木乃香を落とした… 戻したのね。

「まあ俺は例外だが… 実際今誰かが来て寮から拐うことも出来るからな。」

「一応私が結界張つてるからどこまで酷くはならないと思つけど… あ、また真っ青になつてる。ま、これで護衛として失格なのは分かつたでしょ。」

さてと、次は雪織対タカミチ・ガトウペアか… どつなるかな？

いや、雪織の勝ちは決まつてるからどこまで粘れるかってことよ？

## 「模擬戦 アスナ対4人」（後書き）

とてつもない一方的な勝負、…そして刹那に対する説教でした。

アスナはかなり修行しています。

## ～手合せヒヤの翌日～

SHADEコキ

俺は鎌を持って、タカミチとガトウの一人から少し距離を置く。ちらりと魔法先生と魔法生徒の方を見てみたが、俺が確実に勝てると思っているのはアスナだけのようだ。

エヴァはどうなるのか分からぬ、といった顔つき、残りは負けるに決まっているだろう、勝てるはずが無い、そんな感じだ。

「やつ言えれば俺は雪織とはやったことが無かったな。」

「やつだったか？バカ二人の相手ばっかりしてて覚えてねえんだ。」

「僕は雪さんにアドバイスを貰つただけですね。」

「ん、どのくらい成長したか、見せてもらひや。」

「ふおふお……いいの……では、始めい！」

一人から飛んできた居合い拳を見切り、避ける。

「ガトウは全盛期から落ちてるな？タカミチはとりあえず速さは十分だ。威力は知らんがな。」

「俺はもう年だからな…『悠久の風』から外れたよ。」

「僕はまだまだですが。これから本番ですよー。」

「まあ威力の確認がてら一発でかいの置くぜ？・リラ・カ・マギカ・ラ・ヒレメンタ、”おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ”」

「「一。」

詠唱を聞いて、すぐに二人は咸卦法を発動させる。

「『冥府の石柱』」

「「豪殺・居合い拳！…！」」

6本の石柱を、轟音を立てながら次々と碎いていく。

ガラガラと崩れ、土埃が舞う。正直見えないのは面倒だが……つと

飛んできた極太レーザーのような拳圧を避ける。正直楽勝だ。

「七条大槍無音拳たあやるじゅねえか！ただ土埃のせいで丸見えだぜー！」

そう、拳圧を飛ばす居合い拳が土埃で丸わかりなんだ。

「千条閃鎌無音拳ー！」

ガトウの声と同時に大量の無音拳が飛んでくる。俺も対抗してぶつけ、その衝撃で土埃は飛んでいく。

「ハア…ハア…」

ガトウは肩で息をしている。「いや本格的に衰えてるな。

「そー……うひー。」

鎌を勢いよく振つて、剣圧ならぬ鎌圧を飛ばす。

「ガフツ！」

それに直撃したガトウは吹っ飛ばされる。

「悪いがガトウは足手まといになるだけだろ?」

「ぐ…ああ…俺はリタイアだ。」

「つてなわけで一対一だ、タカミチ。」

「ハア……勝てる気はしないんですけど、ねつ！」

「よー！」

飛んできた豪殺・居合い拳に鎌圧を飛ばして相殺。

「そらそらそらうひー。」

追い打ちと言わんばかりに連続で放つ。が、それらを慎重に見極め、上手く避けていくタカミチ。

「回避も上手くなつたか?」

「せりや食ひわなければ良いんですからねー。」

今度はただの居合ご拳、しかしながらスピードで打つてくれる。が、俺も食ひかうよつないとはしない。

「どうしてなかなかじゃねえかー。」

「僕だつて修行はしきましたからねー。」

「ただな……まだまだ甘かったなー。」

「なつー?。」

縮地。

居合ご拳を握り潜り、一瞬でタカラチの後ろに回り込む。首には鎌が添えられてくる。

「どうやる?。」

「リリから挽回なんて出来ませんよ……隆参です。」

「よひしー。」

鎌をしまつて、学園長を見る。

「おーー終わったー。」

「ふおー? 勝者、零崎雪織!」

大半は信じられない、そんな表情。まぐれじゃないか、そんな風にも見える。だが、

「悪いですが畠さん、雪織さんは本気じゃ無いですよ…終始遊ばれてましたし。」

タカミチの宣言。それでもまだ納得出来ないような奴もいる。

「雪織が本気なら、『冥府の石柱』は6本じゃ終わらない。それこそ次々と落として圧殺するまで続けるだらうからな…」

たしかに24本くらい呼び出してひたすら鬼神兵に打つて潰したこともあつたな。

ガトウの言葉で漸く残りも理解したらしい。納得はしてないようだが、そいつらは知らん。

「まあ私と雪の実力は分かつたでしょ？手出しなんてしない方が良いわよ。それじゃ。」

「俺も帰るぜ。ここJの警備なんてかつたること誰がするかつてんだ…じゃあな。」

アスナは女子寮に、俺は自由こと帰った。

「なんですか？私は呼ばれるような事をしたつもりはありませんが？」

「わ…サ合戦の結果があれじゃつたにも関わらず警備をしないところに反対という方が多かったの…困ったんだじや。」

「はあ？ 知りませんよそんなこと。」

「じゃがの…」

「じゃがも何もありません。私は学園長から『一つだけ』言ひとを聞きます、と言つたのです。それ以上の事は私が善意でする事はあっても、強制される理由はありません。」

「む…」

「次いで忠告しておきますと、もし私を攻撃するような馬鹿がいたら反撃させて頂きます。アスナも同じことをすると感じますよ？ 攻撃の度合によっては殺す可能性もあるのド、しつかうと部下を纏めておく」とをオススメします。」

「ふお！？ それは勘弁してくれんかの…？」

「いこえ、しません。攻撃するとこり」とは反撃された覚悟がつての事でしょ？ もし食らえば死ぬような攻撃をしてきた場合、やれば自分が殺される覚悟を持つてこら、そり捉えさせて貰います。」

私は扉を開ける。施錠魔法？ 私にひとつには無くに等しいですよ。

「朝礼もありますし、私は失礼します。一度田は半殺しまでにするつもりですが、それ以降はどうなるかは分かりませんので。」

言いたいこと言つて、気分はそれなりです。

『泉野先生、1-Aによひじやー。』

パパンパーン！

放課後、書類を纏めたと思つたらアスナが私を呼んできました。そうしてついたクラスは何時の間にか飾りがつけられ、パーティー モード。

入ってきた瞬間にクラッカーが鳴らされました。誰が用意したんでしょう？

騒ぎ過ぎない程度に大騒ぎ、いやはや、テンションが高いですね。

あっちはじに回されて、何時の間にか携帯電話にはクラスのメンバーのアドレスが登録されました。

ちなみに千雨ちゃんは途中で帰りました。体調が悪い、とか言つてましたが嘘つて見抜きましたよ？

その時に明日の放課後に面談、というのを取り付けました。裕奈ちゃんは回っている間に面談を取り付けました。時間は指定したので

被る」とは無いでしょ。

やつじつてこの内に時間が経ち、お開きになりました。

～手合せヒルの翻訳～（後書き）

戦闘描写は相変わらず難しいです…  
ほとんど戦闘になつてない気がしますが、実力差ということでお願  
いします。

## ～個人面談…カウンセリング～

SHDE グキ

進路指導室でシャーペンをカチカチ。

そんなことをしながら待つこと数分間。

「ノンノン

「入って良いわよ。」

「失礼します……」

若干うつむき気味に顔を下げる、入ってきたのは長谷川千鶴ちゃん。

机を挟んだ位置にある椅子を示すと、頭を下げてゆっくりと座った。

「さて、と…面談つて言つたけど実際にはカウンセリングなのよ、これ。」

「へ？」

「貴女の悩み、解決します、とか言つてみたり。ふふ。」

ぽかーんとした表情になりました。

「失礼ですが、まだ一週間も経っていないのに私の悩みを先生が把握しているとは思えませんが…」

「せう～クラスに異様に多い留学生とか、あり得ない大きさを持つ世界樹に、訳の分からぬ図書館、果てはロボットのクラスメイト。それにも関わらず何の違和感も覚えずに過ぐしているクラスメイト。そんなのに適応する感じでしょ？」

「…」

驚いた表情をする千両ちゃん。井、認識障害の悩みはこんな感じでしょうか？

「これらは全ておかしい事。そつ感じているのは私だけ？」

「……私も……です……」

うつむいたまま発せられたのは、小さく、掠れるような声。

「だけど、これらの現象にはタネがある。教えて欲しい？助けて欲しい？そつ願うなら、そつしてあげる。どうする？」

その言葉で、顔を上げる。

「でも、今から話すことは知らなくとも生きていける。むしろ知らない方がいい場合もある。それで良いなら構わないわ。」

何分もの空白の時間。田常と非日常の境界に立つ千雨ちやんのだった答えは

「教えて下さー。」

非日常へと足を踏み入れるものでした。

「分かつたわ。」

「はー?」

その言葉と同時に、転移魔法を発動、魔法球の中へと。

「な……な……」

田の前に広がる海と砂浜。

「この世界には魔法があり、魔法使いがいる。それが答え。」

驚く千雨ちやん。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ”契約により、我に従え氷の女王、来れ、といしえのやみ、えいえんのひょうが、全てのものを妙なる氷牢に、閉じよ”『こおるせかい』」

ズドン！

轟音を立てて、突如、海に氷山が出来ました。ちよつとやり過ぎましたかね？氷柱で良かったんですけど。まとめ詠唱した場合突然氷柱がたつのは知つてましたけど…

「どう? 理解した?」

「「こんなトンデモ見せられて魔法がねえって言う方がもっと現実味がねえよ。」

「素が出でるわよ。そっちの方が楽でいいでしょ?」

「あー? あー、うん。まあ良いか。先生はこれでも良いんだろ?」

「別に良いですよ。私も普通に戻します。」

同時に転移魔法を発動し、進路指導室に戻ります。

「さて、千雨ちゃんは魔法を知りましたが、本来ならここで記憶を消すことになります。」

「!?」

「魔法は秘匿されるべきもの、そつぬことです。聞いたこと無いですか? この学校には魔法少女と魔法オヤジがいて、ピンチになつたら助けてくれる、しかしその時の記憶は消されてしまつ。そんな噂。」

「ああ…たしかにあるが…先生もそつするのか?」

おわるおわる、といつた感じに聞いてきました。

「私はどちらもする気は皆無です。が、千雨ちゃんの体質について説明する必要があります。」

「私の体质？」

「千雨ちゃんは精神に干渉する魔法に対する抵抗力が非常に高いです。この学園には認識阻害という魔法を使つた結界を張つていますが、その効果が効いてないんです。」

「これって結構有利なんですね。洗脳とか聞きこべでこうことです。」

「つまりその認識阻害？つてのが効いてないから私はまわりとズレが出来たのか？」

「やうやく」とです。で、二人で選択肢をあげます。

「選択肢？」

「そう。千雨ちゃんがこれからどうあるのか、です。

1つ目、記憶を消して、このまま何もせずに過ごす。この場合その体質は消してあげれます。

2つ目、記憶は残したまま、このまま過ぐす。ただしこれは他の魔法使いにバレると今までの状態に戻ってしまいます。

3つ目、いつのこと魔法使いになつてしまつ。この場合私が師匠になります。その辺の魔法使いよりは遥かに強くなれますよ？」

とまあこんな感じです。」「

実質1通りですがね。

「うーん…」

「一つ忠告しておきますと、魔法の世界は危険に満ち溢れた世界です。生半可な気持ちでいたらその先には死しかありません。ただ…

ただねえ…

「ただ?」

「はつきり言つてこの学園にいる時点で魔法から離れることは出来ないんです。特に千鶴ちゃんは体質も記憶も消さない限り。」

「つまりなんだ? 私は記憶と体質を消して一般人になるか、記憶を消さずに危険な一般人になるか、もしくは完全に一般人から外れるかのどちらかしかないのか?」

「理解が早いですね。まさにその通りです。」

「それだったら私は3つ目を選ぶ。記憶を消されるのは嫌だし、今までに戻る可能性のあるのも嫌だからな。」

「本当にそれで良いんですね?」

「ああ。」

「分かりました。」

その後、アスナに報告するように言っておきました。お礼を言って立ち去った千両ちゃんの顔はスッキリしていました。良かったですよ、ホントに。

さて、次は裕奈ちゃんですね…

## ～面談一入目～

SHDEゴキ

千鶴ちゃんを送り出して、ノートパソコンで書類作成。しばらくやつてると、時間がきました。

ノンノン

「どうぞ。」

ノック音が聞こえたので返事を返す。ドアを開けて入ってきたのは明石裕奈ちゃん。

椅子を示すとそれに座りました。

「緊張してる?」

「こやはは、せんせーに呼ばれてやつて来たのがこんなとこだからね。」

進路指導室ですしね。

「まあ別に叱るとかやつて言ひっこじや無いから安心して。ちよつとしたおしゃべりだか。」「

パン、と一回拍手を打ち、結界を張る。

「何したの?」

「結界を…ね。今から話すのは魔法の事だから。」

「結界？魔法？せんせーってRPGとか好きなの？」

「へえ…秘匿意識はしつかりしてますね。

「嫌いじゃないけどね。私は魔法関係者だから話しても良こわよ？」

「……ふう。せんせーは私が魔法を知ってるって気づいてたの？」

「まあね…明石教授から聞いてない？」

「んー…やう言えば私の魔法の師匠をしてくれる人がいる、って言つてたね。もしかしてせんせーがそうなの？」

「答えはイエスでありノーでもある。」

「どうぞいって？」

魔法を使つて髪と皿の色を変化、黒いローブを着て、雪藏と入れ替わる。

(あとでよろしく頼みますよ。)

(おひ。)

裕奈の顔は驚きに包まれる。

「Iの姿に見覚えはあるか？」

「お母さんを、助けてくれた、人?」

「ヤリと笑つて答えてやる。

「大正解だ。自己紹介をしておこう。俺は泉野雪のもう一人の人格、零崎雪織だ。」

「もう一人の人格?」

「そうだ。俺と雪は表と裏。二重人格なのさ。」

その後、数分間は裕奈は固まってしまった。

なんとか立ち直つたので、1つ問い合わせる。

「それで、だ。俺はお前の魔法の師匠になることは構わないんだが、お前がどう思つているか、だ。」

「私が?」

「そ。俺無理やり教えるつもりは無い。お前は俺についてくるのか、つてことだ。」

「私は、あなたが教えてくれるのなら教えて欲しい。お母さんを助けてくれたあなたに習えるんだから。」

「分かつた。1つ聞かせる。魔法とはどういったものだ?お前はどう考へている?」

「これで裕奈が魔法についてどう考へていいかが分かる。」

何分か経つて、口を開いた。

「魔法は便利なもの。だけど同時に人を傷つける武器になるもの。人を殺してしまつほど、危険なもの。そう考へてる。」

田の前で母親が死にかけてたからか、まともな答えが返ってきた。

「その考え方なら大丈夫だな。俺も安心して教える。」

「私の魔法の師匠をしてくれるの？」

「ああ。話すことは終わりだな。アスナに報告しておいてくれ。教室にいるだろうから。」

「アスナに? なんで?」

「簡単に言えば弟子が増えた、ってことを知つてもうつためだ。修行の日にちとかもあるからな。」

「わかつたよ。じゃあね、雪織さん。」

「おう。」

「これで一人とも面談は終了、か。結界はもう解いたし……ん?」

「いのんだろ。入れよ。」

「ばれてた力……」

ドアを開けて入ってきたのは超鈴音。イレギュラーの俺に接触、つてか？

「何の用だ？顔合わせの時に機械があったのは気づいてたが。」

「なんのことカナ？」

「けつ……雪と完全に態度の違う俺を見て驚いてないのによく言はず。

」

すでに髪と目の中は戻しているし、ローブもしまってある。見た目は完全に泉野雪と同じだ。

「……单刀直入に言つネ。私の仲間になつて欲しいネ。」

「仲間、ねえ…断る。内容も知らねえのになれるか。」

「『』の世界を救うため、と言つたりどりつ力？」

「世界を救う？バカバカしい。そんなことはどうでもいいね。」

「なッ！？」

「俺は俺のやりたいように生きればそれだけで良い。世界がどうにかなるつが別に構わん。」

おや、黙ったか。次にどうするかを考えてるのか？

「……なら、不干渉はいい力?」

「それくらいなら構わん。が、アスナや弟子がどうするかは知らん。

」

はつきり言つと三人（アスナ、千雨、祐奈）は魔改造するから計画は潰れるんだがな。

「分かつたヨ。」

それだけ言つて、超は立ち去つた。ま、不干渉だけでもありがたいと思ひな。

さて、と…修行の内容とか色々考へないとな…

＼面談一入目／（後書き）

なんかイマイチな出来です。  
短い…

## ～コキの魔法講義～

SHODEコキ

「よひいな、私の別荘へ。」

面談から数日後、とある休日。

私の別荘へやって来たのはアスナ、千雨、裕奈の三人です。千雨ちゃんには魔法を教えるため、裕奈ちゃんとアスナには修行をするために来てもらいました。

別荘つて魔法球のことですよ～あの神様にもらった特製魔法球。今では1時間が5年という化物魔法球になっています。

当然不老の私以外が使いつと色々と不味いことになるので…

「とつあえず」の指輪を着けて下わー。

「いれはっ？」

千雨ちゃんが聞いてきました。

「時間を騙す指輪です。「」では1時間が5年になります。成長してもいつも困るので。」「

もつとも、筋肉やら氣力やら魔力やらはつべんですけどね。

「さて……魔法を教える前に、一つ話しておきましょ。」

アスナ以外の二人はどこか疑問のあるような顔。

「魔法とは簡単に入を殺めることの出来るもの。魔法の世界では人の命を奪わなければ、自分の命がなくなる、そんなことは多々あります。

私は魔法使いからは『英雄』と呼ばれる存在です。ただしそれは戦争で活躍したという意味での英雄です。これがどういうことか分かりますか？」

無言。当然理解出来ているのでしょうか。

「そう、私は多くの人の命を奪いました。つまりはただの大量殺人者。

ただ、その本質を理解せずに憧れる魔法使いは沢山います。そいつらの中には『正義』として、悪を殺すことを正当化するやつすらいます。『立派な魔法使い』を目指す、とかほざきながら。

二人は決してそんな馬鹿にはならないで下さい。」

理解したと言う風に、頷く一人。いい兆候ですね。

「まあ暗い話はこの辺りにして…まず一人にはスタイルを決めてもらいましょうか。」

「「スタイル?」」

「ええ。戦闘においては大きく分けて2つスタイルがあります。魔法剣士と魔法使いです。」

「その2つの違いは?」

「まず魔法剣士。これは戦闘で魔法だけではなく、自分の肉体や近距離武器等も使うタイプです。簡単に言えば魔法を使いながら殴り合いで持ち込むタイプです。」

一方の魔法使い。こちらはひたすら魔法を放つタイプです。極端なことを言えばただの砲台です。」

「せんせーはどうなの?」

「私はどちらかと言えば魔法使いタイプです。まあ近接戦も出来る

よつにはしますが。雪織は魔法剣士ですね。大鎌を得物として近距離戦闘をするタイプです。」

「雪織？」

あれ？ああ。千雨ちゃんは会って無いですね。

「私は二重人格でして、もう一人の人格の事です。零崎雪織、通称『漆黒の死神』。私は『属性を統べる者』と言われますが。」

「『漆黒の死神』って…」

「雪織は大鎌を得物にして黒いローブを着ています。ついでに魔法で髪と目の中の色を黒くしますから。いつの間にかそんな風に呼ばれるようになつてましたね…」

「へえ…」

んー…話がそれました。

「まあ私の見立てでは二人とも魔法使いタイプでしょうね。魔法剣士になりたいのなら別ですが…」

しばらく考えさせた結果、一人とも魔法使いタイプになることになりました。

「では次のステップ……行きたいところですが裕奈ちゃんはもう魔法は使えますか？」

「うん。一応はね。」

「とするとじばりく裕奈ちゃんは後回しになりますね……適性属性は分かる？」「

「えーっと……火、土、光だったかな？」

「全体的に火力が高い属性ですね……とりあえず今使える魔法で一番強いやつを撃つてみて。」

「いいの？」

「どのくらいの威力があつたかでアスナにメニュー決めさせるんで。」

「えー？ 私がー？」

「魔法は無理でも体術は教えるでしょ。ついでに属性が絡まない魔法。」

「まあそうだけど……分かったわ。」

「と言づわけで、撃つてみて。」

「はーい。」

私は障壁を展開、裕奈ちゃんは距離をとり、呪文の詠唱をスタート。

「ウアレオー・オブティマー・エスト”ものみな焼き飛ばす浄化の炎、破壊の王に再生の微よ、我が手に宿りて敵を喰らえ”！」

お？結構強力なやつですね。

「『紅き炎』……」

爆煙が押し寄せる。障壁で防ぎつつ、威力の確認…なかなかのレベルですね。

「明石つて結構凄かつたんだな…」

「母親は現場の第一線で活躍してましたからね。才能が遺伝したんでしょう。」

と、晴れきましたね。

「どうだった？」

「なかなか良いですよ。私は千雨ちゃんに初歩から教えるので、アスナと二人で頑張ってください。」

アスナは歩いてこき、一言一言話してから歩いて行きました。

では、始めますか。

「さて、と。先ずは魔力を感じてみないと分からぬ訳ですが。」

「つて言つても先生。私は魔力なんて感じたことないぜ?」

「だからこいつします。」

そう言つて手を頭にのせ、魔力を流す。

「んつ…」

「分かります?」

「ああ…なんか頭から来るのが分かる。これか?」

「そのなんか、がわかればOKです。はい。」

初心者用の杖を渡す。

「今から私と同じようにやつてみて。プラクテ・ビギ・ナル『火よ灯れ』  
灯れ』」

「えーと…プラクテ・ビギ・ナル『火よ灯れ』」

ぼつ、と杖の先に火が灯りました。これはこれは…

「結構才能あるみたいですね。」

「本当か！嬉しいなコレ…」

ついでにさつき頭に触れたときに境界を弄つて魔力を伸びやすくしておきました。後で裕奈ちゃんにもやつとおもしおつ。

何の境界か、ですって？「魔力の限界」と言つ名の境界ですよ。取つ払つてやりました。強いて言つなら「有限」と「無限」の境界でしょうか？魔力の「伸び」には本来限界がありますからね。

「ま、とうあえず火が灯せたのでコレを。」

取り出したのは水晶玉のようなもの。魔力を流すことで適性属性を計れるよつとしてあります。

「どうするんだ？」

「魔力を流してみて下さー。さつき火を点けたよつにすれば良いです。」

言われて魔力を流す千雨。すぐに内部で変化が起ります。

「これは…？」

ジグザグに走る黄色い線、流れるような薄緑の線、所々に浮かぶ黒い球。刻一刻と変化するそれは幻想的でもあります。

「それは千雨ちゃんの適性属性を示します。黄色は雷、薄緑は風、

黒は闇です。」

「ふうん… それぞれの特長とかあんのか?」

「共通するのはどれも補助的な要素を持つてることです。雷は相手を麻痺させ、風は捕縛魔法が多いです。闇は…まあ色々です。色々。」

闇って出来ること多いんですよ。同時にリスクも大きいものが多いんですけど…『闇の魔法』なんてその最上級ですね。まあアレは近接専用に近いですし、千雨には使らないでしちゃうね。

さて、これからが楽しみですね…

## ～ゴキの魔法講義～（後書き）

裕奈の始動ギー

ヴァレオー・オブティマー・エスト

ラテン語で「元気な」とは最も善いこと」という意味。

適性属性は何となくで決めました。

## ～魔法球での修行後～（前書き）

修行風景は無いんですけど……と言つわけで魔法球内ですでに5年が経つてます。

## （魔法球での修行後）

SIDEアスナ

千雨ちゃんとゆーなと一緒に魔法球に入ってきて大体5年がたつたわ。で、今は一人の模擬戦を見るんだけど…

「ウアレオー・オブティマー・エスト！」契約により、我に従え奈落の王、地割り来れ、千丈舐め尽くす灼熱の奔流、滾れ、进れ、赫灼たる亡びの地神”！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！」契約に従い、我に従え高殿の王、来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重と重なりて、走れよ稻妻”！」

見てるん…だけど…

「『引き裂く大地』…！」

「『千の雷』…！」

それぞれ地属性と雷属性の広域殲滅魔法。それぞれがぶつかり合い、恐ろしいまでの爆風が発生。

正直5年も魔法漬けにしてたからってここまでのレベルになるのかしら？いや、たしかにユキの教え方がいいのは分かるけど…

問題なのは魔力量ね。一人とも始めごろはせいぜい一般人に毛が生えたくらいだったのに、今では木乃香の倍近くあるみたいね。確實

にユキが何かしたわね…

「ウアレオー・オプティマー・ヒストー』おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を表せ。」…

「ちよつ・マジか！」

「こっくよー！『冥府の石柱』！…」

巨大な質量を持つ石柱が6本発生し、千鶴に向かって飛んでいく。追撃と言わんばかりに無詠唱で『紅き炎』を多重展開。

爆煙と石柱のコンボ…って普通の相手にやつたら確実に逝けるわよ？

千鶴ちゃんは虚空瞬動と浮遊術を駆使しつゝ、障壁を展開して爆煙の中を突っ切る。

「障壁突破『雷の斧』！」

「えー…うひいやああああー！？」

おおつ…これは酷い。油断はしてなかつたけど遅延呪文でそれは…ねえ。直撃だし…

なんで無詠唱じゃないか分かつたのか、って？爆煙を抜けたところで口が『開放』って動いたのが見えたわ。大方突っ切る途中にでも唱えたんだしょ。

「今回は私の勝ちだな。」

「うーん…

ゆーなは田を回して氣絶してるわね。あ、普通の人間がくらつたら多分死んでるわよ？

模擬戦をするにあたって、ユキが恐ろしく巨大な結界を張ったわ。魔法や氣による攻撃で死に至らないようになつてね。

そうそう。千雨ちゃんの始動キー、「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ」だけどうテン語で「死は確實、時は不確實」って意味の格言ね。

実戦では死に至る可能性はあるし、決まつたと思った魔法で仕留めきれないこともあるだらうから、つて言つてたわね。

「お疲れさま。なかなかでしたよ。」

「つてもやっぱ『冥府の石柱』は苦手だわ。あんな巨大な質量攻撃、あと一本でも多かつたら避けきれなかつたかもしねえ。」

「まあ…仕方ないです。火力が弱めの千雨ちゃんだと。」

あれつて一本壊すのにも相当な火力がいるのよね。私も壊そうとするけど、それだと二つになつたやつが別々に降つてくるだけだからね。『無極而太極斬』使つたらかき消せるけど…アレは例外だしね。

あ、感卦法で神鳴流は使えたわよ。ただ威力が高すぎるから半ば封印しておくけど…ただの雷鳴剣が真・雷光剣クラスになつたもの。斬岩剣とかは純粹に威力が上がつただけだけど、それでも…ね。

「ただ、ちょっと二人とも強くしそぎたかもしません。正直その辺の魔法使いは『引き裂く大地』とか『千の雷』とか使えませんし……」

「ユキがノリノリだったからでしょ。大は小を兼ねるって言ひし、強すぎて困る」とは無いんじゃない?」

「まあ… そうですね。」

何か悩んでる? 魔法のレベルはもう最強クラス、気は一人ともあまり使えないけど魔力で瞬動と虚空瞬動は出来るし、体術もそれなりに使えるレベルになつたし…

あ、いくら魔法使いタイプって言つても前衛無しである程度戦うには体術は必須だからね?

まあだとすると… 実践訓練が足りてない? 私とユキ、ユキオリ、千雨ちゃんとユーなの5人だから充分な気がするけど…

「そうだ。図書館島に行きましょう。」

「 「 「 図書館島? 」「 」 」

たしかに地下は危険って聞いたことがあるけど… ってユーなもつ起きたのね。早いわね。

「 ヘ。思い立つたが吉田、今から行きましょう! 」

## SHIDEゴキ

魔法球から出る。私の家、久々の空氣。

「ここに入ったのが午後1時だったから本当に一時間しかたってねえのか…」

現在時刻は午後2時。あの指輪、「時間を騙す」の言葉通り、ここにいた記憶は全部残っています。

つまり料理の腕とか宿題とか、そういうことは忘れてないということです。昨日…つまり5年以上前のはずの事もきちんと昨日の事として感じるようになっています。

「なんか変な感じ~ひたすら魔法の練習をしてた記憶はあるのに時間がたつてないとか~」

「まあこの感覚は慣れるしか無いわよ。」

アスナの言つ通り、慣れてもうしか無いですね。まあ次から使うのはせいぜい24倍魔法球でしょう。1倍魔法球なんてのもありますよ?純粹な空間確保ですけど。

「ま、とりあえず行きましょう。」

経験不足を解消するには調度良いでしょうから、ね。

お、見えてきましたね。

「

「まあそつなんですナビ。」ナビを歩いて行つたまづが良いんですよ。

よ?

「だつたらコキはすべに行かるんじやないの? 一度は行つたんでし

「ええ、もちろんです。」

「でも」のへりこの隈で大丈夫なのかなあ?.

うだうだと喋りながら、トヘトヘと潜ります。

「でもあ、コキは」の奥に何があるのか知つてゐるの?.

「なんつーか、レリハシャンはまだよな。」

「魔法書ねりいの敵を排除するため、りしこですかへ.

飛んできた矢を避けた千鶴ちやん。

「おひとい。」

「先生…私の見間違いか?なんかドラゴンっぽい生き物が見えるんだが。」

「私もみえる」やー……」

「大丈夫よ一人とも。私にも見えるから。」

「『ドラゴン』…というよりワイバーンですね。まあ安心してください。私がいる限り襲わないで。」

取り出したのは通行許可証。あっさりと身を潜めるワイバーン。

「まあ『レガいるのと顔を覚えてもらいつつ』の意味で来たわけですよ。」

と黙つわけで歩いてワイバーンの下のところまで行き、扉を開ける。

さて…アッシュは何て言つてしまふかね。

～魔法球での修行後～（後書き）

千雨の始動キ！

モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ

「死は確実、時は不確実」という意味のラテン語の格言。

SHADEゴキ

「お邪魔しますよー」

扉を開けつつそんなことを言います。

広がるのは地下とは思えないほど広い空間、少し向こうにはテーブルと椅子、一人腰かけています。

後ろの三人は言葉を失っています。アスナは予想外の人物がいることに、千雨ちゃんと裕奈ちゃんはこの空間そのものでしよう。

「こきなり来ないで下さこよ…雪。それで、後ろのお嬢さん達は？」

「まつたくもつて回感じじゃな。心臓に悪いぞい…」

「あ、ああ。長谷川千雨だ。」

「明石裕奈…です。」

「ワシはフイリウス・ゼクトじや。」

「ユーネに。私、クウネ「アルビレオ・イマ」ル…」

強引に切られて言葉につまるアル。

「たしかにその通りですが、今はクウネル・サンダースと名乗つて

います。JURIの図書館の図書をしてこむ者です。ビウルムヒベ…

「えーっと…クウネルさんで良いのか?..」

「はい。ああ…アスナちゃんは今まで通り『アル』で結構ですので。

」

「分かったわ。でもなんでこんなところにアルと、クトがいるのよ?..

「10年ほど前に色々ありました…療養中の身です。」

「ワシは純粋にやることが無いでの。落ち着いて過ごすにはこれが一番じや。」

「ん~…あー思い出した! 麻帆良祭の時に現れる謎の白いフードの青年と謎の老人調の少年!..」

「アルに、ゼクト…そんな風になつているとほ知りませんでしたよ?..

「分身体を送りているんですよ…私が外に出れるのはその時へりこなものなの…」

「ワシはあまり外に出る理由が無いから…」

身分的にも動きにくいでしょうからね。

「まあ…と、それは良いんです。一人に用があつて来たんですよ。」

「何ですか?..」

「ええ。はつあつ言つて、一人に稽古を付けてもらいたいのです。特にこの一人に。」

「どちらの一人はどうのくらいですか？」

「どのくらいのレベルか、といふことでしょう。

「得意属性を伸ばして、それぞれの広域殲滅魔法は使えるまで伸ばしました。一人とも魔法使いタイプですのである程度の体術も身に付けてます。」

「ふむ……実践経験が足りんといふことじやな？」

「そういうことです。場所は1倍魔法球で確保できるので……どうですか？」

「2つほど取り出します。どこからですって？ もちろんスキマからですよ。

「良いですよ。ゼクトはどうですか？」

「ワシも構わんよ。久しぶりの実践じゃ。断る理由も無いじやんつ。

」

「ありがとうございます。では…」

千鶴ちやんとアル、ゼクトと裕奈をそれぞれの魔法球に送ります。

「戦えなくなるまで一人とも、頑張ってください。」

念話を利用した魔法で指示を出しておきました。

「私たちはどうするの？」

「まあゆっくり待ちましょ。紅茶でもいれできますよ。」

じばりく…およそ一時間経ったところで千鶴ちゃんとアルが魔法球から出てきました。

「どうでしたか？」

「あー…もう全然喰らわせれねえ…ふらふら避けられて重力魔法で反撃されるし…」

「彼女は魔法の才能が素晴らしいですね。ただいかんせん実践経験が少ないからか戦法がワンパターンになってしまっています。」

「ふうむ… やはつですか…」

「ただセンスは良いですし...どうでしょう? 重力魔法を覚えてみますか?」

「おや? その素質があつたんですね?」

「ええ… どうですか? あなたはどうしたいですか?」

「教えてくれるんなら教えてくれ。手札が多いに越した」とはねえ。

「

「分かりました… とはこえ今は疲れてる感じからまた後で。」

まさかアルが教えるとここ出すとは…

千鶴ちゃんとアルが出てきてから一~5分ほど経つて、裕奈ちゃんとゼクトが魔法球から出てきました。

「」やせな…ダメダメ。」

「ゼクトの意見は?」

「つーむ… なかなか良いんじゃが、やはり実践経験が足りてないの。魔法の連繋を良くすれば化けるじゃつた。後は…」

「まだあるんですか?」

「つむ。どうやらこやは火、土、光が適性が高いのであって、他の属性の適性が悪いようでは無いみたいじゃ。他の属性魔法ある程度は使えるようになるのが良いじゃろつて。」

「え…まんまとゼクトみたいになれると。結構良さげですね。

「ところで雪。あなたは仮契約はしてるんですか?」

「ええ。アスナとはしますよ。」

「「仮契約?」」

「コレね。」

そう言つてアスナは仮契約カードを取り出します。

「あれ?一人には説明してなかつたですか?」

うんうん、と頷く一人。

「仮契約とはその名前通り『仮』の『契約』です。魔法使いの従者を作るための儀式で、主からの魔力供給、念話、従者召喚などが出来ます。」

「それらもありますが、重要なのはアーティファクトですね。」

アルが補足を入れる。

「「アーティファクト?」」

「アーティファクトとは仮契約で手に入る魔法具じゃ。主の魔力量によつてはそもそも手に入らない場合があるがの…」

「まあ雪の魔力量は異常とも言えるレベルですし、間違いなくアーティファクトは出るでしょう。それも強力なのが。アスナちゃんのそれは？」

「『ハマノツルギ』よ。効魔法や氣による攻撃の無効化、及び無効化や反射の出来る結界を張る機能、後は召喚された物の一撃で送り還す効果もあるわ。」

私とアスナ以外の顔がひきつりますね。まあ仕方ないんですけど…

「仮契約って何人でも出来るのか？」

「ええ…『仮』ですし。」

本契約も器しだいで何人かと出来るんですがね。

「なら先生…私と仮契約してくれないか？」

「あ、私も！」

「え？別に良いですけど…」

少し離れて、足下に魔方陣を発現させる。

「一人ずつやりますから…まず千鶴ちゃんから。この上に立つて足元の陣に魔力を流して。」

「分かつた。」

足元の陣が輝きを増す。

「我、泉野雪を主とし、長谷川千雨、かの者を我の従者と為さん

」

するとカードが手元に降りてきます。千雨ちゃんの手元に1m位の杖・クリスタルロッドが握られています。名前は『透明の魔法杖』ですか。

「はい。確認は後でするから待つて下さいね。」

千雨ちゃんと同じように、裕奈ちゃんも。こちらは両手に形の違う拳銃・名前は『七色の銃』…原作と同じですが魔改造されてる可能性大ですね。

「使うときは『来れ』です。」

「『『『来れ』』』

当然の『』と手元に現れます。さて、と。効果はどんなものでしょ  
うかね…

調査結果です。

千雨ちゃんの『透明の魔法杖』は

一つの魔法をノータイムで発動できるようです。これは杖を持って  
いる限り、なんの前触れも無しに魔法を発動出来るところのことです。  
恐ろしいことに無詠唱以上に早く発動します。

もつとも、一度使うと次の使用には10秒ほど時間が必要のよう  
です。まあ『千の雷』一重展開とか出来るので十分な気がしますが：

こんな感じです。

裕奈ちゃんの『七色の銃』は

特殊な効果を持つた魔法弾（魔力封印）などを打てるようです。ま  
あこちらはそれなり、ですね。

問題なのは『雷の暴風』レベルの魔法を銃を介して連発出来ること  
です。魔力は消費しますが。  
さらにその威力を圧縮した魔法弾も打てます。当然のようにアシス  
トがついていて、狙った位置に確実に着弾させる事が出来ます。

実際『紅き炎』の威力を圧縮した魔法弾を5秒で30発近く一ヶ所  
に打ち込まれて障壁を壊されました。『千の雷』クラスも余裕で防  
げる障壁が、です。

こんな感じです。

いやはや、一人とも強化しそうレベルになってしまいました。これ  
からどうなりますかね…？

## ～図書館島の深部にて～（後書き）

アーティファクト

千雨：『透明の魔法杖』

裕奈：『七色の鏡』

それぞれチートクラスのアーティファクトです。説明は本文で。

～主人公設定～（前書き）

ユキの設定です。

## ～主人公設定～

本名・ユキ・スプリングフィールド

偽名・泉野雪／零崎雪織

身長・167cm

体重・禁則事項

B88 W58 H88

一つ名

泉野雪・『属性を統べる者』

零崎雪織・『漆黒の死神』

容姿

泉野雪・赤髪、目は茶色。顔はナギを女っぽくした感じ。腰まで伸びたストレートヘアで、アスナとは姉妹に間違われるほど若い見た目。

零崎雪織・黒髪、目は黒色。顔は雪と変わらないが、常に黒いフードを被っているためあまり見えない。一応髪は束ねているため、フードを外すとポニーテール。

性格

泉野雪・おだやかで、ですます口調を好んで使う。ただし戦闘では冷静で非常に冷酷な性格となり、口数は極端に減る。

零崎雪織：残虐思考。ただし明るく、軽い口調で話す。戦闘では敵を挑発することも多い。

### 能力

『境界操る程度の能力』：境界に関する事象操ることが出来る。ただし死者の蘇生など、出来ないことも存在する。

『不老』：そのまま。20歳から肉体年齢は変化せず、老衰する事無し。

二重人格だがお互いを認識しており、任意のタイミングで入れ替わることが出来る。

主に表に出ている人格は雪の方。雪織になつたときは魔法で髪と目の色を変化させている。

戦闘スタイルは雪が魔法使いタイプ、雪織が魔法剣士タイプ。ただしどちらも『一応』であり、一人とも無音拳や神鳴流を使える。得物を使う場合雪は刀を、雪織は主に鎌で時々刀を使う。

## （設定集）

ここまでの一までの原作との相違点

泉野明日菜

- ・姓が神楽坂ではなく泉野、泉野雪の義理の娘
- ・記憶封印を受けていない
- ・泉野雪と仮契約済み、アーティファクトは『ハマノツルギ』
- ・属性の無い魔法は使用可能（ただの転移、障壁、念話など。）
- ・神鳴流、各種式の太刀まで使用可能

長谷川千雨

- ・魔法の事を知り、ストレスが緩和されている
- ・泉野雪と仮契約済み、アーティファクトは『透明の魔法杖』
- ・使用魔法は雷、風、闇の属性魔法と重力魔法

明石裕奈

- ・夕子生存により、ファザコン度合いが軽い
- ・泉野雪と仮契約済み、アーティファクトは『七色の銃』
- ・使用魔法は主に火、土、光の属性魔法、他の属性魔法も中級クラスまでなら使用可能

・ガトウ、明石夕子は生存

- ・ゼクトは造物主に乗っ取られていない、現在は図書館島の深部でアルビレオ・イマと同居

- ・エヴァの登校地獄は解呪済み

## アーティファクトについて

### 『ハマノツルギ』

- ・魔法反射、魔法無効化の結界機能がある

### 『透明の魔法杖』

- ・杖を持っているときに1つの魔法をノータイムで発動できる。呼び動作は一切なく、無詠唱以上に早く発動する。
- ・上の効果は間髪いれずに連続使用することは出来ず、次に使うまで十秒かかる。

### 『七色の銃』

- ・アシストが付いており、狙った位置に着弾させる事が出来る
- ・特殊効果（魔力封印など）をもつ弾を打てる。
- ・銃を介して『雷の暴風』レベルの魔法を連発することが出来、その魔法の威力を圧縮した弾を打つことも出来る。

### オリジナル魔法

#### 『無限の光槍』

詠唱：“契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝”『無限の光槍』

### 光属性の広域殲滅魔法。

上空から無数の光の槍が降り注ぐ魔法。

性質上、他の属性の広域殲滅魔法より確実性が落ちるが、威力は他をはるかに凌ぐ。

### 『裁きの竜巻』

詠唱：“契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”『裁きの竜巻』

## 風属性の広域殲滅魔法

横向きの巨大な竜巻を打ち出す魔法。

弱い魔法は飲み込んで威力を上げる特徴を持ち、味方による強化も可能。

竜巻の内部は真空刃が飛び交っており、当たったものはズタズタにされて塵になる。

真空刃はダイヤモンドですら真つ一つにするほど。

## 『神々の黄昏』

呪文はとくに無し。

『燃える天空』『いおるせかい』『千の雷』の3つの魔法を固定、魔力で連結して打ち出し、『解放』して魔法を発動させる。

とてもじゃないがユキ以外は一人では出来ない。

3つの相乗効果で恐ろしく威力が上がっている。

「原作開始の足音」（前書き）

前話から再び時間が飛んでます。  
それから短めです。

## （原作開始の足音）

S H D E ユキ

「ゆくぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」来れ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け常夜の氷雪”！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！”来れ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐”！」

え…と…今はエヴァの魔法球の中です。

「『闇の吹雪』！」

「『雷の暴風』！」

一つの魔法がぶつかり、衝撃が走ります。

「のわつ…」

威力で言えばどちらも同じくらい、ですが衝撃によって千雨の体勢は崩れました。

その隙を見逃すはずもなく、エヴァは一気に詰め寄ります。

「つ…『最強防護』！」

「ちつ…」

なんとか体勢を立て直し、エヴァの『断罪の剣』を防ぎました。エ

ヴァは反撃に備え、急いで距離を取ります。

「『白き雷』！」

「甘いぞ…。』おおむだ…なつ…？』

放たれた雷を避けるために飛び上がったはずが、いきなり落下する。結果、命中。

「ぐう…」

「はーい、そこまでー」

あくまで模擬戦です。アーティファクト無しの一撃終アルールでしたけどね。

「大分板についてきましたね。」

「ケケケ。御主人モツイニ鈍ツタカ？」

「いや、あれは完全に予想外だった。なんせ重力球も使ってなかつたからな。」

「やつと上手くいったからな…やつぱ球無しで重力魔法使のは難しいな。」

重力魔法は普通、球の形にします。それなしだと大幅に難易度が上がるんですよ。

「ソレーシテモ、他ノヤツガ居ナイト調子狂ウゼ。」

セツ、いまここにいるのは私とエヴァ、千鶴ちゃん、チャチャゼロの3人+1体なんです。

アスナと裕奈ちゃんはそれぞれお出かけ、茶々丸さんはメンテナンスです。

ちなみに今は2003年の1月です。あと一ヶ月ほどネギがやつてきます。

「どうで先生、今日なんか用事があるとか言つてなかつたか？」

「うん？たしか1時頃に学園長室に来つて話でしたね。とすると…そろそろですか？」

「ルームに入ったのが11時半位、1日たつたからそのくらいだろ？」

「

「やうですか。じゃあ私は出る」とこしますが…一人は？」

「長谷川次第だな。コイツとはやつ合つていて画面にものがあるが…無理は言わん。」

「だったら私も出る」とさす。今日はこの辺にしておきたいからな。」

「ふむ。分かりました。」

転移魔法を発動し、三人でそこに出ます。

学園長室前。ノックをしてから入る。

「ふむ。よく来ててくれたの。」

「なんですか？早く用件をお願いします。」

「やつ焦らんでも……近々来る新任の先生の事での。」

「それがどうかしたんですか？いや、そもそもこんな時期に来る」と事態がおかしいのですが。」

「こやこや、おかしくないんじやよ。」

「いつ来てもおかしいですナビ。」

「ん…まあ良一です。私に関係あるんでしょう？誰が来るのですか？」

「なんと、ナギの息子、ネギ・スプリングフィールド君じゃよ。」

「へえ…まだまだ子供でしょ？。労働基準法といつ法律を知らないんですか？」

「どうせ『認識阻害があるから大丈夫』とか言つんでしょうけど。

「それは大丈夫じゃ。」には認識阻害の結果もあるしのつ。それに彼はメルティニア魔法学校を首席で卒業したる。頭脳面も問題ないじやうひつ。」

「へえ…分かりました。で、何をやせんつもり何ですか？」

「お主のクラス…2・Aの担任と英語教師をしてもうおつと思つたるよ。」

「英語教師は良いとして、担任は反対させもらいます。」

「何故じゃ？」

「分かりきつた事でしょ？」私は自分で言つのも何ですが、一般教師と一般生徒からはかなりの支持を受けています。いきなりやつて来た子供なんかがとつて変わつたらその辺りの人から総スカンくらいますよ？副担補佐から始める方がよろしいかと。」

これは事実。魔法先生も良識ある人は支持してくれています…明石教授とか瀬流彦先生とか。

「む…分かつたぞい。」

「それから、そのナギの息子のサポートを私にやせんつもりなら諦めて下さい。」

「ふお！？」

「メルディアナ魔法学校を首席で卒業しているんでしょう？それなら私は『一人の教師』としてはサポートしますが、『魔法使い』としてのサポートはしません。」

「そこを何とかしてくれんかのう…」

「いいえ。魔法学校を卒業している限り私は彼を『魔法使い』としては一人の大人として見させてもらいます。もつとも、彼が懇切丁寧に頼みに来たのであれば別かも知れませんが。」

当然の事でしょうに。

「むう…仕方あるまい。」

「ああ、その時には読心魔法を使って本人による意思かどうか確認させてもらいますので。もし学園長や自称『正義の魔法使い』による指示であった場合はそれ以降『魔法使い』としては完全に無視させてもらいますので。ご注意を。」

本人が本人による意思で、きちんと礼儀正しく来たならばそれには応えます。それが礼儀という物でしょう。

「ぐぐ…分かつたぞい。用件は以上じゃ。」

「では、失礼します。」

さて、もう少しで原作開始ですね…色々と忘れて来てますけど、大丈夫でしょう。

## 「原作開始の足音」（後書き）

補足というかなんというか…

千雨、裕奈、アスナはエヴァが吸血鬼であること、コキが不老であることを認識しています。

千雨と裕奈の実力は拮抗しています。

## ～やつて来たネギ、原作開始～

SIDEアスナ

まったく、頭が痛いわ。

横でタカミチと話しながら、赤毛の子供、ネギ・スプリングフィールドを見つつ思ひ。

いきなり新任の教師が来るから迎えをしてくれ、って言われて、いやそもそもこんな時期に来る時点でおかしいんだけど。

ユキに聞いたらナギの息子だって言われて、明らかに子供なのがやつて來た訳で。

やつて來たと思つたら明らかに杖を背負つて。

おまけにくしゃみで武装解除を暴発させて…私だったから無事にすんだけど。

しかもこれで魔法学校の首席?絶対にウソでしょう?

「ハア…」

思わずため息が出てしまった。

「どないしたん?」

「ちよつと寝不足っぽいわ。眠りが浅かったのかも。」

木乃香が聞いてきたけど適当にじこまかす。

ウダウダ悩んでたらいつの間にかタカミチは居なくて、学園長室前。  
ノックをして、中に入る。ってか私と木乃香はここにいる意味無い  
わよね？

学園長に紙を渡し、何かを話すネギ。

ちらりと見回すと腕を組んで幽霊のように存在感の薄くなつたユキ。  
思わずぎょっとしちゃつたわ。

「なるほど…修行のために学校の先生を…そりやまた大変な課題を  
もらつたのう…」

いや、修行の内容 자체がおかしいでしょ。そもそも木乃香がいるの  
にそんなこと言つて言い訳？

まあ大方メガロのお膝元である麻帆良が監視にも『正義の魔法使い』  
にするにも好都合だからなんだろうけど。

修行つてたしか『立派な魔法使い』になるために必要なんだっけ？

『立派な魔法使い』・『正義の魔法使い』とか考へてる限りネギに  
明るい未来は無いわね。いや、どんな魔法使いにも言えることかし  
ら？

グダグダと考えていたら学園長の頭から血が流れていた。大方ネギ  
を木乃香の婿に…とかいつたんでしょ。

「あ、セツセツムツムツヒトツ。アスナちゃん、木乃香。ネギ君を君等の部屋に泊めてくれんかの？」

は？ なに言つてゐのかしら？

「学園監査」

「ふむー…」

今まで口を開じていたユキがいきなり話した。木乃香とネギが驚くのはわかるけど…

「子供と言えど、一人の男性です。教師として行動する以上、生徒でもある女子と同じ部屋にするという発言は教育者としての人格を疑いますよ？」

おお、流石ユキね。異性であること、教師と生徒の関係、そこから学園長の『人格を疑う』発言。

いや、やつ過ぎなのか木乃香もネギもぽかーんとしてゐるナゾ。

「しかし、寮の空きが…」

「無いと言わせるとでも考えていますか？ きちんと確認させて頂きました。あつましたが？」

逃げ道を封鎖、と。

「じゃが、ネギ君はまだ子供じゃし…」

「なら高畠先生と同室はどうでしょうね。彼はスプリングフィールド実習生と知り合いで聞いております。」

「む… タカミチ君は出張で忙しいのは知つておるじゃね?」

「ユキがミス? いや、これはわざとね。」

「それならガトウ先生と同室はが良いでしょ? ね。彼は出張等はしていませんし、スプリングフィールド実習生も知り合いで聞いております。」

「ガトウさんも? 」

ネギが大声を上げる。ガトウさんはタカミチの師匠だったわよね。とするとまだ出張してた時にタカミチと一緒にあつたのかしぃ。

「ええ、ガトウ先生もいますよ。ひと、私の紹介をしてませんでしたね。私は泉野雪、あなたが英語の担当をする予定の2・Aの担任ですよ。」

「え、と、ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願ひします。」

「いじりやうや。」

すぐに学園長の方に向き直る。

「反論があるのならお聞きしますが?」

「む…無いわい。じゃあガトウ君と同室じゃの。一人は教室に戻つて良いぞ。」

「わかつたえ。」

「わかりました。失礼しました。」

木乃香と二人、教室に帰る。

SIDE out

SIDE out

「はい。」

学園長を木つ端微塵にして、今は廊下を歩いてます。私はネギに名簿を渡します。

「これは…クラス名簿ですか?」

「ええ。ネギ先生は副担任もすることになつてますからね。出来るだけ早めに皆さんのお名前を覚えて下さい。」

「はい!」

実はあの後、少し話してこの3月までに教師としての力量が認められるのならネギが担任になることになりました。これはまだネギは知らないんですが。

代わりに私の自由度を上げさせました。まあ色々ですよ。

「あの…」

「どうかしました?」

「泉野先生は明日菜さんと同じ苗字ですが、なにか関係あるんですか?」

「アスナは義理の娘ですよ。」

「…」めんなさい!」

すぐに謝つてきました。

「謝らなくていいですよ。気にしてないですし、知った人からは確実に聞かれる…ん、到着ですね。」

教師に到着、ネギは僕が行きます、といつてドアを開ける。

まず黒板消しが降つてくる。それは障壁によつて、わずかに浮く。がすぐに気がつきそれを頭に被る。

咳き込みながら歩き、紐を踏むのではなく引っ掛かる。前のめりになつたところにバケツ襲来、もろに頭に直撃。

そのまま『口』と罵を受け続け、教卓に激突。よつやくストップ。

『ええええええ!?. 子どもおおおおー!?.』

クラスの大半が驚いて駆け寄る。

あれこれ聞かれて困り果てた表情になるネギ。

「はーはーーその辺にして席に戻るー質問は朝倉さんがする」とー

そこからはネギが自己紹介、あとは原作通りに事が運びました。

放課後、ネギ先生歓迎会が行われることに。

タカミチとガトウがやつて来て、後は呼びにいったアスナとネギ本人を待つだけです。

しばらく待つとドアが開き、ネギが入ってきました。

「ようこそーネギ先生！」

クラッカーが鳴り、すぐに歓迎会がスタート。

と、アスナがこっちにやつてきました。

「もう嫌になるわ…」

「どうしたの？」

「本屋ちゃん助けるために人目もはばからず魔法使うし、朝迎えにいったときはくしゃみで武装解除を爆発させるし、そもそもあんなデカイ杖を背負ってるし…」

「諦めて下さい。」

「やうね……いかつかにしてたら持たないわよね……」

「ああいつのほうも徹底無視が一番です。大方ナギの息子だからつてちやほやわれていたんでしょ、つから。」

「だよね……ハア。」

アスナでこれだから、裕奈ちゃんは大丈夫でしょう。ただ千鶴ちゃんはもっと酷くなるかも、ですね……気を付けますか。

そのあとはのじかさんが図書券を渡したり、雪広さんが銅像を渡したり、なんやかんやの大騒ぎ。

そのままお開きになりました。これからじしくなりそうです。

## ～期末テストとの裏で～

SHADEコキ

ネギがやって来てからしばらへ経り、期末テストがもうすぐ、とうとうとなる。

いやは、千兩ちゃんなんかはとてもないストレスがかかってるようですね。そこは親身になつて聞いてあげることでなんとかします。

あ、生徒にはネギが正式な教師になつたら担任になるから、といって時々ホームルームをやらせてます。

その時は私は職員室で書類の整理とかしてるわけですが。

そうして過ごしていて、ある日の朝、いつものように朝礼を…と思つたら6人ほどいません。

メンバーはバカレンジャー（アスナのかわりに刹那）+木乃香、つまり図書館島のやつですね…

今日学園長に呼ばれたのはこれが用件でしたし。

きちんと抗議…じゃなくて忠告はしておきましたよ?まあ故意に魔法に引き付けるのは構いませんが、そうなつて魔法を知った場合、そいつらは私が守ることはしませんよ、死んだらアンタの責任になるからそれについてお願いします、とね。

「えー… 6人ほどいませんが、図書館島でスプリングフィールド実習生と勉強会をしているそうです。図書館島の司書から連絡が来てますので安心して下さい。」

スッ、と手が上がりました。

「なんですか？ 雪広さん。」

「金曜日にネギ先生が最下位脱出をしないと大変なことになる、とおっしゃっていましたが内容を」存じでしょつか？」

「ええ。」

ただその内容は伝えるなって学園長に言わされましたからね。

本来なら知ったことじや無いんですけど、ソレは別な理由を立てておきますか。

「簡単に言つと私のクビが飛びます。いつまでも最下位だったことに学園長が腹を立てますので…私を教師として麻帆良に残したいのであれば皆さんも勉強に励んで下さいね。」

ま、いつも言っておけば大抵は勉強するでしょう。

その後は授業。皆普段より励んでいるのがわかるくらいの変わりつぱりでしたよ。

放課後、場所はエヴァの家。

私、エヴァ、アスナ、千雨、裕奈と茶々丸、チャチャゼロがいます。

「で、実際のところはどうなんだ?」

氣だるげな顔で聞いてくるエヴァ。

「もちろんアレはウソ、ネギが正式に教師になるかどうかを見極めるためのものです。」

「ふーん…学園長のことだからどうせ最下位でも色々と手回しがて正式な教員にしそうだけど。」

「たしかにな…もづ嫌になるぜ。どうにかなんねえのか先生?」

「ならないですよ、残念ながら。」

「やつぱ『英雄の息子』って肩書きのせいで、あんな無茶苦茶やって文句いわれてないもん。」

「そうですね。将来有望と回りからもてはやされてきて、自分の非を責める人物が周りにいなかつたらしいです。」

「うわ…それってマズくねえか?」

「不味いですよ。たんなる魔法使いがやつたら犯罪になることを平

「氣でやるよりは、とまともな環境にいればああならなかつたんだうづけからなおさらたちが悪いです。」

「もつもつとまともな環境にいればああならなかつたんだうづけどね。」

「自分が井の中の蛙である」とこぎついてない、自信過剰な少年、かあ……ある意味かわこううだよね。」

「ま、このままくと残念なことになるだけ、ってことか。周りがなんかしない限り。」

「なんとか、ねえ……『正義の魔法使い』がするわけないし……学園長とかなりあるかもね。」

「ん……？ ついでにネギジジイにネギと戦つてくれって言われたな。」

「ネギ先生と戦つ？ エヴァちゃんが？」

「ああ。すっかり忘れていたが。」

「でも戦つ意味なんてあんのか？」

「アイシがどのへりい出来るのか興味はあるからな。ただそこに持つてく方法がイマイチ思い付かんかったから忘れていた。」

「いじつのはじですか？」

そうこうして原作の「桜通りの吸血鬼」が起こるよつて調節する。

手順としては

満月の夜、適当にボロローブなどで顔をかくして現れる。

時期を見て自分のクラスの生徒を襲い、それをネギに気付かせる。

とまあ大雑把に言えばこんなもの。期末テストできちんと結果が出ればネギは担任となり、あの責任感の高い性格なら成功するだろう、と伝えました。

アスナ、千雨、裕奈も実力は気になる、ところがどうでネギと戦うときは知らせる」とになりました。

一週間たって、期末テスト。結果2・Aは一位になり、ネギは正式な教員に、新学期から担任になることが決まりました。

その後記念パーティーが開かれましたが、千雨ちゃんも普通に出席したためネットアイドル発覚イベントは無じదす。

ネットアイドル「ちづ」自体はちゃんとこまですよ？

さて、春休みは特に何も無いでしょうし、次は桜通りの吸血鬼、ですかね。

～期末テストとの裏で～（後書き）

短めです。

戦闘描写がないと長く書くのは難しいですね…

## （特訓と暗躍）

SIDE グキ

「ウアレオー・オブティマー・エスト！」 契約に従い、我に従え炎の霸王、来れ、净化の炎、燃え盛る大剣、ほどばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄、罪ありし者を、死の塵に！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！」 契約に従い、我に従え高殿の王、来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆、百重千重と重なりて、走れよ稻妻！」

「咸卦法…神鳴流決戦奥義！」

よつ、零崎雪織だ。

いきなり物騒な詠唱とかが色々聞こえるが…

「燃える天空」…

「千の雷」…

「真・雷光剣」…

「最強防護」

一応言うが手合わせだ。これはな。

熱線からの爆炎、大量に走る稻妻、恐ろしく巨大な咸卦による雷が同時に襲いかかる。俺は防御呪文を利用してそれらを防ぐ。

まったく、爆炎のせいで視界が最悪だな。

直後、アスナが『ハマノツルギ』を思いつき振りてきた。正直アレには障壁なんて無意味だ。

よつて俺は右手にもつ刀で防ぐ。

「ちえつ……当たってくれないか…」

「わりやわりだつ！」

「わいやー！」

力任せに振つて、アスナを地面に叩きつける。

同時にやつて来た大量の魔弾、裕奈だろうがまだまだ甘い。

左手にもつ鎌をふるい、それらを叩き落とす。

「あひや～…」じゅ参ったね。」

「ま、危ない弾には当たりたく無いからな。」

そう言いながら一気に上昇、直後後ろから雷が飛んできた。上には重力場が展開されているが、強引に突つ切る。

「ちつ…」

舌打ちの音、千雨だろうが構つてる暇はない。いつの間にか復帰したアスナが斬空閃を乱れうちしてやがる。

刀と鎌で防ぎながら、呪文詠唱スタート。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ！」おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ”！」

無詠唱でも打てるが、これは言わば枷。手加減の印だ。

「ウアレオー・オブティマー・エスト！」来れ虚無の炎、振り払え”！」

「モルス・ケルタ・ホーラ・インケルタ！」来れ虚構の風、切り裂け”！」

二人は詠唱、アスナは『ハマノツルギ』を構える。

「『冥府の石柱』」

「『炎の剣』！」

「『風の刃』！」

「無極而太極斬！」

俺は6本の石柱を呼び出し、それぞれの方向へ一本づつ放ち、残りの3本は落下させる。

裕奈は横廻ぎに放った爆炎で石柱を破壊、千雨はアーティファクトも利用して一重展開、真空刃によつて切断、アスナはまるまる消滅させる。残つた3本はそのまま地面に落ちて倒れ、足場となる。

足場となつた石柱の上で、裕奈は魔弾を、千雨は『雷の暴風』を、

アスナは『斬鉄閃』を放ってきた。

俺は足元に『斬岩剣』を放ち、岩を碎いて盾にして防ぐ。今度は高速詠唱を開始。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ」来れ氷精、大気に満ちよ、  
白夜の国での、凍土と氷河を。」

「『紅き炎』！」

「『白き雷』！」

「斬空閃！」

三人は気づいて攻撃してきたが、もう遅い。

「『』おる大地』！」

石柱に乗っていた三人のところまで一瞬で凍り付き、裕奈と千雨は下半身が凍る。アスナの場所は回りを凍らせ、実質下半身が凍つたのと同じ状態に。

本来なら氷柱を地面から生やし、それで攻撃する魔法だが、魔力そのものである『冥府の石柱』と組み合わせるとこんなことも出来る。魔力の変質つてどこのか？『引き裂く大地』を使えば溶岩化するし、『石の槍』で貫くことも出来るぜ。

「そこまで、だな。」

離れた場所からやって来たエヴァが言つ。とつあえず今日はここまでかな。

今は春休み最終日、場所はエヴァの家。

もちろん戦っていた場所は魔法球だ。一倍魔法球はかなり頑丈な作りにしてるからな。心置き無くでかい魔法が打てる。

「連携はそれなり、おれも何度も危ないことがあったから結構上出来だ。」

「ホントにー?」

「ああ。」

自分で使っておいて言ひのりなんだが、あの組み合わせは酷いからな。

「ただ全員とももう少しアーティファクトを使え。折角機能が良いんだからもつと上手く使いこなせないと勿体ない。」

頼りきりになるのは良くないがな。

「うーん…結構使つてたと思つけどなー…

「裕奈は攻撃重視のやつばかりだった。もつと特殊弾を使え。魔力封印とか避けざるを得ないんだからな。」

魔力封印弾は武器に当たった場合、それに込められた魔力も封印してしまう。そうなると弾くのも辛くなるし、体に当たればなら氣才ソリーでの戦いに持ち込める。

「私はどうなんだ？」

「千雨はタイミングと種類だな。捕縛魔法一連発とかも結構辛いぜ？」

千雨は主に片方サポートもう片方攻撃、か一連続で攻撃魔法、とやはり攻撃重視。

一人で戦う分には良いが、攻撃役が他にもいるならひたすら拘束しようとするほうが良い。拘束魔法ってのは一番注意を向ける必要があるからな。

一度拘束されたらそこから一重、二重と拘束されてどんどん抜け出せなくされる可能性がある。

千雨なら戒めの風矢連発、当たつたら麻痺させて風牢壁、とかな。

「アスナはあんまり言つ」と無いぜ。ただ最後のは結界を使うべきだつたな。」

「うーん…どうしても攻撃に方向が向くのよね…」

「その気持ちは分からんでも無い。が防御も大事つことだ。」

攻撃は最大の防御、たしかにそつだろ。だが、基本的に攻撃より

も防御の方が素早く出来るんだからな。さつきみたいに攻撃が間に合わないことも多々ある。

「お前みたいな例外が言つても説得力ないぞ。」

「それを言つならエヴァもだらう。『闇の魔法』で『おるせかい』を取り込んで防御の「ぼ」の字もしなかつた癖に。」

「フン。私は不老不死だから良いんだよ。多少無茶をしても問題ないからな。」

「俺は普通の人間に教えるんだよ…まあ良い。『桜通りの吸血鬼』はどうなってる?」

「寮でも良い感じに噂が広まつてゐるわよ。そろそろ行動に移しても良いんじゃない?」

「ふむ…明日は新学期の始まり、身体測定もある…つまり休むと分かりやすい…長谷川、お前が今日被害者になれ。」

「私は今田の夜用事があんだけ。やるんなら別な奴にしてくれねえか?」

「はいはーいーじゃあ私が被害者になるー。」

被害者つてのは朝に拾われてネギに発見される役をする奴。

「では明石、今日の深夜に桜通りに来てくれ。魔力を残す必要があるからな。」

「わかったよ～」

「つてかこんなノリノリで良いのかしら…？」

「別に良いだろ。ただの茶番劇だし。」

「そう言えばネギ先生が気づいてから勝負に持っていくのは出来るのか？」

「それは夜に適当に襲えば良い。ネギのことだから一度気付いたら夜はひたすら犯人を探そうとするだろうからな。」

「なるほどね～…ネギの責任感を利用することね。」

「そういひことだ。」

その後は適当に駄弁って解散、それで、明日からどうなるかな？

## ～特訓と暗躍～（後書き）

オリジナル魔法

『炎の剣』

詠唱：“来れ虚無の炎、振り払え”『炎の剣』

『雷の斧』と同じ系統の上位古代語魔法。

幅広い爆炎が前方に広がる魔法。射程距離が短いため近づく必要があるが、破壊力は『燃える天空』にも劣らないほど高い。

『風の刃』

詠唱：“来れ虚構の風、切り裂け”『風の刃』

『雷の斧』と同じ系統の上位古代語魔法。

横1m程の真空刃を数発飛ばす魔法。通過した場所は余波で強風が吹くおまけ付き。

直線的な動きで避けられやすく、相殺もされやすいが切れ味は鋭く、射程距離も長い。

## ～桜通りの吸血鬼、始まり～

SHADE グキ

『3年A組！ネギせんせー！雪せんせー！』

元気の良い声で挨拶が飛んできました。何人かはあきれた顔をしていますが。

とまあ始まつた新学期、ホームルームをそれなりの手つきですませ身体測定にとりかかる必要があるのでですが。

「それでは身体測定がありますので、皆さん服を脱いでください…」

「バカタレ」

思わず口に出してしまいました。首を掴んで歩いて廊下に出ます。あわわわとか言つてますが知りません。

「良いですか？」「ぐらー〇歳だといつてもあなたは教師で男性です。セクハラで訴えられますよ？」

ハツ、と氣づいた顔になりました。

「「」「「めんなさ」」…」

「まあ次からは氣を付けて下さい。」

「大変や……ゆーながー！」

一通りしかりつけたところで大声を上げつつ和泉さんが走ってきました。

その声を聞いた3-Aの一室は着替え中の下着姿にもかかわらず飛び出してくださいました。

「落ち着いて、明石さんがどうかしたの？」

「あ、はい…身体測定の準備のために保健室に行つたんやけど、ゆーなが寝とつて…先生に聞いたら昨日桜通りで寝とつたのを運ばれたらしいんや。」

「ふうむ…ネギ先生、先に行つて明石さんの様子を見てきてもらいますか？私はクラスを落ち着けてから向かいますので…」

「わ、分かりました！」

ネギは和泉さんに案内されながら保健室に。心なしか焦つてみえました。心配なんでしょうか…実際にはただの茶番なんですが。

「すみませんね、遅れました。」

保健室に入り、明石さんの寝ているベッド。

軽く確認すると魔法で色々と仕組んだ見たいですね。

首もとに歯まれたような後、かなり上手く作つてますね…顔色も若

干悪いですが、これも魔法。というか上手あやでしょ。彼らの魔力の残り香を全て首もとに集中させます。

はつきり行つて魔法使いなら誰でも気づけるレベルです。ネギは考えこんでます。「誰がこんなことを…」とか思つてゐるんでしょう。

「うーん…貧血で倒れたみたいですね。しつかり休んで鉄分の多い食べ物を摂れば問題ないでしょ…」ネギ先生?「…

「あ、はい。そうですね。」

それからネギは教室に戻りました。私は擁護担当の先生に伝え、残ります。

放課後、カタカタとパソコンで書類の整理。授業の進度も考える必要がありますからね。

「うーん…」

「起きた?」

「んにゃ…?雪せんせー?」

「はい、その通りです。」

「ふあ……よく寝たわ~…上手くこつた?」

「ええ。考え込んでいましたが、すぐにでも行動に移すでしょう。」

「ふーん…としたら今日が一回戦?」

「そうでしょうね。夜に寮の屋上に来てくださいな。」

月と星が浮かび、舞い散る桜を幻想的に彩る、そんな夜。

黒いロープ…今まで説明はなかつたが実は少しボロい感じなんだが  
…それを羽織つて屋上に佇む俺、殺人鬼。

こんなこと言いつとか酔つてるのかね、俺は。酒は飲んでないんだが。

後ろに魔力反応、振り向けば千雨が影のゲートでやつて来た。

「！」の感覚にはなれねえな…雪織さんか。」

「でも場所さえ把握出来ればどこにでも行けるからな。便利なもんだぜ？」

「まあたしかにそうではあるんだが。」

ゲートが普通の転移魔法と異なるのはその距離と特徴だ。基本的に距離は伸びて、なんらかの特徴を持つ。

影のゲート…闇のゲートでもあるんだが。こいつは影に潜り込むことが出来る。影から手だけ出すとかホラーなこと…もとい、不意打ちも出来るな。代わりに影のあるところからしか出れないが。

と、再び魔力反応。眩い光が突如現れ、収まったところにいるのは裕奈。光のゲートだ。

「どうちぢやーくー！」

光のゲートは転移時に眩い光を放つため、目眩ましが出来る。ゆえに奇襲をかける時なんか便利だ。転移出来る距離が最も長いのも特徴の一つだな。

エヴァクラスの魔法使いが使えば鹿児島→北海道レベルの転移が出来る。長距離転移符とか目じゃないぜ。そんな転移する意味も無いんだがな。

「まあ、火のゲートで来ても良かつたんだけど。」

「いや、結構危ねえからな？ついでに使う意味ねえし。」

「冗談だよ、冗談。」

火のゲートは転移先に火柱を発生させる事が出来る。転移は炎を介して行うから、捕まれた時とかに発動すると相手を火傷させることも出来る攻撃的な転移だ。代わりに距離は短くて普通の転移とあまり変わらない。

まあ風とか雷のゲートとか色々説明したいが、キリがないから辺で止めておくか。

「ゲートの練習にはなつただろ……と、そろそろ始まるぜ。」

三角帽子をかぶったエヴァが現れ、のんきに歩く宮崎に襲いかかる。

そこにネギ登場、『戒めの風矢』を放つ。が、エヴァの投げた魔法薬により発動した『氷桶』が全て跳ね返す。

三角帽子が飛び、エヴァの顔をみて驚くネギ。そして言い合いで。

「言い合ってる暇があるならなんかすりや良いのにな。」

「一応生徒だからな。攻撃はしたくないんだろ。」

言い争いをエヴァはうちきり、魔法薬を投げ、『氷結・武装解除』を放つ。ネギは宮崎を抱えたまま腕を突き出してレジスト、ネギは無事だったが宮崎は裸になってしまつ。

騒ぎを聞き付けた木乃香とアスナが登場、もちろんアスナは事情を知つてゐるのだが。

ネギの腕の中で裸のまま眠る宮崎を見て、木乃香はネギを吸血鬼と

勘違い、ネギは必死に木乃香とアスナに説得を試みる。

「うーん…一応敵がいるんだから背を向けちゃダメだよね…」

「まあまともに戦闘訓練やつてないってことだな。」

シリアスが崩壊した混乱に乗じてエヴァは逃走、それを見たネギは二人に宮崎を預けて追いかける。

ちなみに俺たちは浮遊術とかを利用して傍観出来る位置に適宜移動してるので。

地面を走り追いかけるネギ、追い付かれたエヴァはマントを使って飛び出す。それを見たネギは驚いて距離を離されるが、杖にまたがり一気に距離を詰めていく。

「おお〜…はやいね〜」

「だてに風魔法使つてる訳じゃないつてな。お、精霊召喚か。」

若干驚いた様子のエヴァ、すぐて魔法薬で撃墜するが落ちたのは半分ほど。

それを見たネギは呪文を唱え、『風花・武装解除』を発動、避けきれずくらつた（どうみてもわざとだが）エヴァはマントを失い落下するが、事も無げに屋上に着地。

追い詰めた、と勘違いしているネギは調子に乗っている。（ちなみにエヴァは指に魔法発動体の指輪をはめている）

「うわ～…

「ダメダメだな。」

エヴァは呪文を唱えるように言い、ネギは首を傾げつゝも唱えようとする。が、そこに現れた茶々丸が「コピンで阻止。

「ちてか「コピン」で止めるなよ…」

「うーん…子供だし仕方ないと言えばそういうのかな?」

この一人は鍛えてるから片腕が吹っ飛んだ位で呪文詠唱を止めるようなことは無いようにしている。やりすぎ?知らねえな。

その後もなんども唱えようとすると良いように遊ばれるネギ。ネギはパートナーの重要性を知ったとき。

エヴァは飽きたところで血を吸おうとネギによる。

が、そこに（予定通り）アスナ乱入。蹴りを入れようとするが足を捕まれ上に放り投げられる。

なんとか着地（実際は余裕）したアスナを見て、興が冷めたとエヴァは言つて飛び降りる。

その後は泣きじやぐるネギをあやすアスナの姿があつたとさ。

～桜通りの吸血鬼、始まり（裏）～（前書き）

指摘をいただいたので、ネギ側の動向を。  
ネギの台詞が全くないのもどうかと思いまして…

## ～桜通りの吸血鬼、始まり（裏）～

桜通り。

吸血鬼の噂が流れ、さらにはネギが注意をしたにも関わらず、それでも通る人はいるものである。

「こわくない…こわくないですよ～…」

とかなんとか言いながら歩いているのは富崎のどか。むじゅ何故こんな夜に外出しているんだ、といつ話です。

「27番、富崎のどか。」

「え？」

上方から聞こえる声。街灯にのつたエヴァがかけた声ですが、ローブと三角帽子を身に付けていたために、のどかはそれが誰かを把握できていません。

「悪いが、その血を吸わせてもらつよ。」

「ひつ…！キヤアアアアアア！」

言葉と同時に飛び掛かったエヴァ、思わず悲鳴を上げて、のどかは気絶してしまいます。

「待てーーー僕の生徒になにするんですかーー！」

悲鳴を聞き付けたのか、杖を構えて飛び出してきたネギ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」風の精靈11人、鎖縛となりて敵を捕らえよ”！『魔法の射手、戒めの風矢』！」

ためらうことなく詠唱し、勢いよく飛んでいく風の矢。

「来たか…『氷楯』」

しかしエヴァは魔法薬の入ったフラスコを投げて、魔法で跳ね返します。

「僕の呪文を跳ね返した！？」

跳ね返つた矢は地面に激突、土煙が上がります。

「ほお…なかなかの魔力じゃないか。10歳とは思えないな。さすがに奴の息子というだけある。」

そんなことを言つて、たつた今魔法を跳ね返したばかりですけどね。

「誰ですか、あなたは！僕と同じ魔法使いなのに…どうしてこんなことを！」

敵意をむき出しにして、叫ぶネギ。強風が吹き、煙とエヴァのかぶる三角帽子が吹き飛びました。

ようやく見えた顔を見て、ネギは驚きます。

「な……あなたはつむりのクラスのヒヴァンジーリンさん！？それに奴の息子つて……」

「新学期に入ったことだ、あらためて歓迎の挨拶といこうかネギ先生。先ほどの質問の答えだが、世の中にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるってことだよ。」

とかなんとか言ひ乍らですが、あまり回答になつてないですよ？  
それだと理由なしに襲つたことになりますからね？

「『氷結・武装解除』」

そして魔法薬を投げて、ネギに向かつて魔法を発動。

「うわー！」

とつたにネギは手を突き出し、レジストします。ただそれだとネギは防げてものどかは防げません。障壁を開くべきですね。

パリン、と音を立てて、のどかの服は砕け散ります。

「富崎さん、大丈夫です……わっー？」

状態を確認しようとして、ネギはのどかの方を見ます。が、そこには裸となつたのどかの姿が。武装解除をつけたんだから当然ですね。

「はっ……え……わわ……」

混乱してまともに喋れないネギ。実践なら隙だらけでアウトです。

「何や今の音ー?」

「ネギ、何がつてアンター！」

「えつー?いやー!」れば…その…」

言葉につまぬネギ。まあどうからでも犯罪者ですしね。

「ネ、ネギ君が吸血鬼やつたんかー?」

「つていうか、何してんのー!」

「ち、違いますー!誤解ですー!」

シリアスが粉々になつてしましましたが、これも実践なら隙だらけ、アウトです。

「フフフ…」

「ま、待てー!」

怪しい声で笑いながら、エヴァは立ち去ります。

「アスナさん!木乃香さん!宮崎さんをお願いします!僕は犯人を追いかけてますのでー!」

「えー?ネギ君つて早ー!」

エヴァを追いかけるために魔法を使ってのダッシュ、10歳の子供のスピードではありません。

「世のため人のために働くのが魔法使いの仕事……いい魔法使いと悪い魔法使いがいるなんてウソだ……！」

ブツブツと自分の理論を展開しつつ、猛スピードで追いかけるネギ。

「いたつー待ちなさいー！」

「早い……そういえばぼーやは風の魔法を得意としていたな……」

追い付かれたエヴァは地を蹴り、マントを広げ空に浮きます。

「杖も箒もなしに空をーー？」

驚くネギ。ですが一流の魔法使いは普通浮遊術が使えます。箒や杖は邪魔な場合も多いのです。

それはともかく、ネギは杖にまたがって空を飛びます。

「待ちなさいーーー。じつじてこんなことをするんですかー先生としても許しませんよーー！」

「くくく……奴の事が知りたいんだりつつ、私を捕まえたら話してやるよ。」

「本当ですね？」

口の端をつり上げる」とでエヴァはそれに答える。それを見たネギは行動に移る。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」風精召喚、剣を狩る戦友”！」

「分身？いや、『精靈召喚』か。」

「捕まえて”！」

『精靈召喚』を使い、自分の分身を作り上げ、それによつて捕まえよつとするネギ。

エヴァは魔法薬を投げて、半数ほど分身を消してしまいます。

「（やつぱり、この人は魔力が全然弱い！勝てる…）」

勘違いも甚だしいってところですね。魔法薬を使った無詠唱の『氷楯』で跳ね返されたのをもう忘れたんでしょうか？

魔力がない＝弱いと勘違いしている限り、馬鹿としか言えません。そういうしている内に、最後の一弾が撃ち落とされました。が、ネギは魔法を発動します。

「これで終わりです！『風花・武装解除』！」

見事に命中しました。マントを失ったエヴァはそのまま落下しますが、屋上に着地します。

実際には指輪の魔法発動体があるので飛べるんですけどね。

「やるじゃないか先生。」

「これで僕の勝ちですね、約束通り話してもうりますよ。何でこんなことをしたのかも、父さんの事も。」

「お前の父、サウザウンドマスターの事か…フフ…」

何故知っているのか、といった顔つきになるネギ。自分の父がいかに有名なのかさえ知らないようです。

「とにかく！魔力もマントも、触媒もないあなたに勝ち目はないですよ！」

「これで勝ったつもりなのか？」

呆れ顔になるエヴァ。魔力は隠しているだけだし、触媒も指輪がありますからね。

直後、屋根から茶々丸が降りてくる。当然ネギは警戒するが、誰かは分かつていいない。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい。」

そう言われ、ネギは詠唱を始めるが、途中で「コピンをつけた中断してしまつ。

「アタタ…え…? うちのクラスの茶々丸さん…?」

「紹介しよう、私のパートナー、出席番号10番、”魔法使いの従者”絡繆茶々丸だ。」

「え、ええ～っ！？茶々丸さんがパートナーーーー？」

紹介された茶々丸はお辞儀をする。

「そうだ、パートナーのいない貴様では私に勝てんぞ。」

「なつ！パートナーくらじ居なくたって！」

そういうて詠唱をするが、やはり茶々丸に妨害されてしまつ。

「今や恋人探しの口実となつてゐるが、元々”魔法使いの従者”は戦いの為の道具。私たち魔法使いの詠唱時間を稼ぐための剣であり楯だ。分かりやすく言えば護衛だな。つまり、パートナーのいないお前では万に一つも勝つ見込みはない。」

「そんな！？」

まあそもそものスペックが違う以上、勝つ見込みはないんですが。

「茶々丸。」

「はい。すみませんネギ先生、マスターの命令ですので。」

「うわつ！？」

茶々丸に拘束されるネギ。抜け出そうとするが、平然とそれを止める茶々丸。

「情けないな。サウザンドマスターならこの程度、笑つて抜け出すのだがな。」

「ど、どうして父さんの事を…」

「15年前に色々あって、奴に呪いをかけられたのだよ。おかげで15年間、魔力も封じられてずっと学生生活だ。」

いまでは全て解けているのですがね。

そしてネギに近より、血を吸おいつとする。

「…………」の変質者ビビキモード――――――

「むつー。」

「えー…きやあー！」

その瞬間、アスナが飛び蹴りを仕掛けてくる。エヴァはとっさに足をつかみ、真上に放り投げる。

「ど、ど…あれ!? エヴァちゃん! ?」

なんなく着地したアスナはエヴァを見て驚く（演技）。

「ふん…興が冷めた…行くぞ、茶々丸。」

「はい。」

そつこつて屋上から一人は飛び降りる。

その後はネギは恐ろしさから泣き出しちまご、アスナにあやされ

たとえ。

## ～襲撃？と幽靈少女～

SHADEコキ

ネギとエヴァの第一回戦が終わって3日、今私は茶々丸さんの様子を見ています。

これまでに起じたことですか？

一日前、ネギが「10歳がパートナーなんて嫌ですよね…」と発言。ホームルームの時に言つたものですから大騒ぎになりました。とりあえず、適当にたしなめて起きました。

昨日、ネギと富崎さんが仮契約をしよつとしたそうです。これはアスナが阻止したようです。なぜ「そうです」とか「ようです」とか言つた語尾なのかと言つと、私が直接見たわけではないからです。

近くにオゴジョ、ネギが「カモくん」と呼んでいたらしいので「アーベール・カモミール」で間違いないでしょう。これは今日私も存在は確認しました。

学校にペットを持ち込んでいるのには問題ありなのですが、スルーしておきました。面倒ですし。

ちなみに職員寮はペット可なのでその点については問題なしです。まあ、どうせ許可がなくても学園長がOK出すんでしょうけど。

あ、そう言えば相坂さんが見えました。今まで見えてなかつたのが突然見えるようになつたんです。…何故でしょうか？

茶々丸さんの様子を見終わつたら話してみますかね…いや、あんまり田立つても困るし夜にしましょうか。

それにしても茶々丸さん好い人ですね…人助けに猫助け。つていうかもろにブースター使つて飛んでましたね…魔法じゃなくて科学だから一応大丈夫かな…？

助けた猫を抱えて路地裏へ。それを見たネギはなんかやつてますね。あれは…遅延呪文ですか。

ま、そろそろですね…集音魔法開始。

「こんにちは、ネギ先生。」ソード出合つとは油断していましたが、お相手します。」

「あの、茶々丸さん、僕を狙うのをやめてもらえませんか?」

頭のゼンマイ…ネジ…どつちだつけ…を外しつつ話す茶々丸さん[ニ、ネギはお願いする。

「残念ですが、マスターの命令は絶対ですので。」

「うう…仕方ないです!カモくん!」

「まかせろアーキー オゴジヨ フラーッ シュ…」

マグネシウムを燃やして、発光させるカモ。少しの間カメラ機能を潰すつもりですか…実際効果はあつたよつで、茶々丸さんはふらつきます。

「『魔法の射手、光の11矢』！」

ふらつきが収まつたものの、迫り来る光の矢は避けきれない、そう感じたのか茶々丸さんは目を瞑りました。

「マスター……私がいなくなつたら、この子達に餌をお願いします……」

それを見たネギは何かを感じたのか操作を開始。

「くっ……曲がれ、曲がれ！……つわづわ……？」

曲がつた矢はネギの足元付近に着弾、ネギは爆風で転がつて壁に当たつて気絶してしまいました。

「ネギ先生……」

それを見た茶々丸さんはどこか呆然とした表情になりました。

ふむ……襲撃はこの辺で終わりでしょうね。結果はネギの自爆……まあ悪くないでしよう。

私は集音魔法を切つて、スキマに潜りました。

夜、コンビニ前、相坂さんはそこにはいました。

「相坂さん、相坂さよさん。」

「え…？いやいや、まさかたまたまですよね。私の姿が見えてるわけ無いですしね…」

「うわ…かなり卑屈になつてますね…」

「や！」こりのじやないですか。私ですよ。副担の泉野雪ですよ。」

「え…本当に、見えてるんですか？」

「ええ、もちろん。」

あら、不味い。泣き出しそうですね…やむを得ません。

「認識阻害…境界操作…転移…」

「えー？」

多少強引ですが、いつもさせてもらっています。飛ぶ場所は私の持つ特別  
製魔法球です。

境界操作でとりあえず地縛霊から浮遊霊にしました。これで存在が  
保たれます。

「よつと…」

「あれ、ここは…？」

「まあ色々と説明する必要があるのですが。とりあえず聞きたい事があります。」

「はあ……」

「相坂さん、あなたはもう一度、生きたいですか？」

「…く？」

そこからはじたすら説明。

私の持つ力（境界を操る程度の能力）を使えば、実体化させることは容易いですから。

結果、相坂さんは自分の意思で実体化、靈体化することが出来るようになります。

もつとも、実体化して体がうまく動くようになるまで半年ほどかかりましたが…

魔法について聞いてみると意外なことに「存在は知っている」との答えが返ってきました。

原作でどうだったかは忘れましたが、まあ60年も麻帆良にいえば当然といえばそうでしょうね。

で、魔法使いになるのかどうか聞いてみると「なる」とのこと。

4年半程修行しましたよ。

驚いたのは属性適性で、全てにありました。幽靈だからなのか、60年も麻帆良という靈地にいたからなのか、精靈に好かれやすいようです。

魔力？木乃香の倍くらいになりましたよ。いや、何もしないのに、ですよ？魔法球の中には魔力が多いのですが…幽靈だからなのかそれらを少しづつ吸収していくようですね…

体術はからつきしダメで、まあ靈体化すれば肉弾戦は食らわないものもあるので「完全な」魔法使いタイプになりました。

始動キーはずっと『プラクテ・ビギ・ナル』のままでですが、どうなんでしょうね…別に構わないんですけど。

明日は学園長に口籍用意させて、エヴァ達と顔合わせですかね。

～魔晄～と幽靈少女～（後書き）

急展開ですみません…

さよのことは私もすっかり忘れてました（汗）  
どうかしようと想えていたのに…何故だ。

～吸血鬼騒動中の平穏なる日々（前書き）

タイトルが最近思い付かない…

## ～吸血鬼騒動中の平穏なる日々～

SHADEコキ

よう、零崎雪織だ。雪はなんか考えたいことがあるらしく閉じ籠つてる。魔法でも作るんかね？

実は俺と雪は考へてることが伝わらないよつとすることができる。たまにはプライベートな時間がほしいこともあるからな。

さて、それはともかくとして。学園長にわよの戸籍用意しろひつたらすぐに通つたぜ。

なんか涙ぐんでいたが…アレの初恋の人とかそんなんかね？

ちなみに女子寮に空きがあつたからそこにねじ込むことになつたぜ。

他の一般人には転校生つてことで通す方針だ。それでネギに話そつかと思ったんだがない。そういうや山籠りだっけか。

たしかこのイベントで楓に魔法使いつてことがバレるんだよな…秘匿はどうしたって感じだがいまさらだな。

んで今は…

「ビリに向かつてるんですか～？」

「ヒュアンジエリンの所だ。仲間には会つておきたいだろ?」

昨日連絡いれてエヴァの所に集まるようにいっておいたからな。千雨・アスナは問題ないとして裕奈が微妙なラインだったが…特に予定も無いいらしくOKだつたぜ。

と、見えてきたな。

「靈体化して憑いてくれ。」

「はーー」

言葉通り、俺に憑くわよ。中にはユキがいるから話し相手には欠けないんだよな。さすがも始めは驚いてたがもう慣れたみたいだし。

カラソカラソ、ドベルを鳴らす。すぐに茶々丸が出てきた。

「虽然さんお待ちです。どうぞ入ってください。」

言われて中にはいる。と、すぐにエヴァが突つかかって來た。

「私を待たせるとほい一度胸じゃないか。え？」

「なんでお前がそんなのかは知らねえが。そもそも時間も指定してた筈だぜ？」

ちやんと時間は指定、それの十分前。

「マスターは昨日の晩から楽しみにしていたようだ、落ち着きがありませんでした。」

「んなつ…余計な事は言わんでいいわ！」

「そうかい。説明ありがとうな茶々丸。」

やつぱ結構子供だよな、エヴァつて。

「それにしても何があるの?」

「ああ。出てきてくれ。」

『?』

「はーい。」

言葉の意味が分からなかつたのか、首を傾げる5人。それからおれから出でくるさよ。

「ああ……そいつか。憑かせてたのか?」

「はいへそうですへでも4人は見えてないよつですね~」

「なにかこるの?雪織さん。」

「私たちにほわつぱりわかんないぜ。」

「つじかエヴァちゃんはなんで納得した顔してるので?..」

さよが見えないって」とは声が聞こえないってことだからな。

「ん~これでどうですか?」

お…驚いてるな。まあ見た目はいきなり人が出でてきたようなもんだからな。

「見えるし聞こえるみたいだな。」

「うそ、聞こえるわよ…って誰…？」

「あいつやれに聞こえたのはアスナ。

「ハイシセツのクラスの出席番号一番、相坂をよだ。やつだろ?」

「ああ。幽霊だったのを実体化出来るよつとしたからな。」

「幽霊…?」

「座らすの席、だつたか? それだよ。」

「なんか聞いたことがあるな。その席の近くで幽霊現象…ポルターガイストが起つるとか。」

「わ。その正体はこの相坂をよだつた、って訳だ。」

「へえ～制服来てるけど、もしかして通りの～」

「あ、はー。やつや～」

「じゃあ血口紹介しないとね。泉野明日菜よ。アスナって呼んでちよつだい。」

「私は明石裕奈だよ～むーなつて呼んでね～」

「私は長谷川千雨だ。呼び方は何でもいい。よろしくな。」

「絡繆茶々丸です。よろしくお願ひします。」

「これは必要なのか…？まあいい。エヴァンジル・A・K・マクダウエルだ。」

「相坂をよです～よろしくお願いします～」

（自己紹介タイム終了）。

「んで、魔法使いにしたぜ。なんか適性が全属性にあつたからな。」

「ウソー。」

「マジかよ…」

「ふむ…幽霊だからか？」

裕奈と千雨はショックを若干受けたようだ。一方、エヴァは興味があると言わんばかりの表情。

「よく分からん。麻帆良に長いこと聞いて精霊に近くなつてるのはもちろん。魔法球の中にいるときも回りの魔力を集めてたみたいだしな…」

「む…あり得ない話では無いな。60年近くも靈地に居て成仏して

ないんだ。靈核も高いかもな。」

「陰陽師の前鬼・後鬼についてか？冗談。」

「まさか。一人の人間として生きるんならそんなことはならないだろつた。そもそもお前が手を打つてるだろ？」「

「ああ。幽靈だが成仏はしないようにしてるからな。あくまで『特殊な人間』ってレベルだ。」

俺は陰陽術も使えるからな。まあ前鬼・後鬼なんて要らないからそもそも提案すらしなかつたが。ただあまり使ってないな…神鳴流と合わせてみるか？

その後はのんびりと過ごしたぜ。まあ軽く模擬戦とかやりたいっていうから1倍魔法球の中で見たりしたがな。

さて、と…エヴァとネギが戦つまでやること無いな…暇だ。

## 「桜通りの吸血鬼 ネギ v.s エヴァー」

S H D E ユキ

『放送部より連絡です。メンテナンスにより、これより学園内は停電となります。学園生徒の方は極力外出を控えるようにして下さい。』

ザザツ、とノイズが入り、放送が切れる。同時に学園中の電灯も消え、満月の光が浮かび上がる。

「始まり……か。」

俺がいるのは女子寮→麻帆良大橋にあたるルートを見渡せる高い場所。空中のスキマに腰かけている。

アスナ、千雨、裕奈、ついでにさよが見学するだろう。

全員遠見の魔法は使えるし、スタートは女子寮の大浴場であることはエヴァアが話したから知っている。おそらく千雨とさよの影のゲートを利用してつつ眺めることになるだろう。

俺が近くで見ないのは、別途の金をもらつて警備に「半」参加しているためだ。

こうしている今も全開で探査魔法と結界を利用しているんだ。だからどいつがどの辺にいるのかって位はわかる。動きがなくなつたら助けにいけばいいんだし。

「半」の意味は死者がでない程度に手助けする、漏らした奴を迎える、が任務だからだ。自分から参加する訳ではないってここだな。金があんまり出てなかつたからこうした。

はてさて、ネギとエヴァの観戦をしますかね。

S H D E o u t

「来れ氷精、爆ぜよ風精、『氷爆』！」

「わあっ！」

冷氣を帯びた爆風が起こり、ネギを襲う。直撃こそしなかつたものの、避けきれなかつたネギは髪の毛の一部が凍つてい。

「ハハハハ！どうしたぼーや！逃げるだけか？まあ、呪文を唱える暇も無いだろうがな！」

「うわ～エヴァちゃんノリノリだね…」

「てか台詞が思いつきり悪役なんだが。」

「つまり負けフラグが立つてるってことかしら？」

「でもエヴァンジョリンさんだからわざとでしじうね～」

呑気に話しながら、一人を追う四人。緊張感？なにそれ？つて感じですよ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」来れ氷精、大気に満ち

よ、白夜の国の、凍土と氷河を”…

エヴァは呪文を唱えながら、ひたすらネギを追いかける。

「『』『』『』おる大地』…」

「つわああー」

次々と生える鋭い氷柱がネギを襲う。なんとか避けしていくも、回避しきれず、橋の上を転がるネギ。

「ん?『』『』…」

「なるほど。麻帆良の端か… やるねえネギ君。」

千鶴と裕奈が口に出したこと、それは

「ふん。この橋は学園都市の端、私は呪いによつて外に出れんから、いざとなれば逃げればいい。意外とせこい作戦じやないか…え?」

「呪いは解けてるけど、かけられたままつていつ設定だつたわね。」

「なるほど～戦法としてはそれなりですね～」

本来ならエヴァは「登校地獄」をかけられているため、学園の外には出れない。そう言つことですね。

「これで決着だ、ぼーや。」

そう言いながらつむき声をあげるネギに近づいていくエヴァ。

しかし、あと数歩のところまでエヴァの足元が光る。

「むー？ これは……！」

「やつた！ 引っ掛かりましたねエヴァンジェリンさん！」

「捕縛結界か……何時仕掛けたのやら。」

「もう動きませんよ！ 堪忍して諦めて悪いことは止めてくださいよ！」

杖をもち、自信たっぷりに笑いながら宣言するネギ。

「バカだな。」

「あつちゅー……」

「バカよね。」

「バカですね……」

「クク……ハハハハハハ！」

「な、何が可笑しいんですか！？ その罠はそつ簡単には抜け出せないんですよー！？」

四人は酷評をし、エヴァは笑い出す。せめてこの間にも攻撃しつづけてことですよ。

「たしかに、普通の魔法使いなら抜け出せないだろう。だが、私を誰だと思っている?」

ミシミシと悲鳴をあげる結界。

「真祖の吸血鬼を、ナメるな。」

パキン、と音を立てて割れる結界。魔力を逆流させることで、強引に破壊したようです。

「う……あ……」

それによつて、恐れからかネギはへたれこんでしました。

「チツ……つまらん。この程度で折れるとほ、しょせんただのガキつてことか?こんなやつの父親に負けたなんて思うと嫌になる。」

「と、父さんの悪口を言わないで下さい!」

エヴァはネギに対して、効果のある挑発をかける。自分の父親が凄い人だと思い込んでいるネギは見事に引っ掛けります。

「フン……だつたら、行動で示してみることだ!」

エヴァから溢れる魔力、それに対抗して、ネギは呪文を唱え出す。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!」雷の精霊17柱、集い來たりて……」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!」氷の精霊17柱、集い來たりて敵を切り裂け!『魔法の射手、氷の17矢』!

まるで割り込むかのように詠唱を終えたエヴァの氷の矢がネギに向かう。

「『魔法の射手、雷の17矢』！」

なんとか間に合わせたネギの雷の矢が打ち合い、お互に砕ける。

「ほう、雷もつかえるか…ただ時間がかかりすぎだ…リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！』闇の精霊29柱”！」

「（29！？）…ラス・テル・マ・スキル・マギステル！”光の精霊29柱”！」

29という数に同様したネギ。ですがはつきりいつて少ないですよ？エヴァはこの10倍は優に射てますからね？

「『魔法の射手、闇の29矢』！」

「『魔法の射手、光の29矢』！」

再び矢がぶつかり合い、お互いに打ち消し合つ。

「つく…」

「ハハツ…よくついてきたな！」

とは言えネギは魔力制御が未熟で、魔力はあとわざか、対するエヴァはまだまだ余裕がある。

逆転するために、と考えて、ネギは自分の放てる最も威力のある魔法をうつことにした。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」来れ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐”！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」来れ氷精、闇の精、闇を従え、吹けよ常夜の氷雪！」

「やつぱエヴァちゃんノリノリよね？」

「だよね～わざわざ同種の魔法を選んでるんだもの。」

「『闇の吹雪』…」

「『雷の暴風』…」

それぞれがぶつかり合い、お互いの中間で止まります。均衡を保つてる状態です。

しかし橋の明かりが点きました。予定より早く停電が終わったのです。

「ぐ…」

結界の効果により、エヴァの魔力が制限、少し押されます。

「う…あああああああ！」

「うどばかりにネギは魔力を込め、威力を上げました。

「やつ……」

エヴァは舌打ちして、それに飲まれてしまいました。

「ハア……ハア……やつたの？」

「あ……そこつけ……」

「やつちやつちましたね～……」

息も絶え絶えな状態で、ネギは最後にやらかしてしまいました。

「残念だつたな、ぼーや。」

「ぐぐうーー?」

生存フラグをぶち上げた結果です。ネギは首に手刀を落とされ、気絶しました。

もつとも、吸血鬼であるエヴァはさほどダメージを受けていませんでしたので、どのみちこいつなつたでしょ？。

～桜通りの吸血鬼 ネギバナニアの裏で～（前書き）

はつきり言つて短いです。  
そしてタイトルも適当…

## ～桜通りの吸血鬼 ネギ vs ハーヴァ の裏で～

SHADE グキ

ハーヴァとネギが戦い出して麻帆良大橋の辺りか…

お、『こおる大地』ねえ。手加減してるとほ言つてもなかなか…ん?

結界及び探査魔法に反応…呪術協会の四魔か?めんどくせえなあおい。

えーっと…近くにいるのは…刹那と真名のペア。問題は…大有りか。刹那の動きが止まつてやがる。なにやってんだあいつは?

仕方ねえ。援護に行きますかな。探査魔法と結界は切つて、と。転移…影のゲート…

「はっ!所詮は忍み子。実力なんてこんなもんや。」

「うぐ…」

出たはある木の裏、魔力制御はしてるから気づかれてない。

状況?刹那が召喚された鬼に捕まつて盾にされている、結果真名が上手く銃を撃てずに硬直、といったところだな。

増えていく敵の気配を感じて焦つてゐるのもあるか。

「どうすっかな…不意打ちで良いか。

「神鳴流奥義…」

「誰や…」

「気づいた鬼がいるが知らんな。

「雷鳴剣 式の太刀」

雷光剣でも良かつたが…威力が高すぎるし、気が勿体無いからな。狙いは刹那以外、突如起こつた気の雷は近くにまとまつていた数体の鬼を消し飛ばす。

「つたく…情けねえなあ。たかがあの程度の鬼に捕まるとは。」

「あなたは…ぐつ！」

「ぐだぐだ文句を言いそうだつたので首元をつかむ。

「な、何を…」

「黙りな。今回は依頼としてやつてるんだ。こつから手を出すな。」

「しかし、あの敵の数では…」

はつきり言つて腹がたつ。せつかくエヴァとネギの試合を楽しもつとしてたのに完全に邪魔されたからな。

「怪我してまともに戦えねえ奴がでしゃばんな。真名も援護は無くていい。」

「分かつたよ。あなたなら必要無いだろうしね。」

真名が返事をしたところで刹那を放り投げる。真名は上手くキャッチ。

「なんや嬢ちゃん、儂らとやりあうつもりかいな。」

一人の鬼が話してきた。

「ああ。ここで止めるんなら良いが、召喚された手前そういうかんだろ?」

悪いが召喚された奴らには八つ当たりをさせてもらひ。

「ずいぶん威勢がええなあ。そないに自信があるんか?」

「まあな。」

どう料理しようか…久しぶりに陰陽術でも使うか。

「前」が朱雀、敵を焼く陽の火を

言葉を紡ぎ、前方に炎を放つ。

「なつ!?」

後ろで刹那が声を上げた。まさか「ん」とするとは思つてなかつたか？

勢いよく放たれた火は前方の敵を一気に焼き、土に還す。

一直線に放つたから避けた奴もいるがな。

「後四が大墓、我を守る陰の土を

襲いかかつてきた鳥族の攻撃を、俺の目の前に現れた土の壁に阻む。

「後五が白虎、敵を貫く陽の金を」

土生金。攻撃を防いだ土から金属で出来た槍が生え、鳥族を串刺しにする。

うーむ……それにしても増えるな。面倒になってきたなあ……

「後一が大陰、敵を囲う陰の金を」

再び土生金。土から無数の金属の棒が生え、敵を囲う。陰の特性の一つは抑制、そうそう壊れることはない。とはいってもこのままでは還すこととは出来ない。

「後三が玄武、敵を食らう陽の水を」

金生水。敵を囲った金は水となり、陽の持つ分解の特性により、跡形もなく消えてしまった。

空中には鬼達を分解した水がふよふよと浮いている。このまま土に

戻してもいいが、さすがに焼いた木の分は戻すか…

「前三が六合、前五が青龍、水より木を」

陽も陰も関係ない、木生水の性質を利用して、木を生やす。すこし他の木より生命力が強いだろうが、問題ないだろう。

と、停電が終わったのか、ポツポツと明かりが見えてきた。

「あの…」

「お礼はいらん、仕事だからな。」

刹那がなんか言いそうだったが、遮つて影のゲートを使う。

今日はもう休むか…どうせネギvsエヴァも決着ついたみたいだし。どっちが勝ったかは知らんが…まあエヴァが勝つただろう。

俺は自宅へと戻った。

～桜通りの吸血鬼 ネギvensHuguaの裏で～（後書き）

雪織が探査魔法と結界を切つたのは影のゲートを使つたのです。仮にも高等魔法なのでミスをしないよう心がけます。

～古事記の学園旅行～（前書き）

修学旅行へのつながり細つてしまひえざみ。  
短めです。

## ～ナギの死なない学園最後～

SHADE ノキ

「修学旅行の京都行きは中止…？」

学園長室に響くネギの声。ネギｖｓヒガアの結果、喫茶店のイベントは起つませんでした。

ナギの生存？ヒガアにはネギの持つ杖について説明しておきましたよ。アレは6年前にナギが渡したものですから。

ついでに言えばアルのアーティファクトは生きてるんでナギは確実に生存してるんですね。

んで、ネギはナギの隠れ家が京都にあることをガトウから聞いたようですね。

おっと、わゆりさんは病氣で休んでいた、ところどころおもあした。

たくさんの人から話しかけられて、嬉し涙を流してましたよ。

「これこれ、話はまだ終わつといふだ。」

そつ話す学園長。ヒガアが落ち込んで帰らつてしまつたんでしょ。

「まだ中止とは決まっておりん。ただ先方が嫌がつておつてのう…」

「先方？京都の市役所とかですか？」

「いや、違うぞい。先方の組織の名前は関西呪術協会じや。やじじ。

あ、説明するの忘れてました。これ盗聴です。

魔法じゃなくて境界操作による盗聴なんぞ、ばれることはあり得ません。

おそれく私に伝わると反論をされるとでも考えたんでしょう。私には一言も伝わってません。

「関西呪術協会？」

「僕は関東魔法協会の理事をやってるんじやが、魔法協会と呪術協会の仲は悪くてのう… 今年魔法先生が行くといつたら難色を示したんじや。せん。」

「えー…じゃあ僕のせいなんですか！？」

「はい、その通りです…と言いたいところですが…瀬流彦先生も魔法先生ですからね？ってこれはネギは知らないんでしたね。

「ああ、私の名前出せば確実に〇〇もらえると思つんですねよ。神鳴流を修めている+トツプレベルの陰陽術師もやつてます。私は呪術協会での立場も結構高いんですよ？」

「理由ですか？」（麻帆良）にくる1年前くらいにずっと詠春の所に居ましたからね。それ以前に木乃葉さんの命を救ったという功績

もありませし。

「儂としては喧嘩は止めたいんじゃ。それでネギ君には西への特使になつてもらおうと思つ。」「

これつて結構な侮辱行為に見えなくもないと私は思つのですがね。たかが10歳の子供に親書を運ばせるとか。内容もアレですしどうなんでしょう？

「この親書を届けるだけで良いんじゃ。まあ向こうからの妨害もあるかもしけんが、一般人を巻き込む真似はせんじやう。大変な仕事にはなると思うが…どうじゃ？」

見通しが甘過ぎですね、学園長。過激派をなめてますよ。

「分かりました。任せてくれさー」学園長

ネギの返事。親書を受け取ったようですね。

「わーいわーい…京都と言えば木乃香の生家があるんじゃが…」

「はー?」

む、呼び止めたよつですね。

「魔法のことはバレとらんじゅうつな?儂は構わんのじゃが、親の意向での。なるべくバレんよつたのむせい?」

「わ、分かりました。」

バタンと音が鳴つました。ビーフやら終わつたみたいですね。

「 実際にば雪君の名前を出すと文句も収まつたんじゃが…なんでじや わづの~。」

わづも説明した通りですよ?詠春から何も聞いてないんですか?

「まあ良こじやね。ネギ君の成長の妨げにならう」とはあるまじ。

「ううえますか…まあ私は悪こよにほひませんよ。実際にじうなるかは知りませんけど…ね。

録音したテープを回して。

「 じまあいこな感じです。」

「ふむ…まああの爺のやつだな」とだな。」

「 じわこわいとだ~。」

千鶴ちやんがヒガマの言葉に質問する。

「一般人を巻き込むかどうかは分からんとしても、親書をもつたぼーやに対しても妨害がくる可能性は高い。相手の力量にもよるが、経

「でもそもそも親書をもつてるかどうかが分からんんじゃないの？」

？」

裕奈ちゃんの疑問はもつともではありますね。

「可能性はありますが、考えにくいです。詠春のことですからあらかじめ下に伝えておくでしよう。」

「詠春って甘」というがあるからね。そもそも自分の部下が妨害する可能性すら考えてないかも知れないわね。」

「でもよ、その詠春って人は呪術協会のトップなんだろ？ 部下をまとめておぐぐらいするんじゃないのか？」

たしかに、普通ならそうですね。

「詠春はたしかに呪術協会のトップですが、詠春の考えをよく思つていらない派閥があります。」

「近衛を関東に送ったからか？」

ちゃんと魔法界の常識は教えているんですよ。知識は力になりますから。

「ええ。その派閥は過激派と呼ばれます。文字通り過激な手段で木乃香を関西に戻そっとしますね。

一方の詠春は親関東派とでも言いますか、関東魔法協会との仲を修

復しようとする派閥ですね。

「後は中立派もいますね。どっち付かずって奴です。」

「つてことは、親関東派の人たちと中立派の人たちは従つても、過激派の人たちが暴走することはありえるってこと?」

「そう言つことです。」

「魔法協会の親書なんていらないからネギを襲撃する。それと一緒に木乃香の誘拐とかもあり得るかもね…」

「あの護衛もどきはどひするつもりだ?」

「エヴァ…なかなか言いますね。護衛もどきとせ。むちむん刹那さんのことですか?」

「この際誘拐されて自分の未熟さを知つてもうのも良いかも知れません。まあその前にアスナが止めるでしょうが。」

「さすがに手に負えなくなつたらユキも手伝つてよ?」

「ええ。可能な限り手助けしましよう。死の危険に陥りそうになつたら。」

「まあ死ななければどうにかなる…かあ。」

さすがに死の危険に陥つた場合は助けますよ。

さて、修学旅行はどうなるでしょうね。

## ～修学旅行、始まり～（前書き）

修学旅行のスタートです。  
導入という感じなので短いですが…

## ～修学旅行、始まり～

SHIDEコキ

修学旅行1日目の始まり、大宮駅です。

現在時刻は8：30、教師陣は集合が早めで、打ち合わせ的なものがありました。

今はのんびりと生徒達が集まるのを待っている訳ですよ。

ちなみに真っ先に来たのはエヴァと茶々丸さん、今現在もテンションが異様に高いです。

まあ今まで修学旅行にすら行けなかつたので、それを考えるとそこまで不自然ではありませんが。

ただ、高笑いをするのは止めてください。目立ちすぎるのはよ。肉体年齢10歳の幼女が「フハハハハ！」とかいう笑い方するとか。

若干茶々丸さんが引いているように見えます。

さて、30分が経過、生徒がそろいました。

クラスはA・D・H・J・Sの5クラス。私が指示を出して点呼を取りました。ネギ、仕事してください。私の役目じゃないですよ。

班の構成ですか？

- |    |                   |
|----|-------------------|
| 1班 | 柿崎・釘宮・椎名・鳴滝姉妹     |
| 2班 | 春日・古・超・葉加瀬・四葉     |
| 3班 | 朝倉・那波・村上・雪広・ザジ    |
| 4班 | 明石・和泉・大河内・佐々木・龍宮  |
| 5班 | 綾瀬・近衛・早乙女・桜咲・富崎   |
| 6班 | 相坂・アスナ・絡繆・長谷川・エヴァ |

こんな感じです。

1班、2班、4班は原作通り、3班は千雨ちゃんが、5班はアスナが抜けました。

原作だと6班はエヴァ、茶々丸、ザジ、刹那の4人でしたがそこはまあ色々あってこんな感じに。

刹那さんは龍宮さんに護衛関係のことで説得されて5班です。

まあいまでもよそよそしい態度をとっていますが。

まあこれから修学旅行のスタートですね。様々なイベントが起ころうでしょうが、頑張りたいところです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5019y/>

---

とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

2011年12月27日21時50分発行